

創立60周年 記念誌

同志社グリークラブ

創立60周年記念誌

目次

巻頭言 遠藤 彰

六十周年をお祝して

○ 住谷悦治(一)	○ 秋山日出夫(三)	○ 関学グリー(六)
○ 上野直蔵(二)	○ 長井 齊(四)	○ 慶応ワグネル(六)
○ 高山義三(二)	○ 清水 脩(五)	○ 早大グリー(七)
○ 文 連(三)	○ 津川 主一(五)	○ 立教グリー(八)

想 い 片桐 哲 (九)

創立五十年の歩み (一一)

想い出の記 (二五)

○ 四十年前のグリーの話	大中 寅二	(二五)
○ グリーやプリムローズの思い出	西 邨 辰三郎	(二七)
○ グリークラブの六十周年に想う	松 本 寛二	(三一)
○ 昭和二十八・九年のグリークラブ	河 上 文 久	(三三)
メッセージ	米 国 大 学 (グリークラブ)	(三六)

○	アーモスト大学	○	レバノンバレー大学
○	カリフォルニア大学	○	イエール大学
○	ハーバード大学		
訪日海外グリークラブとの交歓演奏会			
	森	田	秀夫
	……………		
	(三九)		



五十一周年から六十周年の歩み (四三)

○ 楽しい想い出	寒河江 正		(四九)
○ サルマスの全国優勝	大河内 俊彦		(五一)
○ 五十五期委員会を回顧して	大谷 九二男		(五三)
○ 一つの時代	横田 義		(五五)
○ 第五十七期委員会	中島 英嗣		(五八)
○ あゝの頃	和氣 豊夫		(六〇)
○ 試石と踏み台	土生 邦彦		(六五)

座談会

グリーを語る	司会	日下部 吉彦		(六八)
.....		福永 陽一郎		
.....		大久保 昭男		
.....		中村 博之		

同志社グリー六十周年に思う (八四)

一つの 伝統 への期待	福田 哲雄		(八四)
クラブとゼミナール	高橋 悠		(八六)

現状報告 (八七)

プロック制とそれにとりまう	関口 省吾		(九〇)
規制についての経			

六十周年事業報告	小室 泰司		(九二)
.....			

小 亀 豊			(九二)
.....			





ヴィーンにて		遠藤 彰	 (九六)
ロンドンにて		今藤 繁	 (九七)
私の役割とグリーの将来		福永 陽一郎	 (九八)
クローバークラブ十年間の歩み		松本 寛二	 (一〇〇)
合唱生活を楽しんで四十五年		橘 威	 (一〇三)

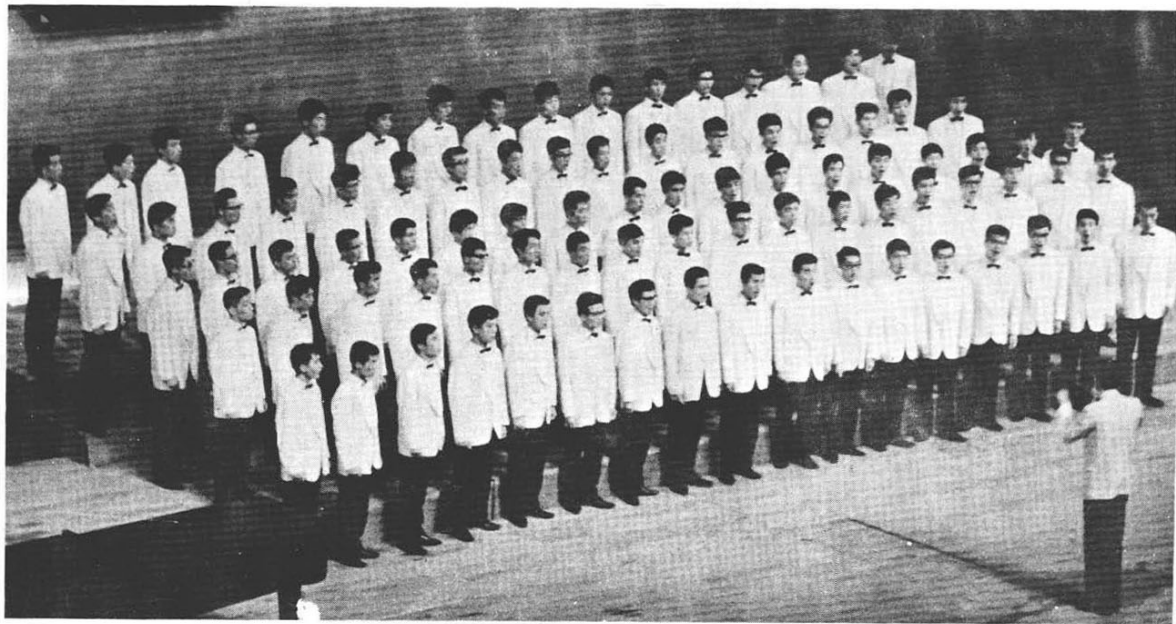
プロフィールム

カレンソン	 (三六)
Hail Our Glee Club の由来	 (五一)
渋谷昭彦	

編集後記

.....	(一〇五)
-------	-------





同志社グリークラブ

第13回 東西四大学合唱会より
1964年6月
於大阪フェスティバルホール



グリークラブ創立者

片桐先生夫妻

1964年10月

自宅にて

グリークラブ東京演奏会

賛助出演クローバー
クラブ

於日比谷公会堂

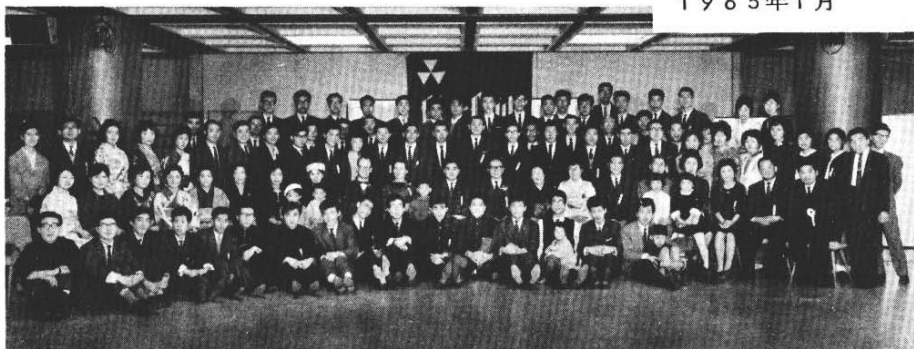
1962年12月



グリークラブ・クローバークラブ合同新年会

於京都国際ホテル

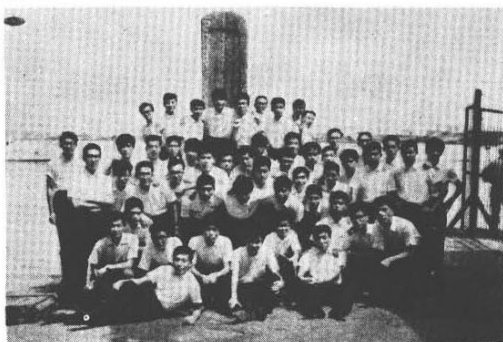
1963年1月





春の演奏旅行

1956年3月 広島



夏の演奏旅行

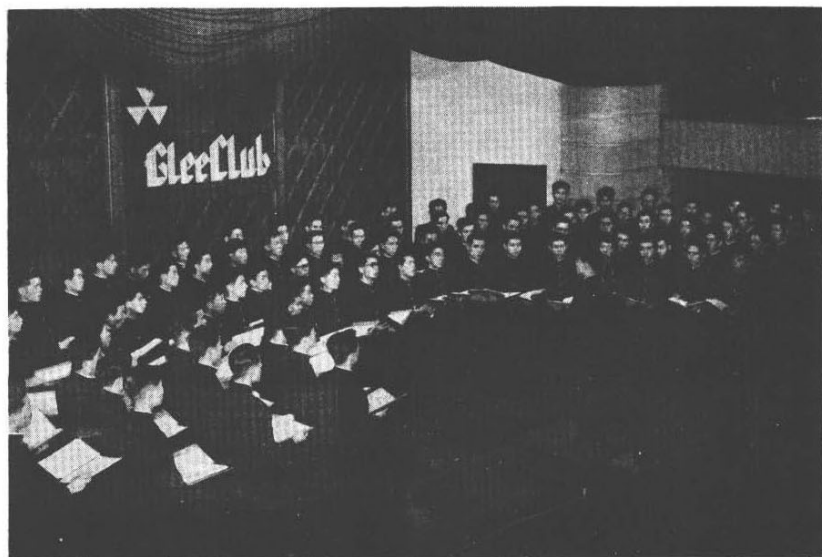
1964年8月 函館

同志社創立80周年記念
特別演奏会

1955年10月

於 栄光館

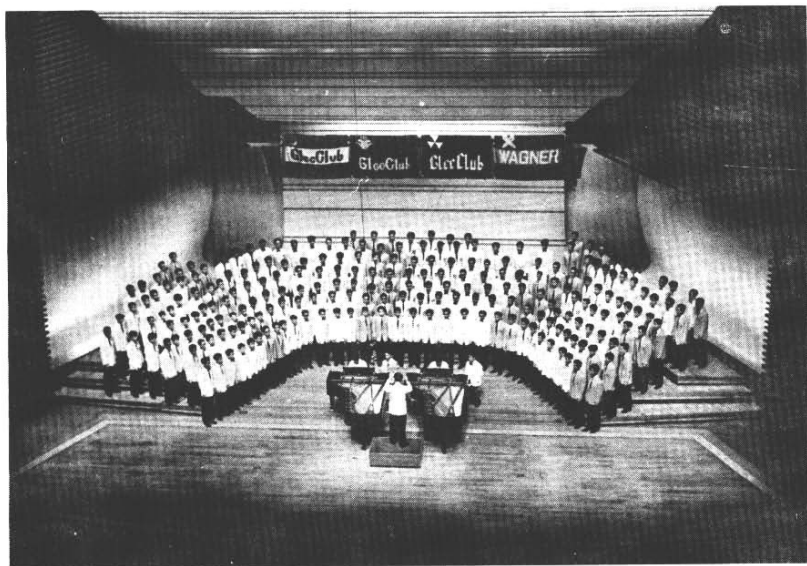
ステージコート使用前の演奏会姿



第 1 2 回 東 西 四 大 学 合 唱 演 奏 会

1963年6月22～23日

於 東京文化会館



フェアウェル コンサート

1963年3月

於 京 都 会 館



卷頭言

グリークラブ顧問

遠藤 彰

歌は魂のいぶきである。魂とは人間内面の世界であつて、ここは本来、自由の世界である。歌はこの世界の自由ないぶきである。そして、この自由ないぶきが、厳格な規律と徹底した訓練を通して一致と調和において歌われるとき、合唱という芸術が成りたつ。

同志社は、何よりも人間内面の世界を大切にする自由の学園である。そして、そのような基本点に「志」を「同」じくする者たちが、そのような自己形成にひとしく努力する「社会」である。自由と一致とが、つねにダイナミツクに追求してくれる学園である。

グリークラブは、この「同志社」において、このような「同志社」の歌を六十年の間歌いつづけてきた。明治大正昭和にわたるこの年月は、近代日本の形成途上のまことに多難な時期であつた。それは、日本における自由の精神の追求の歴史であつたといつてもよい。グリークラブの歴史は、あらゆる思想的社会的障害を克服して発展しきつた同志社の一つの輝かしい象徴である。

還暦によつて人は十千十二支を一還し赤子に戻る。そこには新生の意味がある。グリークラブでも、ここに新らしく、自由な魂のいぶきの唱和を次の時代にもまた示しうる理念と力とを与えられたいものである。

(同志社大学神学部教授)

六十周年をお祝して

同志社総長

住谷 悦治

戦後新しい教育制度が実施され、各地に多くの大学が設置され、教育人口が急激に増加しました。高等教育、専門教育を受けるものが多くなつてきましたことは誠に喜ばしいことです。ところでわれわれ教育に携わるものは現在の大学がどのような教育的役割を果しているか、新しい教育を受けた卒業生たちがどのように時代の要請に応じた活躍をしているか謙虚に反省しなければなりません。

今春早々の学費増額反対の激しい学生運動、目下行われている学友会委員の改選、学外における学生のデモ等、また卒業生の就職先である関係者からの意見などを聞いて感ずることの一つに現代の学生たちがいかにも自己主張に急であり相手の立場に冷静な態度で耳を傾ける襟度（きんど）に乏しくこのため周囲の人たちへの顧慮が充分でない点を短

所として感じます。自らの主張を正しく表現できることはよいことで、戦後国民の一人一人が自主性を持つようになつたことは、新時代に歩調をそろえようとするわが国民性の進歩と言えましょう。これまで、余りにも個人が押えられてきたため、かえつて現在反動的に自己主張が強くなり自意識過剰にすぎたことは理解できますが、今の姿が必ずしも堂を得たものとはいえません。自己主張も調和が必要で、お互を認め合わなければなりません。

よくひく譬えですが大樹は地上の太い幹、大きな枝、ひろがつた無数の梢さらに地上と同一幅をもつて伸張した四方に地上と同じ根があり、これらが大小さまざまな根として安定した存在が可能なのであります。根の張りの貧弱な樹木は風に倒れます。冬に木の

葉が散るのも自衛のためとはいえ、氣候との調和をとるためであります。このように自然は人類の調和を保つていきます。太古から人類も調和を求めてきましたが或る意味で、現代はど全人類の調和が望まれているときはないのであります。

音楽の生命は調和にあります。中でも合唱はコーラス各メンバー各パートの独善独走は許されません。コーラスの各メンバー各パートの美しい調和があつてこそはじめてその合唱に生命があることは今更とりあげていうまでもありません。

グリーククラブでは声の調和、心の調和をモットーとして多くの諸先輩の努力、精進によつて輝かしい六十年の伝統を培つてこられました。これら諸先輩の努力に心からの敬意を表するとともに美しく立派なこの伝統を受けついで現部員がいよいよ自覚され決意を鞏固にされ、ますますグリーククラブが発展されることを切望いたします。またこの伝統調和の心が学園一杯に充滿しわが国民を、さらにひいては全人類を調和に向つて推しすすめる働き（はたらき）となることを祈つてやみません。

同志社大学学長 上野 直蔵

「グリークラブが創設されて今年が六十周年」に当たるといふことであります。同志社が今年創立八十九周年を迎えるのでありますから、同志社の歴史の三分の二とともに過ごしてまいつたというわけであります。六十年といえは人生では還暦に当りおめでたいことであります。この間、永々と築きあげられた多くの先輩諸氏の感慨はいかばかりかと思うのであります。

当初はといふと、それは明治三十四、五年のことでありましたが、当時はほんの小さな、讃美歌を練習するためのグループであつたようであります。それが十年ばかりの年月を経て、ブリームローズであるとか、聖歌隊であるとかのグループに分かれ、また、戦後にいたつて合同し、今日のグリークラブの隆盛の基を築いたと聞き及んでおります。

そのブリームローズと呼ばれる合唱団の生まれます少し前の時期にグリークラブという名が命名されたようであり、ますから、それは、おそらく明治の末

年にあたる頃でありましょう。それから幾星霜、多くの試練を経て今日見られるようなグリークラブとなつたのであります。こゝで門外漢であるわたしが、いわゆるグリークラブの生いたちをのべる愚はいたすつもりはございません。しかし今日ほど、音楽が人々とともにあつて、人々の生活の中にとけこんでいる時期はかつてなかつただらうと思ふのであります。「歌は世につれ、世は歌につれ」と申します。グリークラブのような高踏的な雰囲気をもつ合唱団にこの譬は失礼であるかも知れませんが、まさにこの譬の通り、三木露風が愛唱され、大中寅二が歌われ、フオスターや黒人霊歌が歌いつがれてまいりました。

数多いクラブの中でその歴史を誇り、光彩をはなつてゐるのは、多くの人々の暖かい支援のたまものにはかならないと思ひます。この上とも、宗教曲はもとより広く人々に膾炙され、親しまれる曲をますます、歌いつづけてもらいたいものであります。

創設六十年を記念して、一ことよろこびを申しあげる次第であります。

京都市長 高山 義三

同志社グリークラブは、私の中学時代から知つてゐる。

私の兄、故中村信次郎が同志社グリークラブの一員であり、その親友で今ロータリークラブで中心になつて活躍してゐる堀内清氏もメンバーであつて、よく合唱のけいこをして居つたのを覚えてゐるからである。

私は、京二中で学校もちがつたし、又、元来音痴であるのであまり興味をもつてゐなかつた。しかし、後年、市長になつて、京響のもつ力を知るに至り、自分は歌えないまでも、市民が音楽を愛し、殊に、家庭によい音楽を入れたいという考えをもつて、遂に京響をつくり、少年合唱団を組織することになつた。

その当時、小学校の子供が、「知らぬ筈だよ、お富さん」という流行歌をうたつてゐる事を耳にして驚いたものである。勿論、子供達は、お富さんが何物であるかを知らないとしても、子供たちがその歌の意味を知つても恥しくない、清潔な歌が、子供の口からう

たわれてもよさそうなものだと考えた。それには家庭の主婦によい音楽をあたえ、お母さんの口から子供たちにむく音楽を聞かせる事が一番よい。今日、P、T、Aコーラスといえ、全市の各小学校に組織され、毎年十一月に京都公会館で行なわれる交歓音楽会には、三千人も集まると聞いている。その他マゼース、コールというのがあつてPT、AコーラスのOBで組織しているものもおもしろい。

同志社グリークラブの京都音楽界における大きな存在は、六十年の長い歴史が培った成果であると常に敬意を払っている。

記念誌を出されるにあたって、心から祝意を表する。

同志社大学文化団体連盟

同志社グリークラブ誕生六十周年を迎えられ、心よりお喜び申し上げます。我が同志社の創立されたのが、今から八十九年前、はやくも来年は九十周年を迎えようとしておりますが、創始者新島先生の「一こころ」を今なおしつ

かりと受け継ぎ、あまたあるサークルの中でも、とりわけ歴史深き六十年の伝統をもつグリークラブは、今日ある同志社の音楽面の隆盛を築き上げたのはもとより、広く同志社文化創造の立役者として、同志社の歴史にその名をとどめているのは、万人の認めるところであります。

又、格調高きその演奏は、学生音楽界に於てその範たる面目を保ち、全同志社人に愛され親しまれ、京都市民にも、定期演奏会等を通じて、親しまれているということは、実にグリーメン各人の人格の高さにつぎるのであります。ようし、又、それによつて対外的な同志社文化の発揚にも、大きく寄与していることは、我々同志社人共通の喜びなのであります。

常に全国の学生合唱団の最高峰として、指導的地位にあるグリークラブは、我が同志社の誇りとするクラブであります。

それ故、あなた方各人に課せられた責任は、重く、合唱を通じて、あなた方自身、立派な同志社人としての人格を形成すると共に、それを、ハーモニでもつて表現する「グリークラブ」は、直接目に映る同志社精神の姿とな

るからなのです。

今後共、それら自覚に基き、心技共に充実した、立派なクラブになるよう努力されんことを切望すると同時に、同志社グリークラブの一層の発展を祈つて止みません。

秋山日出夫

創立六十周年、驚歎すべき長い伝統を誇る同志社グリークラブの記念号にお祝いのごことばをのべることが出来てうれしく思います。

今日でこそ日本の合唱界も世界の仲間入りが出きる程、数多くの団体、合唱人口をもつ程に成長してまいりました。優秀な技術をもつて海外への進出さえもみられる段階に到達しています。合唱生活が長いといわれている私でも合唱をはじめたのが大正の末期ですからやつと四十年ということになります。ただ是非申し上げなくてはならないことがあるのです。それは合唱することに入つた動機が同志社グリークラブには誠に密接な関係をもっているということです。

大正の末期私は当時東京芝にあつた

吉村商会という会社にあつて機械設計部員として働いていました。ところが時を同じうして入社して来たのが同志社大学出の色の浅黒い背の高い恐らく皆さん方も御承知の山口隆俊さんです。関西弁でよくかれて合唱団づくりに骨をおるようになりました。私の仲間数人を集めて細々ながら男声合唱が始められたのです。来年四十周年記念演奏会を企画している東京リーダーターフエルフエラインが誕生したわけです。山口さんが満州其の他の演奏旅行の話を通してクラブの活躍ぶりもよく聞かされたものです。

本当に限られた人達のみによつてなされていた当時の音楽界にあつたためみなく先駆者としての役割を果たして下さった同志社グリークラブの功績を私は高く評価させていたといっています。ながいながい同志社グリークラブの伝統は盤石の体制を築いて百年記念を考へることも夢ではないでしょう。がんばつて下さい。大きくゆれる今日の合唱界の動行にも動ずることなく確とした支柱を堅持して輝けるグリークラブ名譽のため、ますます健闘遂進することを祈つてやみません。

長井 齊

同志社グリークラブの六十周年と云うことになりましたと、勢い昔話しがしくなります。

私が初めてグリーの演奏を聴いたのは、今からもうざつと半世紀も前の一九一五年頃のことです。当時のグリーは二十人か精々三十人までの編成でしたが、王としてアメリカのカレツヂ・ソング風なものを歌つていました。「ビングボー」や「リトリーア」などと云う搖籃期を経て、大正十年（一九二一）の学生連合音楽会では、ウエルナーの「二つのバラ」やグノーの「グロリー・アンド・オーナー」等が歌われ、漸やく技術の向上が顯著になつて来まして。私所持のプログラムには九二点が最高）その時代には故太田黒養二君（後に渡仏バンゼラに師事）が参加していましたので、宝塚で催されたコンクールに優勝したのもその頃でした。それとは別に、グリー出身の有名な四重唱があつて、遠く満州にまで演奏

旅行をした事がありました。今のダイクダックスよりもつと生気に溢れていて、ジェスチュアを交えた「アングル・サム・パーティー」ではオルガンのハーモニイやバンジョーの擬音まで出した演奏が、まだ耳の底に残つてゐるようです。現在まで私が合唱に夢中になつてゐる遠因がどうやらこの辺りにあつたような気がしてなりません。そんなわけで私には一々名をあげて居られない程、グリーには多くの知己があることを秘かに誇りと思つて居ります。それにつけ、いつも考えさせられる事なのですが、グリークラブと云うものには必然的にその学校生活が反映してなければ存在価値が小さいと思ふのです。合唱団は一つの大きな総合人格なのですが、同志社の場合は、更に伝統のある力強い背景によつてカヴァーされている事に自覚と自信を持つて頂きたいと願うのです。これがあるが故にこそ、同志社グリークラブは将来益々その風格を高めるのであらうことを期待するものです。

清水 脩

あれはたしか、私が大阪外語の二年生の秋だつたと思う。今から、三十四年前である。

関西の大学、専門学校のグリークラブが、十校ばかりで、関西学生合唱連盟というのが結成され、十一月三日を期して、始めて学生合唱団ばかりの合唱祭をひらいた。外語のグリークラブに熱中していた私は、先輩の尻にくっついて、連盟結成のお手伝いをした。同志社グリークラブもその一員であつたのは、言うまでもない。

その頃から、いや、それよりずっと以前から、関西の大学合唱団といえ、関西学院グリークラブと同志社グリークラブは、群を抜いていた。それでもその頃の大学合唱団のメンバーは多くて五〇名、大方は三〇内外であつた。このごろのように、百名、二百名というのはなかった。また、曲目も、ごく易しいものばかりで、せいぜい、メンデルズゾーンやジルヘルの小品が中心であつた。そういう中であつて、同志

社グリークラブは時々、野心的なプログラムで、私を驚かせたのを憶えている。

その同志社グリークラブが、早いもので、今年、創立六十周年をむかへられた由、その歴史はそのまま、日本のアマチュア合唱の歴史といつても過言ではない。勿論、この六十年は、常に平坦な道ばかりではなかつたであらう。明治、大正、昭和の三代の歴史がそうであつたように。

そして、この記念すべき時を迎え、若人の特権ともいうべき、あくなき探究心と、果しない希望をもつて、輝やかしい伝統をしつかりと踏まえて、一段の飛躍をなされるよう、祈つてゐる。

津川 圭一

わたくしの少年時代に、合唱の手ほどきをして下さつたのは、近藤優という牧師さんであつた。この当時若かつたテナーの牧師さんのことは、わたくしの近著に写真入りで述べてあるが、この先生は同志社で片桐先生などとともに、同志社グリークラブの大先輩で

あつた。たゞ不幸にも、ご恩返しができないうちに亡くなつてしまつた。しかしこの近藤先生の妹君が、わが関西学院のグリークラブの大先輩の名ベイス伊東平次牧師の夫人として、今なお健在で伊豆の八丈島で伝道されておられる。わたくしの近著を大変に喜んで下さつた。この妹君が、当時わたくしたちの下手なコーラスの伴奏をして下さつた。わたくしの合唱熱はそれから関西学院へ移つて燃え抜かり、とうとう今日のように合唱と共に生き、合唱とともに死ぬであらうことにまでなつたわけである。

今でも、よい合唱曲を調べたり、演奏したりするためには、どんな犠牲を払つても惜しくない気がする。しかしこれはみんな同志社グリー近藤先生のせいである。この点でわたくしの幼な心を開眼して下さい。同先生の霊に感謝しても感謝し切れない気持ちである。その代り、自分の生命を捧げつくしたこの合唱に、限りの生命と愛着と、尊敬をもつてゐるわたくしは、面白ろ半分や、遊び半分や、為めにするところあつて、合唱を利用してゐる輩をみると我慢ができない。そんなわけで、学生のくせに小利好

に立ちまわつたり、売名や社交に汲にしている連中をみると地獄へ行きたくなる。そんなやからに芸術神（ムーゼ）は、決して美のたまものを下し給わぬであらう。

いろんな意味で時を得るも得ざるも、合唱美を追求している同志社の連中が、わたくしは妙に好きなのである。

関西学院グリークラブ

日頃から我々の敬愛いたしております同志社グリークラブが、創立六〇周年を迎えられた由、関西学院グリークラブ一同心から御悦び申し上げます。申すまでもなく、同志社グリークラブはその長い歴史と輝かしい伝統が示すように、創立当初より、常にわが国の合唱音楽の先駆者として活躍され、今日の不動の地位を築き上げてこられました。

ときにはライバルとして対抗意識を燃やし、又ときには兄弟のように仲良く励まし合つて来た、同志社グリークラブと関西学院グリークラブも、その源は等しく、讃美歌を歌う小グループ

に端を発しております。

互いに異つた校風と歴史を持ちながらも、両校に共通するバックボーンは、ミッシヨンスクールであるという点であります。

近頃、大学の合唱活動のマンネリ化という声をあちこちで耳にいたしますが、私達はいたずらに伝統に甘えることなく、この頭打の状態から一日も早く脱し、天井を突破る努力をしなければならぬと考えます。

六月には四大学で又顔を合わせますが、今年は地元で行われることでもあり、お互いに関東勢に負けない立派な演奏をしたいものです。

三年前のクリスマスの才一回ジョイントコンサート、昨年の才二回と、回を重ねるにつれて、我々の「俺とお前の仲」にも親密の度が加わっているように思われます。

近いようでも京都と上ヶ原にはかなりの距離があり、平素は接する機会も少い我々ですが、共に合唱芸術の追求を志す者として、今までに培われ、深められてきた我々の友情がいつまでも変わらぬことを信じ、貴グリークラブの今後の御発展を祈つて、六十年のお祝いの言葉といたします。

お互いに合唱界発展のために力を合せて頑張りましたよう。

慶応義塾ワグネル

ソサイエティ男声合唱団

創立六〇周年心からお祝い申し上げます。

六〇年という長い間、よりよい合唱音楽の創造を目ざして、幾多の困難を乗り越え、今日のりつばな伝統を築き上げられた同志社グリークラブの皆様への御努力に対して、心から敬意を表したいと思ひます。何事によらずひとつの目標をかかげ、それを最後までやり遂げるということは、非常に困難なことです。特に学生の合唱団に於ては、毎年メンバーが入れ変わる関係上、その技術的、精神的伝統を築き上げ、さらにそれをより発展させるということとは、先輩から後輩へと長い間受け継がれてなし遂げなければならぬ、ひとつの大きな課題であります。この様な難事を、見事に達成された同志社グリークラブは、六〇年という年月の間に、若人の意気と情熱を常に失うことなく、それぞれの時代に種々の困難に対処さ

れ、ひとつひとつ着実に歩んでこれた結果が、今日この様な成功となつてあらわれたのではないか、ということをおぼろげに想像するのは容易なことではありません。同志社グリークラブの皆様と私達は四連をはじめ学園祭などを通じて、親しくおつき合い願っています。殊に毎年東京と関西で行われている四連の演奏会では、単に歌うことだけに止まらず、共に親しく語り合い、また合同演奏会では共にひとつの音楽を築くべく、厳しい練習を通して、共に感激をかみしめ、相互理解を深めています。この様な相互理解に立つて四校全てが力を結集するからこそ、四連の演奏会が年毎に盛大に、かつ充実しつつあるのではないかと思うのです。同志社グリークラブと私達のワグネルとはむしろ全く異つた伝統と寮囲気を持つて居ります。しかし各々異つた活動をしているが故に我々は同志社グリーがどんな活動をされているかということ、常に注目しています。

これからも相互理解に立つて共に日本の合唱界発展のために少しでもお役に立てれば幸いと考へて居ります。最後に貴合唱団のより一層の御発展を、心からお祈りして居ります。

早稲田大学 グリークラブ

グリークラブ創立六〇周年おめでと
うございます。

ひと口に六〇年と言ひましても、それは貴合唱団にとつて、多くの努力と忍耐とを惜しみなく注ぎ込まなければならなかつた長い年月であつたに違いありません。明治三五年頃といへば、世間の合唱に対する認識など、まだまるで無かつた時代かと思ひますが、そんな頃です。グリークラブを創立されたといふとは、全く驚ろくばかりです。やがて日本を襲つた第一次、第二次の世界大戦も、部員の方々の音楽に対するひたむきな情熱をさますことはできなかったのではありません。終戦後、冬のあいだ雪の下に身をちぢめていた草花が雪どけとともに一斉に芽をふくように、日本のあちこちで、多くの合唱団が活動を始めました。そして、合唱を愛するものにとつて、まさに我が世の春とも言うべき時代となつたのです。この頃からすでに、貴合唱団の御活躍はまことにめざましいものでした。とくに合

唱コンクールにおいて輝やかしい成績を収められたことは、同じ学生合唱団である私達に、どんなに大きな励ましを与えて下さつたことでしょうか。

昭和二十七年に、東西学生合唱界の交流を目指して、同志社、関西学院、慶応、早稲田の四大学合唱団が一堂に会して、各々の特色を發揮し、技術を競い合うようになりましたが、これは参加した各校にとつてのみでなく、多くの合唱愛好家の方々とつても又、画期的意義のあることであつたと申せましょう。何故なら、今年です。十三年目を迎える四連は、木下保先生、福永陽一郎先生を始め、数多くの先生方の御尽力、又各校のメンバーの努力によつて、今ではわが国で屈指の合唱演奏会であるという名声を獲得するまでに成長したからです。この四連を通じて、私達早大グリークラブも実に多くのものを学びとることができました。貴合唱団の音楽に対する敬虔な態度、関西学院グリークラブの絶妙なハーモニー等々、数えあげればきりがありません。そして何よりも、互いの心に通じる太い音楽の絆を私達は得たのです。自分達の他に、こんなにも合唱に情熱をいさぐ多くの仲間がいたのだという

ことを知つたときの驚ろきと喜び、年がうつり所は變つても、四連に参加する各校のメンバーの最初に感ずる所は同じだと思ひます。

私達は、四連をもつと内容の充実した名実共に最高の合唱演奏会にしなればなりません。全世界の人々に聞かせるほどの素晴らしい演奏会にしなければなりません。それには、参加各校のより以上の努力が必要なのは言うまでもないことです。創立六〇周年という記念すべき年を迎えられた同志社グリークラブの皆様は、きつと、より高い音楽創造のために、はげしい意欲をもやしておられることでしょう。そのような皆様に圧倒されないよう、私達もできるかぎり頑張つてみたいと思ひます。

終りに、貴合唱団が、これまで日本の合唱界の前進のためになしとげられた大きな功績に対して、心からの讃辞をお贈りすると共に、本年を契機として更に飛躍的御発展をされますよう、お祈り申し上げます。

立教大学

グリークラブ

“同志社大学グリークラブ六十周年を祝して”

関西大学合唱団の雄、同志社大学グリークラブが六十周年を迎えられた事を、私達立教大学グリークラブ部員一同、心からお慶び申し上げます。

合唱は個人の基本的発声と、全体のバランスを備えなくてはならず、その為には普段の厳しい練習とチームワークを備えていなくてはならないものです。しかもその練習自体にしても我々学生の練習の場というのは、あくまで、学業の余暇でなくてはならないのです。

この様に学生合唱団体に於ては、少しも“軽い気持ち”で活動が続ける事は出来ません。

又現在我々の間でよくメンタルハーパーモニーなる言葉が用いられておりますが、大学が人間結成に豊かな社会人を作り出す場であるなら、普段の我々の地味な活動というものも必ずやその一端を担っているものと信じております。

しかも近年合唱がますます盛んになつて来ておりますが、合唱の作り出すハーモニーというものは国民に対しても、又どんな社会に対してもお互いの心に通じ合うものです。

六十年の間には日本に於ても様々の事が起りました。決して六十年という伝統を作られるには容易な事ではなかつた事だと思ひます。

しかし調和を求め明日に向う我々の若い生命力というものには決して終りのあるものではありません。新しい未来に向つて、つき進むものです。

我々立教グリー部の部員にとつても、遠く東京におりましたが、同志社のグリーメンの若く力強い合唱にけるひたむきの情熱を感じる事が出来るのです。

今後も幾多のご苦労はあるかと思ひますが、素晴らしい伝統にのつとり、今後のご発展をお祈りいたすと同時に、これまでの伝統を作られた諸先生方、諸先輩に敬意を抱くものです。

「想 い」

片 桐 哲

同志社ダリ・クラブ創立六十周年の記念すべき歳を茲に迎えるに当り、過去を追想し、亦將來を夢見て洵に感無量なものがある。河上文久君が役目から中心になつて創立五十周年の記念会を盛大に催したのは、つい昨日の事のように感ぜられるが、早や十年が経つて了つたのである。その後年々二、三十名位宛、卒業生を送り出しているもので、OBの数は増加の一端を辿り、現在は恐らく六百数十名を数えるに到つていゝのであるまいかと思う。その本流はグリークラブの終身大学院ともいへべきクロージャークラブが進学して、楽しいグリー生活の延長を続けているのである。洵にグリーメンは終身会員であり、終生の友であり、亦兄弟なのである。グリーメンの才一世には少数ではあるが既に古稀に達した人もあり、三十才前後が中堅層で才二世の時代が開かれんとしているのである。グリークラブは同志社学園が永久に続く限り、永久に進展する団体なのである。光榮ある過去を追想すると共に、更に一層將來の堅実なる発展の為に全力を傾けて努力し、その為に祈らなければならない。

グリーも茲數年來、学生自身の精進に加えて、優れた斯界の専門家である福永陽一郎先生を技術顧問に迎え、亦ウオーストレイナーには大久保昭男、中村博之の両先生を煩わして、格段の進況を発揮しつつあることは、殊に喜びに絶えない点である。クラブメムバーも百数十名に達して、その真剣な精進振りは、過日の野尻湖畔に催された合宿訓練には百三十名が参加し熱心に努力した一事に依つても立証出来ると思う。然るに依然として練習すべき一定の場所を持たず、平安教会その他の場所を転々として、無駄な苦勞を繰返しているのである。

亦大切な歴代の楽譜や、貴重なグリーの歴史的記録や記念品を保存すべきクラブハウスも無いので、いつの間にか逸散して了つていゝので、洵に残念至極な事である。小生は數年前からこれを何んとか解決しなくてはグリーの將來の為にならないと考えて、微力ではあるが学生自

身の側から発奮して、小さいものでもよいからグリー自身の練習室と楽譜や記念品及び研究図書等の保存室を所有したい為に土地と建物とを購入する積立金をする決心をし、毎年の演奏旅行の際之しい生活の中から数万円宛でも節約し、それを一定の額まで積立て、O Bと社会とに呼びかけて先づ地所と練習室と保管室とを現実したいと夢を画いたのである。幸い役員達の賛同を博し、毎年相当額節約して来たのである。然し報先を聞くのみで具体的な資金を見た事がなく、只喜ぶ丈で、いつの間にか内容は姿を消して了つていたのである。然るに今年の三月卒業された二十二名の諸君が此の計画に従つて各自乏しい財布をはたいて合計金貳万貳千円也を耳をそろえて、京都銀行の一ヶ年の定期預金として、松本慎一君が代表して拙宅まで届けられた。具体的なものを手にしたのは是が初めてであつただけに小生の歓喜と感激とは言葉にたとえ難く非常な感銘を受けたのであつた。数年来の夢の才一步が具体化されたものとして、心から感謝したのである。而も今年は創立六十周年を迎える年でもあり、神の深い摂理が潜まれているようにも思えて神に深い感謝の祈を捧げたのである。金銭の事柄については全く無能な小生は早速身近に居られるO Bの実業家の小田泰弘、渡辺謙之助両君に來宅を求め、是の貴重な献金を出発点として、立派な同志社グリークラブ会館建設の実現の夢を、弥々具体化するため資金募集運動の立案計画を進めるように研究を進めて呉れるように御依頼したのである。この記念すべき六十周年を振出しに來るべき七十周年には堂々たるグリー会館が目の前に見られるようにと祈るものである。O Bと現役が一同となつてこの夢実現のため最も聰明な計画と方法とを組織し、着々前進するように祈つて止まない。種々の有意義な記念行事が計画せられ展開されて行くであらうが、それと同時に永遠の計画をも懸命に考えて行きたいものである。殊に榮えある六十年の歴史を築き上げられたるO B諸兄の御一考を煩わしいものである。

(一九六四、九、一五 老人の日)

七十六才記す)

創立五十年の歩み

九十年度の堂々たる伝統を持つ学園
“同志社”に生れその三分の二を共に
歩いて来たグリーであるが、その偉大
な伝統を受けついで来た多くの人々、
又、その先輩方の努力の基にグリー生
活をしている部員にとつて、その歴史
を知り、明文化して、それを保管する
事は義務であると思う。

我々編集部は、最初歴史は、ダイジ
エスト版の型で簡単に取扱い予定であ
つたが、現在のグリーに資料がまるで
残つてないので、今後関係者が、グリー
の歴史を知る時、本誌が参考になる
と考え、五十周年誌から抜萃もしくは
参照して詳しく記す事にする。この一
字一字に、当時のグリーメンの計り知
れない程の嬉び、苦しみ、含まれて
いる事を心していただきたい。

有史前のグリークラブ

とその背景
大学設立を夢みつ、東奔西走され

た、校祖新島襄先生が御逝去されてよ
り七年、明治三十年頃の同志社は、暗
雲の低迷が著るしく、国粋反動の形勢
が序々に教会にまで浸潤し、同志社を
ミッション化せんとする外人宣教師に
反対する日本教師との意志も相通せず
教育上及び財政上の危機に直面してい
た頃である。

かくて、小崎道雄社長の後を受けて、
横井時雄氏が社長になるや、政府に同
志社諸学校に対する徴兵猶予及びその
他の特権賦与を願ひ出た。しかし、同
志社が公然隠れもなき、キリスト教主
義学校であつたので、政府からは冷く
拒絶され、この為に横井社長は「同志
社不易の綱領」の一個条「キリスト教
ヲ以テ德育ノ基本トス」をおろそかに
し、ここにキリスト教教育は骨抜きに
されたのである。

かくして、宣教師はすべて同志社を
去り、この時代の同志社は、殆んどそ
の形態を留むるのみという、悲境に沈

んでいた。

明治三十四年頃も「門前雀羅を張る
と形容された程に同志社は衰微の極み
で、生徒の数は男女併せて二百名足ら
ずという、今では想像もつかぬもので
あつた。

この年の暮にグリークラブ創立の基
礎を作られた、速水藤助氏が、又この
二年後には、美声ベ이스の持主、渡部
守成氏が入学せられ、地味ではあつた
が、機会ある度に音楽の奨励に尽され
た。

しかし当時の同志社生活は、新島先
生以来の清教的魂と気風とが精神的気
風となつて、驚くべき潜在力を持ち、
合せて一種の豪傑肌の気風も交わつて
情燥方面では潤いのない、野蠻的空氣
が充滿していたのである。男子が音楽
を語ると、柔弱墮落学生の如く扱われ
相當に露骨な反抗を受けた様である。
音楽に対する興味を全然持たぬこれら
の学生は、讚美歌を歌うのにも「信仰
を持つて歌えばそれで充分だ。何も楽
譜なんぞに拘泥する必要はない。」と
云つた調子であり、思い切つて蛮声を
張りあげ、大声で怒鳴ることをもつて
痛快事としていたらしい。ましてや重
唱などとは思ひもよらぬことであり、渡

部氏が、一人でベースのハーモニイをつけて歌えば、他の者がつり込まれて、歌うことが出来なかつたという話もある位である。

しかし、この渡部氏等のたゆまざる努力の結果、だんだんと音楽の愛好者がふえ、練習も始まつた。そしてその内に、内外の信用と理解とを得て隆盛の波にのつて来た所の同志社当局の理解を得、大阪よりオルチン音楽師を招き、指導を受け、全校に音楽を普及する目的を持つて活動は更に活発になつた。

この頃、この発展に寄与貢献された方には、前述の速水氏、渡部氏、近藤優氏、境野周次郎氏、伊庭孝氏、海老沢亮氏、岩村清四郎氏、片桐哲氏、佐竹直重氏、相馬祐次氏、横田確三氏らがある。

漸く音楽が認め始められたとは云え、学校の内外には、相当に音楽に無理解な人もあり、それらの人々に対する普及も並々ではなかつた。重唱は「かけ合い」と称され、そして、ベースの声を「牛の様だ」などと評されたりもした。

明治三十九年一月、チャペルに於て、東北災害救済のための有料洋楽音楽会

があり、三十名からなる学生の男声合唱を渡部氏が、指揮して、大曲「復活の歌」を演奏し、非常に大喝采を受け、素晴らしい人気を得た。この音楽会は、京都に於ける最初の洋楽音楽会であると共に、グリーククラブ誕生の前奏曲とでも云うべき、エポック的な出来事であつた。

グリーククラブの誕生

(明治四十四年—大正二年)

明治四十四年の秋、片桐哲氏は東寮の寮長であり、そのもとに同好者が集い、合唱——というよりも重唱か——をしていた。ここに集まる人々は、勿論何の組織もなく、又将来どうしようかと云う野心もなく、唯ものの好きで集まつてうなるのみであつた。その時折よくも東西の弁論大会が開かれ、その席上八名の人々によつて、男声三部合唱でもつて、讚美歌の「はなよりもめでし」(五二四)を歌い、こので初めて同志社大学グリーククラブ、の名を公けにした。その当事者は、平賀徳造氏、浜田光雄氏、平田甫氏、川中忠治氏、松岡繁氏、片桐総氏、谷為三氏、谷喜楽氏であつた。

これを機会に部員も増え、本格的な

合唱団として、同年十二月には、蠟燭の光の中に「怪しむるべに」を四部で歌つた。錦織貞夫氏、浜田格氏、柳島彦作氏、岩村清四郎氏、三宅譲氏らの入られたのもこの頃である。

片桐氏のもとに、グリーククラブは、技巧も進んで来るし、声も洗練され、声量も豊かになつて来て、カンターやオラトリオなどもする様になつた。大正元年のクリスマスには「みさかえハレルヤ」を合唱し、錦織氏はソリストとして、大活躍であつた。

大正二年に入ると、片桐氏らが、卒業され、グリーの前途が案じられたが、選挙により、浜田格氏を指揮者に、浜田光雄氏が、書記となられた。この年に聖歌以外のものも歌いたいという望から、十月柳島氏、川中氏らが、「プリムローズバンド」を作られた。しかしいつの間にか「プリムローズソサエティ」と呼ばれる様になつた。又、錦織氏や美濃部量氏、内海孝夫氏らが中心となり、マンドリンを始められた。これが現在の同志社マンドリンクラブの卵である。

いよいよ同志社の音楽熱は盛んになり、その結果全体としての音楽会が望まれる様になつたので、同年五月二十

四日に全同志社演奏会が開かれた。同志社に於ける総合音楽会としては特筆さるべき行事であつた。次にそのプログラムを記してみる。

- 一、開会の辞 芦田 教授
- 二、オルガン連奏 郭 馬 西
- 三、コーラス グリークラブ
- 四、二部合唱 「春夜の夢」 河原 五郎
メンデルスゾーン 志水 義孝
- 五、台湾 楽 林 育 伯
- 六、コーラス グリークラブ
- 七、ユツバイディ オズグッド嬢
- 八、オルガン独奏 オズグッド嬢
- 九、コーラス プリムローズソサエ
- 十、独唱 テイウオニタ グローバ教授
- 十一、アウト オンザデープ
- 十二、四部合唱 錦織 貞夫
- 十三、コーラス 浜 田 格
- 十四、コーラス 川中 忠治
- 十五、コーラス 富 永
- 十六、コーラス 富 永
- 十七、コーラス 富 永
- 十八、コーラス 富 永
- 十九、コーラス 富 永
- 二十、コーラス 富 永
- 二十一、コーラス 富 永
- 二十二、コーラス 富 永
- 二十三、コーラス 富 永
- 二十四、コーラス 富 永
- 二十五、コーラス 富 永
- 二十六、コーラス 富 永
- 二十七、コーラス 富 永
- 二十八、コーラス 富 永
- 二十九、コーラス 富 永
- 三十、コーラス 富 永
- 三十一、コーラス 富 永
- 三十二、コーラス 富 永
- 三十三、コーラス 富 永
- 三十四、コーラス 富 永
- 三十五、コーラス 富 永
- 三十六、コーラス 富 永
- 三十七、コーラス 富 永
- 三十八、コーラス 富 永
- 三十九、コーラス 富 永
- 四十、コーラス 富 永
- 四十一、コーラス 富 永
- 四十二、コーラス 富 永
- 四十三、コーラス 富 永
- 四十四、コーラス 富 永
- 四十五、コーラス 富 永
- 四十六、コーラス 富 永
- 四十七、コーラス 富 永
- 四十八、コーラス 富 永
- 四十九、コーラス 富 永
- 五十、コーラス 富 永
- 五十一、コーラス 富 永
- 五十二、コーラス 富 永
- 五十三、コーラス 富 永
- 五十四、コーラス 富 永
- 五十五、コーラス 富 永
- 五十六、コーラス 富 永
- 五十七、コーラス 富 永
- 五十八、コーラス 富 永
- 五十九、コーラス 富 永
- 六十、コーラス 富 永
- 六十一、コーラス 富 永
- 六十二、コーラス 富 永
- 六十三、コーラス 富 永
- 六十四、コーラス 富 永
- 六十五、コーラス 富 永
- 六十六、コーラス 富 永
- 六十七、コーラス 富 永
- 六十八、コーラス 富 永
- 六十九、コーラス 富 永
- 七十、コーラス 富 永
- 七十一、コーラス 富 永
- 七十二、コーラス 富 永
- 七十三、コーラス 富 永
- 七十四、コーラス 富 永
- 七十五、コーラス 富 永
- 七十六、コーラス 富 永
- 七十七、コーラス 富 永
- 七十八、コーラス 富 永
- 七十九、コーラス 富 永
- 八十、コーラス 富 永
- 八十一、コーラス 富 永
- 八十二、コーラス 富 永
- 八十三、コーラス 富 永
- 八十四、コーラス 富 永
- 八十五、コーラス 富 永
- 八十六、コーラス 富 永
- 八十七、コーラス 富 永
- 八十八、コーラス 富 永
- 八十九、コーラス 富 永
- 九十、コーラス 富 永
- 九十一、コーラス 富 永
- 九十二、コーラス 富 永
- 九十三、コーラス 富 永
- 九十四、コーラス 富 永
- 九十五、コーラス 富 永
- 九十六、コーラス 富 永
- 九十七、コーラス 富 永
- 九十八、コーラス 富 永
- 九十九、コーラス 富 永
- 一百、コーラス 富 永

「復活カンタータ」
この中で、カンタータは錦織氏が、ソロされた。又コーラジョンは、動作をつけて歌つたため、ある教授から、「神聖な場所何たることぞ」と叱言をくつたという話が残っている。尙この当時の部費は、楽譜代として、一金五銭也をとつたが、それも金さえあれば、ウドンを食べたい連中ばかりなので、常に滞納しがちであつたと記録されている。十一月には、同志社イブの前身たる同志社音楽会が、グリークラブとプリムローズが中心となつて、三条の青年会館(YMCA)で開かれた。この年の創立記念日たる十一月二十九日の部誌を見ると、「十一月二十九日、同志社創立記念日。於若王子山頂。午前五時半鐘鳴を聞いて、我等健児、愛敬新島襄先生墓前に集ふ。吾等グリークラブ員、古木教師の熱列なる勸話の後、過日より練習せる百六十一番を合唱せば、美しきハーモニーをなして静かなる山頂の空の中に鳴響きて、恰も聖都エルサレムのシオンの山にあるを覚えたり」とある。
当時のグリークラブの雰囲気が見える。聖書、祈禱の言が見られ、いかに

神学生が多かつたとは云え、その背景に確然として信仰的なものがあつたのがうかがえる。

大正三年

かくして、大正三年になると、指揮者の浜田格氏が学校を去られ、その後には、平田氏が指揮をされた。それ以後平田氏のもとに、グリークラブは目ざましい前進、発展をげたのである。この頃同志社に居られた、シャイベリ教授が、指揮者として、直接、間接、グリークラブのために助言をされた。又、グリーの中には四重唱が盛んに行われた。中でも、錦織、浜田格、平田、浜田光雄各氏らのものと、北村藤三郎、原忠雄、片桐総、小島応格氏らのものが、特に活躍せられた。

大正四年

この年には、名古屋キリスト教青年会主催の音楽会に参加した。これが、グリークラブの初の演奏旅行である。又、御大典が行われ、その祝賀の音楽会が、十一月六日に開かれ、他の合唱団とも声を揃えた。この日の男声合唱は、百数十名という当時としては、珍しいものであつた。又、十二月には

揃つて神戸に行き、同志社の音楽会に参加した。我々が現在尚、伝統ある歌として歌っている。詩篇九十八篇「新しき歌をエホバに向いて唱え」はこの年の九月二十七日に練習開始と記録されている。

大正五年

四月中学に「ジュニャーグリークラブ」が平田甫氏の肝入りで誕生し、これと時を同じくして女専に「ミリアム・クワイヤー」が生れた。その頃のグリークラブは単独で、大阪にて音楽会を開く迄に成長した。即ち十一月十八日大阪キリスト教青年会館で開催したが、この音楽会は大盛況で、その利益金を持つて当時グリークラブの本部になっていた。同志社大学青年会にオルガンを寄附した。この年の十一月二十八日には最初の同志社イブがチャペルに於て開かれた。この頃は同志社デモイブと呼ばれ、音楽会が盛大に行われた。プログラム中、グリークラブの曲目は、白菊・ブルドック・シムフォニーの三つであり、この他に、プリムローズ・ダビデクワイア・ジュニャグリーの合唱。他にオルガン・ピアノ・バイオリンなどの独奏があり、最後は同志社ソ

ングを一同で歌っている。又、プログラムの中に、大正二年の音楽会にも朗読をされた、ケリー教授（現在のオーテイス助教授の祖父）が最後にリーディングをされ、この音楽会の印象を強くしたとあるのも面白い。この音楽会は、大盛況であり、入場出来ぬ人々は机を持ち出してその上に上つて見た程であると云われている。又、その年の三月四日には、グリークラブの讃美礼拝が行われた。これは「歌の夕べ」とも称され、音楽会の形式で行われ、年に二、三回グリークラブの行事として毎年行われて来ている。この讃美礼拝については、その第一回を定めるのに、原忠雄氏は三月四日を、又三輪源造氏は、同志社五十年史の中で「大中氏の奏楽『ゲツセマの祈り』のおごそかな曲に始まり……」とあり、五月二十日の音楽会を第一回とされ、更に平田甫氏は、十月五日の組合教会の総会開催中に開かれた大讃美礼拝を第一回とされている。この様な三つの説があるけれども、いずれにせよ我等の先輩が意識して神に奉げる歌を歌つたのではなく、無意識の中に常に神に対する讃美の声を合わせそれが偶然に讃美礼拝なる言葉になつたものであることが想像される。当

時のグリークラブが常に祈りによつて支えられ、祈りとしての合唱をなしていたことはこの時代の記録の片々から容易に知られることである。この年以來、讃美礼拝はグリーの例年の重要なステージとして守られていた。

大正六年

大正六年になると、岸和田市の演奏会が機会となつてグリーの歴史上に輝くべき第百回の満洲・朝鮮への演奏旅行に出發した。この旅行のスポンサーは満鉄であつた。最初合唱の何たるかを知らぬ満鉄社会課ではグリーの招聘を躊躇したが関係者の努力によつて遂に実現した。この一行は、ソリストの堀内清氏、オルガニストの大中寅二氏。それに山下匡、原忠雄、平田甫、小島忠格氏のクワレットの計六名であつた。

岡山、八幡、大邸、京城、を始めとして安東、撫順、奉天、鉄嶺、長春、遼陽、大石橋にて大好評の内に演奏会を続け、旅順、大連を最後として、約一ヶ月の旅行を終えた。この旅行は、一行の動静が毎日の新聞に出る程の評判であり、主催の満鉄側も、その成功に大いに気を良くしたと云われている。又、この年には、第二回の同志社イ

プが行われ、グリークラブは、カンタータ「ダビデ」の第一幕をコスチュームをつけて、歌つてこれ又、大好評であつた。

大正七年・八年

大正七年に入り、グリークラブ卒業生送別音楽会を開催したが、音楽が漸く一般に普及されたこの当時、会場には聴衆が入り切れぬ程の大盛況であつた。この音楽会を最後に、多くの有能のメンバーを送り出し、指揮者も、平田氏より、水谷央氏にと代り、面目一新の新しいグリークラブとして発足した。しかし、水谷氏が健康と家事の都合で退学されたため、その後を追つて、川四郎氏が指揮者におされた。

この時代は、グリークラブの全盛時代と、この頃の先輩が語られる如く、流石に部員も多く約六十名という当時としては真に多数の、スケールの大きい合唱団として、内外に君臨した。この中には前述の大中氏を始め湯浅永年氏、田島光三氏、棟清忠氏らがあり、中学にはジュニアグリークラブがあり、その中に、内田栄一氏、橘静雄氏らが居られ活躍された。

この年も、各地の招待音楽会、ク

スマスの音楽会、讚美礼拝、同志社イブ等とその動きも目覚ましかつた。又特筆されることは、同志社イブに始めて混声合唱が行われたことである。これは、長い間音楽関係者の夢であり特にその方面では、風聞のうるさい世間にあつて、この様な合唱が出来たのは、一つに同志社であつたからこそである。この編成は女子部のミリアムクワイア・グリークラブ・プリムローズクラブ・ジュニアグリークラブが参加し、大中氏の伴奏で、蘭川氏が指揮をされた。これは同志社に於ける混声合唱の始めであると共に、その合唱界に於ても、有意義なものであつた。

大正も八年を数えるにつれて、グリークラブも湯浅永年氏が指揮者となられ、再び六名をもつて満洲、朝鮮に演奏旅行に出かけた。一行は湯浅氏（テナー・マンドリン）古内広武氏（バス・口笛）陳清忠氏（バス・ピアノ）田島光三氏（テナー・ピアノ）陳溪圳氏（テナー・ピアノ）であり、釜山、大邱を始め、仁川、大田、平壤、奉天、大連、鞍山、遼陽、長春、寛城子、安東、竜山、京城、水原、群山、江景、内地では、岡山、門司、下関、長府、熊本、長崎と音楽会三十回、讚美礼拝

四回を行つた。七月四日より、八月十五日にわたる四十余日の大演奏旅行であり、数多くの思い出、珍談を残して、大成功の内に終つた。

この年の同志社イブは大分、トラブルがあつたらしく「場所が狭く中学校との間に争いがあり、年一度の楽しいイブもワヤクチャである」と記録されている。

大正九年

この年も、例によつて卒業生送別音楽会より始まつた。曲目は「マルタの中の「ソロ・ブローグウ」ブルドック、送別の歌、アンクルサム」の四重唱、他に田島氏のブアイオリン等であつた。この曲の中にある、「アンクルサム」は、当時のグリーの四重唱の中でも、コールジョン以上に歌われ、いたるところで大喝采を受けていた様である。この他には「トイシンフォニー」なども評判のレパートリーであつた。十一月には、全員三十五名が神戸女学院で音楽会を開催し、大成功をおさめた。このステージは、先輩の水谷央氏、三宅譲氏、奥村竜三氏のトリオの出演があつた。

同志社イブは例によつて大盛況であ

り、アンクルサムがアンコールに会い
閉口したと記されている。

大正十年

十年になり、一月には、高知に演奏
旅行に出かけ、一行の演奏が映画撮影
され、活動写真館で上映されるとい
う大騒ぎであつた。

七月には、東北北海道に旅行に出
けた。演奏地は、金沢、長岡、新潟、
酒田、山形、秋田、弘前、青森、札幌、
小樽、旭川、名寄、室蘭、野辺地、一
ノ関、仙台、岩沼、東京であつた。特
に仙台では二千余名の大聴衆を集める
という大盛況であつた。帰途には東京
により、大寅二氏の居られる靈西坂
教会で歌声をあげた。これがグリーク
ブの東京での第一声である。

この頃から、ようやく世間も合唱に
なれ、何を歌つても喜んでくれるとい
う訳には行かなくなつてきた。

そこで山口氏は進んでドイツの合唱
曲を研究し始め、直接楽譜をとり寄せ
たりもした。当時の人達はドイツの云
わば高踏的合唱曲には未知であり、ほ
とんどアメリカの合唱曲のみが愛唱さ
れていた。

大正十一年

この年の七月から九月迄の二ヶ月、
又しても渤海、黄海一周大演奏旅行と
して、山口氏、原忠明氏、津下統一郎
氏、鈴木重敏氏、森本芳雄氏が海外に
出かけた。山口氏はマンドリンを、森
本氏はピアノとそれぞれの余技を持つ
ての遠征であつた。この旅行は手違い
から演奏会が開催出来るかどうか危ぶ
まれた所が二三あつたけれども、北京
での大成功を機に、各地とも大好評の
内にその名を三度鮮満支に轟かせたの
であつた。演奏会を持つたのは、下関、
門司、小倉、福岡、長府、釜山、大
京城、仁川、平壤、安東、撫順、奉天、
公主嶺、長春、鞍山、湯風子、遼陽、
大連、旅順、北京、天津、青島、上海、
という強行軍で、三十四回の音楽会、
十回の讚美礼拝を行つた。

この年の同志社にグリーククラブ
は、本年初演として、メンデルスゾー
ンの「芸術の使徒へ捧げる祝祭歌」
(Festgesang an die Kunst-
ler) 作品六十八を猛練習の未発表
して注目をあびた。

大正十二年

七月には第一回の九州台湾演奏旅行
が行われた。これはグリーククラブのみ
ならず、マンドリンクラブ・ブリムロ
ーズクラブも加わり、総勢二十名にな
り、片桐氏、速見氏の両先輩が学校を
代表して同行された。演奏地は長崎、
福岡、台北、淡水、嘉義、台中、台南、
高雄などの各地であり、その大成功は
云うを待たない。

この時代のグリーククラブのレパト
リーの一部を紹介すると、桶屋の歌、
アンクルサムバーター Glory and
Honor, Gloria in excelsis,
Toy Symphony. 才女、愛の夢
等があげられる。又、この頃コルジ
ヨンがものすごい人気を得つた。
かくしている間に、指揮者は山口氏
より、三輪雅夫氏に代つた。しかし三
輪氏は十二年の半ばでやめられ、統一
郎氏に代つた。森本芳雄氏がその任につかれ、更に
その前進発展のため声のハーモニと
共に、内なるハーモニもみがかれて
いつたのである。

大正十三年

この年も相変わらず、学内外に活発
な働きをなし、讚美礼拝にイブ音楽会
に、又、他校との交歓にも活躍した。

当時のグリークラブの役員を見ると、指揮者、書記、会計は今と変わらなないが、その他に支配人、印刷という役が役員としてあげられてるのが面白い。又同志社高商の音楽会に賛助出演し、電車乗車券を貰ったという記録もこの時代の風潮を物語っている様である。同じこの年に、グリークラブの兄弟とも云うべきマンドリンクラブが全日本で優勝したので、祝勝会を行ったり、共に名古屋で演奏会を持ったりした。

昭和十四年

大正十四年には、マンドリンクラブと共に九州に演奏旅行をし、更に春には東北地方、即ち仙台、酒田、鶴岡、秋田及び静岡、東京にて音楽会を開いた。一行のクアルテットは、有名なテナー大田黒養二氏がブルムローズから秋間勝二氏、津下氏、鈴木氏がグリーから参加し、マンドリンクラブ共々、仲々盛大なものであった。

この年のイブ音楽会は、開校以来の大音楽会であつたと記録されている。即ち、グリークラブを始め、プリムローズ、マンドリン・シムフオニー・ハーモニカ・女専コーラス・女学校コーラス・中学校ホザナクラブ、又始めて

組織された同志社混声合唱団。その他に、柳兼子女史、竹内禎子女史、内田栄一氏、カープ教授等大したものであつた。この時グリーは、京都二中のブラスバンドの伴奏で、前年、山口氏により本邦初演された「芸術の使徒へ捧げる祝祭歌」を合唱し、大成功であつたと云われる。

昭和元年（大正十五年）

この年に入り、七月には四回目の鮮満大演奏旅行が行われ、片桐氏引率のもとに、森本氏、直木潤一氏、伊藤新太郎氏、秋間勝二氏、太田黒氏、伊藤栄氏、副田壬一氏が前のコースと同じ様に出かけた。約三週間にわたるものでこれも大成功であつた。

やがて世も大正より昭和と移り、グリークラブも又、森本氏から山田基男氏へと指揮がゆだねられた。

この頃の同志社は、学内外共に大きな発展をなしつつあつた頃であり、海老名弾正氏を総長として、学問の自由、大学の独立の精神を強くかけ、教授陳も全国の俊英と目された人々が続々と集まり、いわゆる進歩的な一派を形づくつた時である。

昭和二年

この年は三月に卒業生の送別音楽会を開いた。直木氏、秋間氏、山田健三氏らの卒業された時である。六月に開かれた歌の夕べ（讚美礼拝）はこの時既に二十七回を数えていた。

同志社イブの音楽会は相変わらず盛大であり、グリークラブは希望の島、詩篇九十八を合唱している。この他にはブルムローズがウッドワードの「ザ・レジアン・モーン」を合唱し、女専グリー・ハーモニカ・オーケストの他、柳兼子女史・竹内禎子女史・シャイベリ教授の独唱などがあり、最後にシャネツプ女史の指揮で、混声合唱ベートーベンの山から「ハレルヤ」を合唱した。

昭和三年

翌三年には上海演奏旅行を、マンドリン・ハーモニカ・ブルムローズと共に行なつた。讚美歌の「雲の柱もて」などがこの頃に歌われている。

又、この年の記録に「五月十八日、瀬田川の校内ボートレース大会に出場、馬術部に惜敗す。メムバー山田、宇野、千葉、加藤、松島、日下部」とある。この時代、又これ以前の先輩には運動選手と

の兼任も六分あつたらしく、その勢いで歌う合唱も相当元気に充ちたものだったと想像される。

この年の六月には前指揮者の森本芳雄氏が渡米され、又八月には第五回の鮮満旅行があつた。これ又大成功であつたことは云うまでもない。メムバーは酒井美智男氏、千葉温氏、阿部勝氏、松本氏、宇野清氏、中村正一氏、山田基男氏、宇野勇次氏、海老沢有道氏であつた。七月十四日より八月六日まで、京城、平壤、安東、奉天、公主嶺、長春、四平街、撫順、遼陽、大連の各地で演奏会を持つた。

同年の十一月二十三日天皇が御大典のため京都に來られ、京都御所に宿泊中、有終館から出火し、その火の粉が御所までとんだため、不祥事件として大騒ぎとなつた。総長、理事、監事は総辞職し、学生は髪をそりおとし、全同志社人が翌日神学館前に集合し、南の皇居を向いて三分間の最敬礼を行い、厳かに謹慎陳謝の誠意をささげた。この事件により海老名総長は、理事会よりボイコットされ学校を去り、大工原銀太郎氏（時の九大総長）を迎えるという、同志社の歴史の一頁があつた。このため、イブは中止された。

昭和四年

昭和四年になると、女専コーラス、グリークラブ、ブリムローズクラブの一行八十名が同志社混声合唱団として東京に出かけた。先ず、ビクターでレコードを吹き込み、青年会館で二千の聴衆の前に立ち大成功の中に帰洛した。レコードの吹込みの謝礼は百円であり、帰りの汽車賃になつたといわれる。又、三月にはグリーが沖繩に旅行に出かけた。山田氏、宇野氏、松本氏、上家氏、酒井氏、荒井氏がグリーより、長谷川常次郎氏、仁村健三氏、神康生氏、下山鉄之助氏、山崎喜三郎氏がブリムローズからと十一名の編成であり、山崎、荒井、酒井、下山の四氏はマンドリンもするといふ訳である。この時の決算書を見ると約二十回の演奏で、総収八千一百七円八十銭、総支出が千六円四十五銭となつてゐる。入場券一枚平均四十五銭也の時代である。今なら我々のホンのお小遣いで間に合ふ様なものである。この年の同志社イブでは、メンデルスゾーンの「ベアテモルトウイ」と「インブオケイション」の全曲を演奏してゐる。この年の讚美礼拝は三十一回目を数

えた。

昭和五年

まず一月には送別音楽会が開かれ、宇野氏、千葉氏、阿部氏、伊藤昌義氏、大丸武一氏、宇田俊雄氏、上家氏、松本氏、中村氏、星野三雄氏、佐敷重雄氏、海老沢有道氏、の卒業生を送り出した。

又七月には再び台湾に出かけ、台北、台中、台南、高雄、虎尾、嘉義、その他で音楽会を開いた。酒井氏、江村氏、井田襄司氏、岸田治夫氏、宮本光夫氏、島本裕二氏、荒井氏、中村氏、松島秀郎氏、山田氏、海老沢宣道氏とマンドリンクラブから五名が参加された。七月中旬より半月の旅行であつた。

十一月には、イブを兼ねて同志社創立十周年記念音楽会が二十、二十八日の両日、三回にわたつて行われた。

又この年には、関西学生合唱聯盟が組織され他校とのつながりも密になつた。

昭和六年

この年には、五年の長い間にわたつて指揮を続けられた山田基男氏に変つて、岸田治夫氏がそのあとを受けられ

た。同年は大きなステージが次々と持たれた。既に、大阪朝日会館に於ける第一回学生合唱聯盟音楽会。第二回北陸北海道演奏旅行。第一回立教同志社交歓音楽会。名古屋での同志社音楽会、関西学生合唱祭、この他に讃美礼拝、同志社イブである。北陸北海道の旅行はマンドリンクラブと共に、福井、金沢、札幌、旭川、名寄で音楽会を開き、札幌では放送を行なった。尚この旅行の引率は、和田洋一教授であつた。

この頃のグリークラブのレパートリーを少しひろつてみると、シューベルトのドイツミサ曲。ベートーベンのおペラ・ルンバルデイの中の巡礼の合唱等があり、イブに於ては非常な難曲とされている。ヘーガー作曲の *Ochtharand* を本邦初演とするという熱の入力であり、この様を大曲を研究、演奏した事は大いに称えらるべきである。

昭和七年

昭和七年になるとすぐに新讀美歌発表会が京都市公会堂で行われ、グリークラブは他の聖歌隊と共にその任にあつた。又長らく工事中であつた栄光館が見事に落成したので、その祝賀の

音楽会が二月十五日混声合唱を中心として行われた。この聴衆、実に二千を越したと云われている。

立教大学との交歓も引続いて行われた。立教側はオーケストラが主であつた。この時この交歓会を廻つて、栄光館使用問題や、同志社混声合唱団の出演に関する意見の相違から女専当局と大学音楽部の間に紛争が起り、遂に時の同志社総長大工原銀太郎氏が中に入つて事態の收拾に當り、漸く解決したかに見えたが、これが為に同志社混声合唱団は解散の休むなきに至つた。

七月には四国へ演奏旅行に出かけ、岡山、高松、今治、西条、松山の各地で演奏をした。その他、宗教音楽発表会、同志社イブ、関西学生合唱祭とこの年も多忙を極めた。

十二月には岸田治夫氏の後任として今西善治郎氏が指揮者となられた。

昭和八年

昭和八年前年解散した同志社混声合唱団は、多くの要望もあり、再建の必要に迫られた。この時、片桐哲氏が女専の校長に就任されたため、この問題は一気に解決し混声合唱団は再びその声を合せることが出来るようになった。

た。参加団体はグリークラブ、ミリアムクワイア、女専コーラスの三つで、クラブ女史が指揮にあたられた。

六月には、第三回の対立教交歓音楽会のため、グリークラブは東上した。フランクの詩篇百五十篇。ペルリオーズのアーメンフーゲなどの新しい傾向の曲もこの頃既に演奏されている。

又この六月にオーケストラ伴奏の混声合唱が行われた。同志社に於ける最初の試みである。曲目はメサイアの中のグロリーオブザロードとハレルヤであつたが、当時の記録には「救世主の如くあらずして 魔大王の如き感があつた。」と残されている。

当時の音楽部長として、田畑忍前学長が、助教としてこの任に当たられて居られたのは面白い。

昭和九年

次に迎えた昭和九年は、グリークラブの創立三十周年の年であり、これがための行事にぎわつた。指揮者は大田三郎氏に任せられた。

まず六月には大田中寅二氏のオルガン独奏会があり、九月には「グリークラブの歴史を語る会」があり、片桐哲氏、堀内清氏、田島光三氏、三輪源造氏、

速水藤助氏、蘭川四郎氏らが集まられ、懐古談に話はずんだ。そして十月には、十一日新島会館で祝賀会があり、次いで十三日には栄光館に於いて三十七周年記念音楽会が開かれた。祝賀会には、前述の諸先輩始め、渡部守成氏、松本淳氏、中瀬古六郎氏、浅野恵二氏、江村健三氏らが出席され、大いに昔を語られた。又音楽会には三輪氏の詩に大中氏が作曲された「グリークラブの歌」が発表された。その他、大中氏の作曲による「幸よ、悲しむは常に慰め与えられん」他を合唱し、湯浅永年氏のテナーソロ、宅孝二氏のピアノソロなどがあり大盛況の内に終えることが出来た。尚この席上、片桐氏と三輪氏に感謝状が贈られた。

かくして、昭和九年、大いなる感激の中に創立三十周年記念行事を終えたグリークラブは次の年の発展のため、そのハーモニーを、聖く、美しく、強くするための努力が各メンバーによつて誓われたのである。

グリークラブの歴史のさきがけとも云うべきこの三十年の間に、我々の先輩がいに真剣に合唱と取組み、より高い神の栄光の讃美のために声を揃え、たかが深くうかがわれる。

昭和六年に制定されたグリークラブの会則の中に「練習は祈禱会を持つて開始す」の一文句は、けだしこれらの事を如実に物語っている。尚グリー年中行事の「歌の夕」(讃美礼拝)は昭和六年迄三回開催であつたが、諸種の事情で年一回に改められ、第三学期卒業生送別の意味を含めて行い、昭和九年に三十七回やつた。

旧約時代に、エホバに向つて救い主の来たらんことを待ち望み「新らしき歌」を歌つた人々の如く、我々のハーモニーの中にこの歌がある限り同志社グリークラブは、いつ迄も神と共に発展することを祈るものである。

(以上五十周年記念誌抜萃)

昭和十年

この年は同志社創立六十周年であつたため、同志社当局主催による催物が多くグリークラブでも六十周年記念音楽会をはじめ多くの行事があつた。◇四月新学期を迎え千葉昌良、吉田希夫、外六名入部す。

◇七月十六日から一週間四国へ演奏旅をす。

◇十月二十九日栄光館で同志社創立六十周年音楽会が開催され曲目は森本芳雄氏指揮による「救正主」(ヘンデル)全曲でグリークラブ部員は殆んど全員がこれに参加した。当日の演奏者はソプラノ竹内禎子女史、アルト齊藤静子女史、テナー太田黒養二氏、バス内田栄一氏、合唱同志社混声合唱団(約百名)、音楽同志社シンフォニー、ピアノ中瀬古和子嬢、オルガン水谷央氏という大メンバーであつた。

◇十二月クラブ総会を開き十一年の役員として太田三郎(指揮者)、三原幸三(マネージャー)、柳原一男(サブ・マネージャー)を決定す。

昭和十一年

十一年になつての二月第四十回讃美礼拝(送別)をチャペルで行う。四月に大規模、方華日等数名入部す。六月に入り同志社混声合唱団の第一回発表会が栄光館で森本芳雄氏指揮によつて行なわれ、グリークラブから松本(寛)、中野、太田、阿部、柳原の五名が参加している。七月に中国地方へ演奏旅

行をした。一学期の末になつて急に決定したため、演奏地も倉敷、広島の二ヶ所だけで倉敷教会の讃美礼拝を加えて三回だけの演奏であつた。

十月の創立六十一周年記念EVE音楽会にて、Beat Holiday (ベイト・ホリデイ) 巡礼の歌 (ジューゼッペ・ベルデイ) の二曲を合唱。

十二月にクラブ総会を開き十二年度役員に、千葉昌良 (コンダクター)、柳原一男 (マネージャー)、松本寛二 (サブ・マネージャー) を決定す。

昭和十二年

この年は、日華事変が始まつた年で音楽の方に於ても軍国調が色づりされた。学園では夏にチャペル籠城事件で予科生全員とじ込められ、学生ストライキが行なわれた。

◇一月二十三日、同志社混声合唱団、第二回発表会 (京都朝日会館) に参加。

◇四月、脇田悦三、渡辺英一他多数名入部。

◇十月三十日、創立六十二周年音楽会が栄光館で開かれ、伝統のEVE音楽会が時節柄、全同志社学園愛国音楽会と改名され、プログラムに「日

の丸” “国威彌栄” “皇軍万歳” 等の軍国調が強調された。

◇十二月、クラブ総会を開き指揮者 (千葉昌良) 理事 (柳原一男) マネージャー (松本寛二) サブ・マネージャー (方華日) を十三年度役員に改選する。

昭和十三年

この年は二月に昨年讃美礼拝が二回行なわれたため第四十三回の讃美礼拝がチャペルで開かれた。三月には、三原幸三、古沢基生両部員が卒業し、四月に福井望、村上夏夫他数名入部す。十月二十八日に創立六十三届記念音楽会に出演し、"Schäfers Sountagslied" (C. Kreutzer) "An Sanct Raphael" (E. Gerusheim) の二曲を合唱した。当時は日華事変の漢口陥落の時で全聴衆と共に愛国行進曲がうたわれた。十二月六日クラブ総会を開き指揮者 (大彰彰)、理事 (柳原一男)、マネージャー (方華日)、サブ・マネージャー (押鴨丈夫) を決定した。

昭和十四年

この年も二月に第四十四回目の讃美礼拝 (送別) がチャペルで開かれた。

又この年はグリークラブ三十五周年にあたるため、その合宿練習を九月二十六日琵琶湖畔、青柳YMCAキャンパスで行い十一月四日に栄光館に於て、創立三十五周年記念音楽会が開かれた。曲目は、ハウプトマンとメンデルスゾーンが主であるが演奏会の最初に国家黙禱とあるのは、戦争の演奏会に与える影響がしのはれる。

十二月のクラブ総会では、新役員に指揮者 (大彰彰)、理事 (方華日)、マネージャー (野上一雄) を決定す。

昭和十五年・十六年・十七年

昭和十二年より日華事変が始り日本は次第に果てしても知らぬ戦乱の泥沼の中に入つていつた。やがて人類の平和という崇高な行方をさえぎつて軍国主義が力をたのみ帝国主義侵略の方向に進んでいつたのである。その様な状況下にあつて社会的にはもとより学園内に於てもその影響は大であつた。

キリスト教精神に基く同志社は世間からの風当たりも強くどうしても学園軍国主義化を徹底せざるを得なくなつたのである。学内に於ても応援団、スポーツ部の大半軍事研究会、射撃部等が

幅をきかせ合唱団に対する風当りは強かつた。そこでグリークラブとブリーズクラブの合併の問題が起つて来た。学校当局からすると、合併無条件賛成の理由は極めて、はつきりしている。翼賛体制としてすぐにでも米英をやつつけるに役立つという射撃部、運動部等に多くの予算が必要だし、この戦時体制下に良く似たコーラス団が二つもいる筈がないというのである。

そこで一応は当局の天下り式的な命令を受け入れることは、いとも簡単なことである。しかし、合併賛成派とクラブの伝統に固執する反対派に別れて仲々折合がつかなくかつた。かくして根気強く互に話し合いが行なわれ、昭和十六年の初頃ブリームローズの反対派の人達を残して合併したのである。かくして、新しい合唱団が生まれたわけであるが、その名が何と「同志社大学学友会修文部音楽班同志社大学男声合唱団」といういかめしいものになった。そして、昭和十六年六月に岸田耕一氏指揮のもとに第一回発表会が行なわれたのである。

昭和十七年七月七日に朝日会館で第二回の発表会が行なわれた。指揮は、前窪一雄氏で欧米の作曲家のものや、欧

米の主題にしたものは全くいけないといわれ、レパートリーは極めてせまくなつたのである。

昭和十八年・十九年

大平洋戦争で破竹の勢だつた日本もこの年に入つてが、ダルカナルをはじめ敗け戦さが続くようになった。この年は戦時編成で卒業が、半年繰上げられることになつたために第三回の発表会を送別演奏会として、六月に栄光館で行なつた。九月に卒業生を送り出し内山氏を指揮者として、部員二十二名ながら伝統を継がんと練習に励み、国の募金運動に協力するためと、殆どの部員が入営入団が決つてゐることもあるために、学徒出陣壮行音楽会を十一月十四日栄光館で行なつた。臨時徴兵検査、勤労奉仕等でメンバーが揃わず全員で始めて練習が出来たのは、発表会の五日前だつた。

年明けて十九年は全てが戦争一色で、部員も勤労部員に売り出され、クラブの活動も一時中絶の止むなきに至つたのである。

昭和二十年
あの長かつた戦争もこの年の八月に

終りを告げ平和が再び学園にやつて来たのである。十月に学園復興の学生大会で合唱団が、グリーの名で発足されるべきだとの話しが行なわれ、わずかな数の同志と発足した。復活第一回目の同志社EVEに十数名の現役部員と諸先輩とで参加し、指揮者も先輩の岸田氏であつた。

昭和二十一年

この年に入つても、まだ戦争のキズあとは済まず、まだまだ歌等呑気に歌つては居られなかつたのである。四月の第一回関西合唱祭にも僅か十二名の団体が参加したのみだつた。

十一月三日に戦後第一回合唱コンクールが催されこの頃より、やつと合唱熱が盛んになり始めた。第一回はリーダークランツコールと合流し、「同志社男声合唱団」として参加し、男声合唱、総合共に二位であつた。

戦前行なわれていた「立教、同志社グリー交歓演奏会」の復活を計画したのはこの年で、まずその手始めとして東京の毎日ホールにて行なわれた。

「立教グリークラブ発表演奏会」に賛助出演という形で十二名が東京へ戦後初の遠征をしたのである。この年に東

京リーダーフエル、フエラインの創始者山口隆俊先輩より、多年苦心して採収された合唱曲の楽譜を寄贈しただいた。

昭和二十二年

この年の四月になつて部員は、六十名にもなつたが突然、幹事長、指揮者マネージャーが退部したため、指揮者が沸底という形になつた。しかし、第一回合宿を比叡山で行ない。基礎練習に力を入れ、コンクールにそなえた。第二回関西合唱コンクールは十一月三日に行なわれ、今年こそはと大いに張り切つてコンクールに望んだがこの年宿敵、関学は不出場だつたので優勝はしたものの物足りなさを禁じえなかつた。

昭和二十三年

五月になつて前年来計画していた復活第一回「対立教交歓演奏会」を、大坂(YMCA)京都(栄光館)、にて開催、この頃より比較的難曲を演奏するようになった。この年の合唱コンクールより従来の男声、女声、混声の部門をば戦場、学生、一般に分類されたところに関学グリークラブではコンク

ールに於てOBも共に歌うという習慣だつた。この年もOBと共演であるに拘らず「学生の部」に出演することに、連盟もこれを認めたので「同志社グリークラブ」が発起人となり、他の大学に呼びかけ、連盟に提訴したのである。この結果関学は「一般の部」に出たので顔を合わすことは出来なかつたが「学生の部」で優勝することが出来、この年より開かれた全日本合唱コンクールに出場権を得たのである。東京でのコンクールは森本先生の指揮で歌つたが二位に余んじた。

昭和二十四年

年が明けて、すぐグリー内部分裂の問題が起きたがそれも納まり、五月に第二回立教交歓演奏会を東京で行なつた。全員の意気込みも近年になく盛上り昨年度の汚名をぬぐいさつた。六月にはいり副指揮者として日下部氏が初登場し、七月には比叡山にて四十五周年演奏会のための合宿を三日間行つた。九月に入り、来るべき五十周年の前奏といふべき、又戦後グリーの初の単独発表会として、四十五周年演奏会を盛大に行つた。曲目はブラス付きの「芸術の使途に捧ぐる祝祭歌」「深

い河」「剣と堅琴」等であつた。

昭和二十五年

この年はグリークラブが第三回全日本合唱コンクールで始めて優勝した年である。当時の幹事長の富永光雄氏の手記によれば、コンクールに出るか否かさえも、さんざん悩んだらしい。というのは、その年の卒業部員が、二十名近くの多さを数え部員総数四十名そこそこで全く心細いものであつたようだ。全関西での朝日会館での優勝の喜びの方が大きかつたというのも、偽らざる心境であつたと思う。第一回の全日本では全員日頃の實力が出し切れず、福岡女子高校の「水とんぼ」にしてやられたが、第三回で再び、東京で校名が変つた福岡中央高校の女声に相まみえ、自由曲、コルネリウスの Beethoven 日下部氏の指揮で遂に全日本優勝の榮譽を獲得したのである。当日の新聞評(野呂氏)に依れば、コルネリウスの Beethoven はスフォルツァントの用い方が多い様に思つたがこれ丈、きれいにまとめあげれば申し分ない。」とある。

昭和二十六年

前年頃よりグリークラブの発達は著しくその発展には驚くべきものがある。この有様は戦前のグリーには思ひもよらないことであつた。六月に慶応との交歓会が行なわれた。この交歓会と前年の立教との定期で上京した際ワグネルや早稲田、関学の代表者が話し合つた結果とが翌年の東西四大学の足掛りとなつたのである。八月二十五日から十六日間仙台を振り出しに五都市で十九回の演奏会を持つたのである。これは戦後初の長期旅行であり、資金や宿舎等の点で種々困難を伴つた。尚訪問都市は仙台、引前、函館、小樽、札幌であつた。

昭和二十七年

同志社グリークラブは年々発展するにつれて内部に色々な問題を含むようになった。この年の夏の演奏旅行は、前年とは反対に中国、四国、九州地方へ行つた。戦前は別として戦後に於ては、日本全国を廻るのが最大限と考えられていたのである。この年になつて年来の望みであつた部室が確保された。特筆すべき事は、東西四大学合同演奏会が始めて開かれたということである。九月二十二日、二十三日栄光館と大阪

産経会館で行なわれた。このようにグリーの存在が対外的に発展すればする程多くのスケジュールに追われる。スケジュールが多くなり常にその為の練習に追われている。この年も五月二十五日の立教から九月二十三日の東西四大学まで十六回の多くの演奏会を持つていた。

昭和二十八年

年が明けてすぐグリー史上初のグリークラブ送別演奏会なるものを持つた。前年に河上氏と寺本氏が早大グリーからヒントを得、この演奏会の実現となつたのである。在部生からの心からのハイモニーの中で送られる。合唱愛好者のお別れはこうあるべきでないか。早大ではこの演奏会の結果先輩と現役とが非常に密なる関係を作り出しているとのことである。従来は送別パーティであつて、あまりにも永年一緒に苦労を重ねた卒業部員を送るためにはそまつすぎた。善はいそげと、この演奏会になつたわけである。関西合唱コンクールでは関学に次いで二位で涙を飲んだ。

昭和二十九年

この年同志社グリークラブは創立五十周年を迎えた。まず六月に定期演奏会を記念演奏会と兼ねて二十、二十六日京都と大阪で盛大に行なわれた。翌二十七日には円遊会が岡崎の市公会堂で行なわれ、先輩、現役が一堂に会し、共に五十年の歴史を祝した。十月にはレコード吹込みを、日本マッキューリー会社で行なつた。この年、特筆すべきことは第九回関西合唱コンクールで優勝し、十一月二十三日九州小倉の体育館で開かれた第七回全日本コンクールで優勝したことであつた。



思い出の記

四十年も前のグリーンの話

大中寅二

今年がグリーンクラブ創立六十周年をもうですね。

私が同志社にあり、グリーンクラブにいたのは大正四年から六年迄位の間で、それも厳密に云えば最初の二年間は大学のグリーンクラブにあり、後の一年余りは中学部のグリーンクラブ……それはジュニヤークリクラブと云いました……指揮者としてであり、丁度両方共練習時間が同じ昼休みの時間なので、特別に何かあると云う時以外は大学の方には出た事はありませんでした。

殊に中学部のジュニアークアルテットは、この時分のも

のとしては仲々優れていたように覚えていますが。

確か大正六年の夏だと思っています。

大学グリーンクラブのクアルテット

第一テナー

第二テナー

第一バス

第二バス

それに独唱者として、卒業生堀

内清

山下雄(指揮者)

原忠雄

平田甫

小島底

奇好に「三字ナマエ」の者同志の中に一人「四字ナマエ」の私が伴奏者として加わり、夏休みを利用して、韓国満洲を二・三週間の日程で、合唱旅行をした事がありました。是が韓国満洲合唱旅行の第一回の試みでした。

その時分は韓国でも満洲でも、そこに居る日本人に慰安などというものは、極めて少なかったのですから、それは主として、当会の主催が多くてはありましたが、一般的にも仲々よろこばれたのは事実でした。云つて見れば、後年何度かグリーンクラブが、同地方に呼ばれたのも、私等の合唱がかなりよろこばれたのが、原因していたんだらうなどと思つたりして、私達自身も大意によるこんだりしたものです。そこで、考えられるのは一体何を歌つたんだらうと云う事です。宗教的なものは、タウナー・クアルテット集アレキサンダー・クアルテット集からとり、一般のものはアメリカのカレッツ・ソングなどからとつたと覚えていますが、それから第一バスの平田甫氏の編曲による詩篇九十八篇もその当時のものでした。

ニグロが歌う、コミックソングのコール・ジョン、或はそれに類したもの、まだ二・三曲あつたと思いますが、これらはみな、動作もつけて歌つたりしたので、仲々の好評でした。

独唱は、何を歌つたか全然覚えていませんが、英語の宗教的のものだつたような気がします。そして、私はオルガン或は、ピアノで私自身の編曲の日本の子守歌や、山田耕作氏の作曲によるピアノ組曲「こどもとおつたん」の中の、「星の子守歌」や「夕やけ」などをひいてまわりました。思えば楽しいものでした。とにかく、いろいろ御馳走になつてもはやされたり、

これは「記念に」と云つて、いろんなものを、お嬢さんなどからプレゼントされたりすれば、誰だつて嬉しくなつてしまふのはあたりまえでしょう。何しろ好きな歌を歌つたり、ピアノやオルガンをひけばよろこんでもらえるんですから、仲々そうたやすくやめられるものではなく、私などは、とうとう本当に、それで飯を喰う「音楽家」になつてしまいました。

「音楽は趣味にするのがいんだ」と四方八方から云われたのに、私は趣味なんかでは我慢し切れないんだ。なんて自分勝手な理想論を、うち立てて、大正九年大学の経済学部を卒業すると同時に山田耕作氏の門に走り、とうとう音楽を飯のタネにするようになってしまいました。

けれども、もしそんな事は一つの個人的なことですから、どうでもいいとして、グリークラブの、もう一つの面、のち、クアルテットなどでない一般的の事に、ついて何か思い出して見ましよう。

その時分のグリークラブのメンバーは、九分通りが、神学部の学生で、あと少しが経済科や英文科の学生でした。そしてその人数は大体三・四十人位だつたでしょう。

指揮者は勿論学生で私等の時は、神学部の平田甫氏で、その卒業後は永谷央氏でした。私はその平田氏の命令で、その当時勃興してきた中学部のジュニアの方々に、行く事になつたのですが、これは「誰かいないか」と、当時のジュニアの支持者三輪源造先生が、平田氏に相談でもされたのではないかと思ひます。

大学のグリーの連中はいま云つたように、神学生が大部分ですから、歌いに行くのも、教会とか日曜学校（教会学校）によばれる場合が多く、従つて、曲目は宗教的のもの

が大半でした。そして、余興のような時には、アメリカのカレッジソングやコミックソングを、得意になつて歌つたものでしたが、黒人霊歌は一・二曲以外には、どう云うものか殆んど歌いませんでした。又、一般の人々にも、今のようにその要望はなかつたと云えるでしょう。

今のグリークラブの曲目を見ると、一般の要望がグッと変つたことに気づくと同時に、その合唱そのものの隆盛に伴う大きい進歩もよく解りますし、大きいものを歌おう、歌おうとする風潮も、よく解る気がします。殊に専門家になつてもよく思う事は、この当時歌つたような宗教的なもの……あの単純な易しいものを、現在のような大人数で、然も、優れた技術で楽しく歌つて貰えないものかという事です。

この忙しい複雑、又騒々しい世の中に落付がない心持で生活している私等の心のどこかには、そう云つたものを求めている姿があると思うのです。極端な事を云えば現在の人達はタウナーやアレキサンダーの男声合唱などを歌うと「男声合唱にはそんな性質もあるのか」などと感心したりする人があるかも知れませんよ。

そう云えば昔は、こんな事を云つたものでした。「同じ男声合唱でも、アメリカ式のものを歌うのは素人か学生で専門家はドイツのリーダーシャツを歌うもの」と、この時代の唯一とも云える殿堂……大本山……それは、東京上野の音楽学校で（今の芸大）そこでは決して、アメリカのものは歌いませんでした。

そして関西のグリークラブは同志社でも、関西学院でもアメリカのものを主として歌い、指揮者も学生でしたが、東京では例えば早稲田でも、慶応でも、その指揮者が上野

出身の専門家であつた為、常にドイツものばかりを歌つていました。これがその当時の東と西とグリークラブ（或は学生の合唱団）の一番大きな違いでした。又、それは兎に角として当時のグリークラブは、ただ楽しむ事が第一のようでした。大体、同志社のその当時の学制が、誠に楽しかつたもので、学生生活の楽しさを味わうと云う点では、理想的だつたと思います。それが自分達の好きな歌を皆で歌つて楽しむと、それを聞く人が、歌う人達以上によるこんでくれると云うのですから、グリークラブの連中が夢中になつて、よろこび、楽しく、楽しく歌つて過したのには、至極当然の事だと思ひます。

ですから、人の和のこともいい「音の和」は比の上もなく、極上にかもし出されていた事と思ひます。

これが、この時代の一つの合唱団のあり方だつたではないでしょうか。

ところで、私が直接指導に當つていたジュニアグリークラブでは、どんな色彩を持つていたかと云いますと、今考へて見れば、誠に無邪気そのものだつたような気がします。それは、その当時の音楽の利用のされ方が、今とは可成違ふと云う事にもよると思ひますが、とにかく単純に音楽そのものを、本當に、唯、ひたすらに好んでいて、それで心ゆく迄楽しんでいたと云うひたむきな姿が、はつきりと表われていたように思ひます。何んかの会に歌うんだなんて事になると、一生懸命練習するのは勿論ですが、唯、もう楽しみにして集つてきて歌つたものでした。私自身にしても、今思ひ出して嬉しかつたと思つていました。と云うような事が、もう四十数年も前の事になつてしまつた今日、例えば韓国や満州の旅行にせよ、又ジュニア

グリークラブの生活にせよ……それは今考へて見て悦びである許りでなく、私の深い誇りのような気がします。こう思ふ事は、又とりもなおさず、私の幸福を意味するもので、確かに私の単なる音楽生活のみならず、私の全生活の悦びであると思つています。

この稿を書くチャンスに貰つた事も、矢張り嬉しい事でした。

私より、二十年前にグリークラブを創設した人達も勿論、私と同じように悦びや、誇りをもつておられる事と思ひますが、その後今日に至る迄のグリークラブの人達も、いつかは振り返つて、拘くあるう「悦び」や「誇り」のため、いい道を精々進んで行つて下さい。

そこに生まれる、はつきりした「伝統」こそ真実私等の「悦び」であり、「誇り」であるに違ひませんから。

グリーやプリムローズの思ひ出

西 邨 辰三郎

大正十五年の春、同志社大学予科に入学して間もないある日の昼さがり、私が新緑もすがすがしい校庭を散歩していた。すると図書館のあたりから、男声合唱が聞こえてくる。よく聞くと、それは瓦ぶきの古い格子造りの建物からである。私はその合唱にひかれて、その中をのぞくともなくのぞいてみると、だれかが「カム・イン」といつた。つづいてまた他のだれかが「カム・イン」といつた。新入生の私は、ちよつとためらつたが、こうした誘いの声にひかれて、いつの間にか、その教室の中へ踏み込んでしまつた。不思議

議を神の導きというのか、とにかく私はこのグループにと
らえられてしまったのである。

品のよい指揮者らしい人がやつてきて、(岡橋祐氏、現
在立命館大学教授、同志社大学文学部講師)私の声を調べ
たいと言った。ペビーオルガンの前に立たされた私は、指
揮者のおさえるキーに応じて、ドレミファをやった。予期
したテストではなかつたが、大体下のCから二オクターブ
上のCまでらくに出たらしい。ハイ・テノールだと先輩た
ちが、にこにこ笑って手をたたくていた。私にはこの拍手
が何であるのか、もう一つピンとこなかつたが、後で聞く
とクラブではとくに高い声がほしかつたのだそう。

それがすむと、私はさつそく「同志社カレッジソング」
と、「あおい眼をした乙女」という二つの楽譜をもらつた。
みれば英語とドイツ語の歌詞で、急に自分も大学生になつ
たのだ。という感じがした。練習は毎日昼の休みに、この
薄暗いこわれかゝつた教室……通称寺小屋と称し、図書
館前にあつたが、今は新島遺品庫が建っている。

で行なわれた。そのころ集まるものは、ほとんどが新入生
で、ときどき先輩たちが歌いに來たが、今の合唱団のよう
にその訓練はきびしいものではなく、一学期中は、ほとん
ど同じ曲をやらされたりしたので、うんざりしたこともあ
つた。

入学部までもなく、私は同じ大学に、もう一つグリークラ
ブという団体があることを知った。宗教曲を主体に、練習
場所も神学館の楼上で、しつかりやつていくというこ
とである。ブリムの練習に退屈しかけていたあるとき、私はグ
リーに入つておいたらよかつたという気にもなつた。しか
し「袖ふりあわすも多少の縁」とか、ブリムの連中と顔見

知りとなつた今日、同じ学内でいまさらグリーにのりかえ
るわけにもゆかぬ。私はあの軽はずみな入部のしかたに、
多少後悔めいた気持ちを抱きながらも、乗りかけた船だ、
やはり、今いるブリムローズを愛し、この連中について行
こうと決心するようになった。

新入生歓迎会が、寺町二条の「かぎや」で開催されたが、
この時には、さすがに全部員が集まつて、なかなかの盛大
であつた。先輩たちからクラブの紹介や将来の計画が述べ
られ、グリークラブとは兄弟分、やはり同志社精神とも
いふべきものを持つてゐることを知り、心温まる思いがし
た。先輩の一人は立つて、次のような挨拶をした。「むかし
英国に、ビーコンスフィールド卿という政治家がいました。
彼はいつでも議政壇上に立つとき、ブリムローズの花
を胸につけていたそうです。そこで時の人々は卿の気持を
非常にゆかしがつたといわれています。私たちも彼にあや
かつて、学生時代はもちろんのこと、卒業後どんな職場に
あつても、英国貴族のゆかしさを忘れず、美しい合唱を続
けたいと思います。これがブリムローズの名の由来です」
と。

クラブには、グリーのように特別な宗教的ふんいきとい
うものはなかつたが、神学生のかわりに文科や法科の学生
が多く、その中には、野球やテニス等の運動選手も大勢い
たので、自然その歌い方はエネルギッシュで、野性味があ
つた。部員の技術は、玉石混淆で、太田黒養二兄のような
立派な歌い手もおつたが、また平素は練習にさつぱり出て
こないで、音楽会にだけ出演したいという名ばかりの部員
もかなりいて、男声合唱としてのハーモニーは、祈りでは
じまるグリーの方が、確かに一歩進んでいたようだ。

グリーは、いろんな演奏会に出演もしていたが、定期的に春秋二回行なわれた同志社チャペルでのキヤンドル・サービスが、その本来のクラブ活動ではなかったと思う。古風なリードオルガンをチャペルへ運んで、その前奏からはじまるグリー独特の讃美の歌声は、神もこれを嘉みせられたであろうし、また私達の魂の糧ともなっていた。私はグリークラブのメンタルハーモニーからも、また技術的なハーモニーからも多くのものを学んだ。「神に最高のものを捧げよう」との努力と精進から、美しい歌は恵まれるであらう。という古今の法則が、グリーによつて証しされ、明らかにされているように思えた。練習がおろそかにされれば、歌そのものが、みずから、その浅薄さをさんげし、精進が重なれば、重なる程、歌そのものが美しくなつて、神の祝福を受けるのである。神にささげられる歌声は、人間相手のショーではないだけに、地味ではあつたが、健康な美しさがあつたように思う。グリーはこの事を、心得て一生懸命歌つていたのであろう。私自身は、こうした宗教音楽や、ふんいきにむしろ心をひかれていたが、皮肉にも、ブリムに籍を置いていたので、在学中はグリー程には宗教音楽を歌う機会はなかつた。

しかし、ブリムローズはブリムローズで、またそのよさがあつた。同志社の九州演奏旅行に心うたれて、熊本から同志社に來たという太田黒養二兄をはじめ、市田勇、油谷栄兄ら学生はなれのした優秀な歌い手がいた。これらの先輩の刺激を受けて、いざ鎌倉ともなれば、かぶとの緒をしめるさむらいたちがならんでいた。昭和三年度、宝塚に於ける関西合唱コンクールには見事優勝して、万丈の気を吐いた。グリーはこの時、本来の目的を考えて、出演しなかつたように思う。ブリムは宗教家の他に歌曲、歌劇、世界民謡など、そのレパートリーは相当広く、クラブには各自がめいめい自由に研究することの出来るようなふんいきもあつて、それぞれ自分の尊敬する指揮者に師事している部員も相当いた。アルトの柳兼子さんや、フランスから帰つたばかりのパンセラの高弟照井栄三さんに、私たちが習つたのもその頃で、照井さんの影響で、練習場の内外では、よく「マアー・マアー・マアー」とうなつたものだ。更に研究のためだというわけで、私も含めて、あの頃有名だつた京都コーラスの会員となつて、エフゲン・クレインさんの指導を受けたものもあつた。また京大教授矢野博士夫人の門下生銀鈴会と、ブリムローズが混声合唱を編成して、巨匠エマヌエル・メッテル氏指揮の京大オーケストラと共演した事もある。兎に角あの頃のブリムローズには、合唱音楽に対する非常な興味と、研究熱が湧いていた。私個人としてみても、ブリムの指揮やマンドリンクラブのギタリストとして、相当忙がしいにも拘わらず、グリーの先輩森本房雄兄が、渡米するというので頼まれるまゝ、彼が奉仕していた平安キリスト教会の聖歌隊の指導や、礼拝のオルガン、更には日曜夕拝の会衆讃美歌の歌唱指揮までも受け持つこととなり、目の廻るような忙しさとなつた。夜おそく家に帰ると、みな寝しずまつた家の中にも、母一人だけは起きていてくれて、「疲れたやうから、これをつくつておいたよ」と言つて、砂糖のよくきいた「しるこ」や、時には「玉子湯」を用意して、心から慰めてくれたものである。

昭和二年から七年まで、グリーでは山田基男君（現山梨英和女学院院长）が、ブリムローズでは私が指揮者をつとめた。

た。グリーのキャンドルサービスに対して、ブリムには定期の発表会がないのを残念に思っていた同志は、力をあわせて、昭和四年の秋、ブリムローズクラブ第一回発表会を敢行した。その後ブリムローズは毎年定期発表会をやつていたが、惜しくも昭和十五年の秋、第二次世界大戦の風雲が急を告げたので、その第十回の発表会をもつて、ブリムローズと名うつてのクラブ活動に終止符を打っている。

ある日、後輩の連中（現在徳島水産経理部長取締役をしてゐる野原泰生君や、新島、田中会談で有名な「くぎぬき屋」の主人中沢伸二君や岸田耕一君その他大勢）が家に來られて、「ブリムやグリー」という洋名は、英米と對抗せんとする時代の風潮として、どうしても使えないことになるので爾後は、両者が合併し、同志社大学男声合唱団として出発します」という報告であつた。おそろしい時代の空気を感得した私は、その歴史の推移の烈しさに打たれて、「まあ、止むを得ない」と思つた。

この頃、グリークラブも同じく同志社大学男声合唱団と改名した。両者はこのような過激な時の流れに抗し得ず、ついに合併するに至つたのである。

グリーとブリムローズクラブとは、約三十年の間、別動隊として、時には互に闘志を燃やして、それぞれの領域で思ふ存分活動した。しかし両者は別段けんか別れをした団体ではなかつたので、いろんな機会に合同で大合唱をやつた私達の時代には、同志社混声合唱団として、はじめて東京に行き、日本青年会館に於てその発表会をした。また丸の内、日本ビクター会社に於て、竹内禎子さん指揮による同志社カレッジソングと、メンデルスゾーンの鶯を吹込んでゐるが、これらの男声部はすべて、グリーとブリムローズ

であつた。また両者合同によつて、得意の男声合唱詩篇九十八を歌つたが、その時の指揮は私がしている。同志社創立五十周年記念イブ音楽会には、同志社混声合唱団が誕生したわけだが、これは、柳兼子さんの指揮によつて、ハレルヤコーラスをやつてゐる。その後指揮者としては女專の教授クラツプさん、竹内さん、シャネツプさん、またクラツプさんという順にバトンはタッチされて、その間我々はハイドンの天地創造や、メンデルスゾーンのエリヤ、ヘンデルのメサイヤ抜粋など数々の名曲を歌つてゐるが、いずれも女專とグリーとブリムの三者合同で、こういうコーラスは当時、他の学校の追を許さなかつたものである。その他満鮮旅行や、中国上海、沖縄への旅などは、いずれもグリーとブリムの共演で、私もさいわい、これらの行事には、ほとんど参加することが出来た。

戦争が苛烈になつて両者合併の同志社男声合唱団は、一時有名無実となり、同志社自体の存立も危機に頻するのではないかと危ぶまれたが、敗戦とともに、キリスト教主義学園同志社は、にわかにその生氣をとり戻し、同志社大学合唱団もまた活氣を帯びて、日ましに入部者が増加した。敗戦直後の同志社イブプログラムを見ると、わるいザラ半紙には、最後のベストステージに同志社大学男声合唱団なるものが載つてゐる。

ところがこの合唱団は、グリークラブと再び改名された。そうしてその性格は、その名の示す往時のグリーよりも、むしろブリムローズ的内容を多分に持つようになつた。なぜこれをグリーとしてしまつたのかと、ブリムの先輩たちからは異議の申し立てもあつたが、もともとブリムはグリー

ーから派生した団体でもあるから、親元に帰つたような大きな気持ちになつては、との調停もあつて、今のグリークラブと呼ぶようになったのである。

グリークラブの六十周年記念の年を迎えて、山田至孝君から何か書けという依頼があつたので、とりとめもなく書いてある内に思はず長くなつた。かえり見れば、ブルムロイズ（今のグリークラブ）に入つてから早くも三十年の月日がたつた。その昔、寺町の「かぎや」の二階での歓迎会において、「わたしたちは、いつまでも美しい歌を歌つてゆきたい」と言ひのこした先輩のことばが、今もなお私の心の中に生きているような気がする。私はあの時から歌いつづけることができた。またこれからも歌つてゆきたいと思う。戦後間もないすべてが不自由なころにも私達は集まつて楽しく歌うことができた。有賀鉄太郎、奥村竜三、民秋重太郎、塩田達二、森本芳雄、飯清兄らとともに、クローバークラブを創設してから早くも十七年、同志社香里学園の誕生とともに、毎朝礼拝において、讃美歌を歌いつづけて十三年、米国ウェストミンスター合唱大学において、ウィリアムスン博士より親しく指導を受けてからは、早くも十年の歳月が流れ去ろうとしている。そうして今や青春をおう歌する時代は、惜しくも過ぎんとしているけれども、私はやはり、その昔の先達のことばのように、いつまでもいつまでも歌を忘れぬ生活を続けてゆきたいと思う。

グリークラブの 六十周年に想う

松本寛三

六十年前、わずか数人のグループで歌いはじめられた同志社グリークラブが、今では百数十名をこえる大メンバーを持つ、日本でも最高級の学生合唱団に発展、このたび、晴れの六十周年を全国のOB、そして現役グリークラブの学生達とともにお祝をすることになった。本當にうれしたことだ。私もこの由緒あるグリークラブに籍をおいたものの一員として、この日を喜ぶとともに、今後いちづに発展することを祈るものである。

歴史は歴史が作るというが、同志社グリークラブの歴史も、まさに、一年、一年の歴史の積み重ねであつた。したがつてその間には、幾多の苦節の年もあつたろう。いま、六十年間の一年、一年をつぶさにした記録を持たない私が過去を語り、現在を批判し、将来を論ずることは妥当ではないが、要は、たつた数人が歌いはじめた、「讃美歌の合唱」が今日の大グリークラブになつたという現実の姿を、いま、もう一度ふりかえり、その間、知らず知らずの間にきずかれた伝統と誇りを再確認しつつ、今後のよきカタチとすることに六十周年の意義があるのではないか、ということだ。歴史とは、そんなものだ、と私は思いたい。同志社だけでなく、最近はこの大学でも、合唱団の発展はすさまじい限りで、メンバーの数といい、合唱技術といい、少なくとも私の知る昔日のそれとは格段の違いがある。「日本一」をきそうコンクールでさえ、簡単に甲、乙のつけら

れないまでになつた大学グリークラブ、ひいては合唱界の今日の姿である。しかし、そのなかにあつても、同志社グリークラブのような生いたちと、輝やかしい歴史をもつているところ、となると話は別だし、そうさらにあるはずはない。

古い話になるが、私が末だ、四、五才の幼な児だつたころ、私の家に八人の学生が泊つたことがある。旅館ではないが、当時、朝鮮の京城にあつた私の家は、教会とのつながりもあつて千客万来、泊り客の絶えない家だつた。しかしこの八人の泊り客だけは不思議と私の記憶からはなれない。楽しい歌をうたい、話を聞かせ、はては小さな私を肩車にのせてハイキングに出かける……。なんとというすばらしい大人たちだろう、と子供心に思つたものだが、これが私の同志社行き、グリークラブ入りを決定づけた大きな要素でもあつた。

恐らく創立十五年を記念したグリークラブ初の鮮、満演奏旅行の途中だつたのだろう。その中には、今なお健在な山口隆俊、名古屋の平田甫先生など、大先輩が加わつていたと記憶する。

今では、グリークラブの年中行事の一つである北海道旅行が、もつとも遠距離の旅行先となつたが、これをはるかに上廻る演奏旅行が、わづか、八人というフルメンバリーで教会を中心に行なわれていたのだ。しかも、そこには、ただ単に、音楽会を開いて、立派な合唱を歌い、聞かせるというだけではなく、グリークラブ全員の中にもつと大きな何ものかがあつたと信じる。グリークラブの尊とい歴史である。『さらにはない』なかなか言い切れる言葉ではないが、こうした立派な先輩の残した足跡を知る私たちには、

これほどきつぱりと言ひ切れる言葉はない。また誇りでもあらう。六十年といえは、人間の年令でいへば還暦というおめでたい年に当る。昔なら、功なりとげ、ゆうゆう自適の生活に入る年だろう。しかし、現代は違ふ。世の中は変り、なお、一日、一日と激変する世相である。同志社内の様相も変り、おのずから学風までが變つてしまつたかの感すらあるこのごろのことだ。大変な学生時代だと思ふ。グリークラブが變つた方向をとるのも当然だし、これを批判することはあたらない。しかし、々々にはない同志社のグリークラブ。これだけは変りようがない。六十才といへば、本當におめでたい年である。寿命ののびたこのごろでは、まさに円熟期であり、最後の仕わけをまつとうする年に入つたのである。このことは、グリークラブにも言える。ただ違ふのはグリークラブには最後の仕上げはない。またいつもが仕上げであるということだ。

もはや、円熟の域に達した技術、これに過去六十年間にわたつて培かれた何ものかをプラスするなら、さらに、さらにグリークラブは大きく飛躍するだろう。大変な努力がいるが、これはどうしても続けなければならない。

盛大な六十周年のお祝いが、こういう意味で、グリークラブ発展の土台となることを祈り、かつ信じてやまない。(クローバークラブ幹事長)



昭和二十八・九年の

グリーククラブ

河上 文 久

今から十年前の昭和二十九年、私は栄光ある同志社グリーククラブの渉外マネージャーとOCD（同志社学生混声合唱団）指揮者を兼任し、その上二年にわたって、グリーク報を一人で編集発行していた。

グリーが私の生活を支配し、独占し、一万八千円の大学授業料はグリーのために払っていたと云つても過言ではなかつた。

それほど首つただけのグリーの出来事を今、少しも思い出さないことは、人間の記憶力なんてハカないものだと思う。私の手もとにグリー五十周年記念誌がある。私にとつて血と汗の結晶の一冊である。あれだけ多量な原稿をどのようにして集めたのやら、サツパリ記憶にないが、とにかく、ものすごく苦勞した事はよく覚えてゐる。

私が一人で夢中になり、原稿を集め、編集し、校正印刷までやつたのだから、あれも入れたい。これもめづりたいと自利がきかず、ツイあんなに豪華な本となつてしまつた。そしてグリー財政に二十数万円の大金を抱え込ます破目に至り、その後、数年間、この返済のため後輩に苦勞をおかけした事を大変申し訳なく思つてゐる。しかし、グリー六十年の歴史上、この記念誌はとても貴重なものと今も大なる自信を持つてゐる。小野寺昭爾君（大阪フィル事務局）が私を累命に補佐し、励ましてくれたから発刊されたのだ。私自身この編集のため貯金はスツカラカンになるし、マイ

ブライバシーはメチャクチャであつた。その上、演奏旅行のマネージはしなくてはならないし、OCD定期演奏会は迫つてゐる。OCDの幹事長はグリーベースの大橋寛治君（日航ワシントン支局）で私と名コンビ、私が指揮者だから、この頃はグリーをほつたらかしてOCDに没頭してゐた。おかげで第二回定期演奏会はまれに見る大成功、大橋君とおどろき上つて喜こんだものである。この演奏会はABCから中継放送され、今もこの録音テープを大事に持つてゐる。この一ヶ月前、グリーは全日本合唱コンクールで優勝、うれしかつた。しかし、五十周年記念音楽会をやりとげ虚脱感から、コンクールのための練習が極めて低調で、イキ上らず指揮を渋谷昭彦君（同志社大学）から野村忠君（ラジオ毎日）にコンクールの二週間前にかえたが、どうもダメで益々深刻になるばかり。幹事長の山泉達雄君（東海銀行）がある日、むつかしい顔をして私に「今のグリーのピンチを救うのは君や」というから、「ナンデヤ」と問うと、「君が先日、OCDの練習の時、指揮台の上で手ばなしでワワー泣いたけど、あの時の皆に与えたショックは一〇〇日の練習量に匹敵するほど、見事なホームランや、窮余の一策、泣いてくれ、今泣いてくれたら連中がビツクリして日本一になれるんや」。さすがの私は二の句が出ず「アホウ、演技で泣けるかい」「トホホ泣いてくれぬかと逆に山泉君がベソをかく始末。だから全国制覇した時は天にも上る心地であつた。全国コンクールは小倉で催され、私は昼間特急かもめ号の一等車を一両はづさせて、我々の貸切車を増結させ、国鉄西部支配人をびつくりさせたのを覚えてゐる。コンクール審査員の堀内敬三氏は「今日の出来なら世界中の何処へ出してもはすかしくないですね。余

りにハーモニイが美しいので居眠りをしそうでしたヨ」
美しいハーモニイがグリーの特長であつたが、どうもあの頃はリズム感にとほしく、早稲田大学グリーと対象的であつた。

私が同志社へ入学したのは昭和二十六年、中学チャペルではじめて聴いたグリーの情緒纏綿としたハーモニイのすばらしさを今も忘れる事が出来ない。第一テナーで堂々と歌つていた美少年に私がおどと入部の挨拶をするのと、「僕もフレッシュマンですワ」の返事、中島完治君（BB rondon 放送局）である。彼はグリーとはホザナ・コーラスからの深いつき合いだから、田舎出の私とはエライ違いで「オエリヤーセンノウ」であつた。指揮は勿論マエストロ日下部さんだ。故森本芳雄先生が発声中に我々の中へしやがみこんで聴いたりされるので、コワくてたまらなかつた。

二年生になると（二十七年）私はグリー第一テナーリダーの中川健一氏宅（会社社長）に下宿した。相棒は日下部さんの次の指揮者の寺本和利氏（三年生・日本生命）と今藤勇君（一年生・阪急バス）のクアルテットで四重唱が出来、毎日毎晩「う・ボエム」が好き、楽しい愉快な生活を送つたものだ。徹夜で大歌をうたい、レコードをならし隣家のオヤジがどなつて来て、四人平身低頭した事もあつた。

ナカガワ・イングリッシュなる珍語を研究努力して作り、「バタコボンイチレオニレク」（タバコ一本おれにくれ）「ンバシメダマカ」（ばんめしまだか）とクワルテットで他人をケムリに巻いたものである。

一年生の時、恐ろしくてたまらなかつたベースの巨匠・

矢是栄士氏と戸所義雄氏が卒業間近かで、大変おだやかになられ、恐ろしいもの知らずになつた私は、中・四国演奏旅行のマネージメントをどうにか、やりとげた。二十七年七月、豊岡、倉敷、広島、徳山、宇部、山口、小倉、福岡、長崎、熊本、大分、松山、今治、西条、高松にて演奏会を持ち、片桐先生も勿論同行下さつた。書き忘れたが、日下部氏の次に間淵孝志氏が指揮者になつたが、四月の臨時総会で寺本和利氏が指揮者となつた。九月、京都、大阪で第一回東西四大学演奏会が開催された。

昭和二十八年となり、中川健一、酒見 一、馬場晴夫、浅田禎夫、上山隆久、斉藤勲、下山茂、福島茂二、古本寅三、西村譲治、正木康雄、大河内護之、矢是栄士、戸所義雄、森川禎一、山田孝彦の各氏がご卒業された。

二十八年年度のグリー委員会は幹事長・野村秀治（大阪商船）・指揮・寺本和利 渉外・黒川正彦（大商証券）

内政・河上文久（三年） 先輩・吉川悟一郎 庶務・山果達雄（三年） 会計・朝倉盛正（カシマヤ・オンワード）

第一テナーリダー・中島完治（三年） 第二テナー・小山欣一（フオーコインズ） バリトン・野村秀治 ベース・黒坂洋平の各氏で発足した。黒川氏が就職試験の他ご多忙のため、渉外を私にまかされたので、ずい分苦勞をした。

五月、東京で立教グリー交歓会を催し、七月東北、北海道演奏旅行を行なつた。演奏地は下妻、仙台、一ノ関、青森、函館、小樽、札幌、旭川、夕張、室蘭、大、弘前、私は単身で三、四回北海道に行き、マネージメントに必死つた。一週間で京都、旭川間を二往復した珍記録もこの時のものだ。片桐先生と野村幹事長の強いご支援で私はやり抜いたが、「頑張れば何とかなる」という信念はこの頃の苦

勞で私は得た。どこだつたか、北海道で一ヶ所直前にキャ
 ンセルになり、途方に暮れた私は、半日室蘭駅のベンチで
 消然と放心していたが、意を決して全然コネのない富士製
 鉄室蘭工場に乗り込んで演奏会をOKしていたといふ時の
 うれしさは例えようもなく、心中男泣きしたものである。
 私はマネージメントの時はいつも一人で行動した。車中で
 見知らぬ人と仲良しになり、その人の家へチャッカリと泊
 めてもらうのが私の趣味で色々面白い事もあつた。私は
 在職中、三万六千キロも汽車に乗つてとびまわつたけど、
 旅館へ泊つたのは数えるほどしかない。九月、第二回東西
 四大学会を東京で開催、十一月、第八回関西合唱コンク
 ルに於て関学に破れ、またも第二位だつた。グリーの歌は
 は実にきれいだ。やわらかい、困気を持つてゐる。しかし
 ポロを見せぬグリーの合唱を聴き終つて、その印象をたど
 るといつも物足りない何物かが残る。もう一つビリツとし
 たところがないのだ。古き皮ブクロに新らしき酒を盛る時
 が来ているのではなからうか。思い切つた解釈、自由な発
 声をしてみよう。ハーモニーの乱れをPPでゴマかしたり、
 こぎれいにまとめる事を止めよう。これはコンクール直
 後のグリー時報第五号での日下部氏のご発言である。シエ
 イクスピア劇でもキャタストロフエという個所である。宗
 教曲は神の声の再現でなく、人間の叫びであるはずだ。と
 云われる日下部氏のご批判は我々現役は身にしみて痛く感
 じてゐる処だが、良き指揮者を持たぬ我々は「グリーの今
 後のあり方」につき、暗中摸索、連日にわたり煩悶した。
 二十九年となり、グリー委員会は幹事長・山県達雄
 指揮・渋谷昭彦(三年) 渉外・河上文久 内政・本多省
 一(サンヨー電機) 外政・小田泰弘(三年) 会計・門

田耕一(倉紡) 先輩・橘守(三年)
 (三年阪急デパート)が選挙された。

庶務・下岡祥

当時の練習は

火曜日 午後一時半～五時
 水曜日 午前十一時～午後一時

木曜日 午後四時～七時 幼稚園
 土曜日 午後一時～五時 精思館
 日曜日 午後一時～五時 中学チャペル

部員の出席率は約六〇%であつた。

精思館

三月二十二日より山陰、山陽、九州演奏旅行を行なう。
 福知山、松江、浜田、防府、下関、長府、宇部、八幡、直
 方、田川、福岡、熊本、井原、福山、岡山、西総社。
 松江で音をとりに違え、五回も演奏をやり直して満員の聴衆
 を啞然とさせた。ご同行の片桐先生もおどろかれたが、我
 々もステージ上にて赤くなつたり、青くなつたり。しかし
 その後の演奏がすばらしく、賛助出演のNHK松江合唱団
 がこんなに上手な合唱団の間に出るのはイヤだとゴネだし
 て、なだめるのに一苦労した。

六月二十五、二十六日京都と大阪で創立五十周年記念演
 奏会を行なつた。四千名の聴衆全員にグリークラブのペナ
 ントを配布した。そして翌二十七日岡崎公会堂にて記念円
 遊会を催す。その後西宮のマーキユリーレコード会社にて
 グリーレコードを録音、ナインチ盤三枚を九百円で一般に
 売り出した。

七月十四日から東海道演奏旅行(大津、津、平塚、静岡、
 名古屋、安城、木曾川、神戸)

九月に東西四大学演奏会を東京、大阪で持ち、十一月全
 国合唱コンクールに優勝、五十周年の終幕を飾るにふさわ
 しい、一大ベージェントであつた。

本年は創立六十周年、グリーにもつともよろこばしい事は創立者の片桐哲先生が依然としてご健在なことである。先生のために是非、盛大な記念行事を計画してほしい。私はまた外国へ行くので、記念式には参加出来ぬかも知れないが、同志社グリーの永遠の発展を心より祈っている。

カレソン

この曲はカール・ウイルヘルムの「ラインの守り」で、それに詩をつけたものです。

作詩の動機は、グリークラブの創立者の片桐先生がギューリツキ先生にエール大学の校歌集をいただいて、同志社にも同志社の歌がほしいとギューリツキ先生におつしやつたのがきっかけでアメリカでも詩人といわれていたボーリス先生にお頼みになったのです。

この詩は One purpose に詩想の根拠をおいてあり、その内容は三節迄が「神の為に」「同志社の為に」「祖国の為に」と詩つたのですが第四節には同志社の発展の為に是非必要で、同志社が先に立つてやらねばならない「世界同胞の為に」という考えを折り込んであります。

・駄足・昭和二十四年に栄光館でグリークラブが歌っているのを聞かしていただいて本当に上手に歌っていらつしやると思いました。

作詩者の話



米国の大学グリークラブより、メッセージをいただきましたのでここに記載いたします。

To the Doshisha Glee Club !

The Amherst College Glee Club extends to the Doshisha Glee Club the very best wishes for its sixtieth anniversary. The great distance between northeastern United States and the beautiful city of Kyoto is made small indeed by the fellowship of music. I feel this especially strongly having had the great privilege of hearing your glee club sing and of having sung with you in the summer of 1961. The unity and joy that all of us felt who were fortunate to join with you in making music at that time will remain with me always, and now that I am at Amherst College I feel again that communion that, by the relation between our two schools, unites us over so many miles. All of us here in the Amherst Glee Club and at Amherst College wish to express to you the faith that sixty years are but the excellent beginning of a long and illustrious career for the Doshisha Glee Club.

Bruce Archibald, Director
Amherst College Glee Club

To the Doshisha Glee Club

The University of California Glee Club, its members, alumni and Director send greetings and congratulations to the Doshisha Glee Club on the occasion of its 60th anniversary. Your University and City must be very proud of the Doshisha tradition of providing an opportunity for generations of students to sing and be inspired by great great music.

We remember with deep pleasure the joint concert shared by the California and Doshisha Glee Clubs in 1957. The weather was very warm, but the spirit of friendship, the cordial hospitality and the musical comradeship was even warmer. Doshisha sang beautifully. We are very proud of this brief association with the splendid singers there. I hope that we may soon again renew this international musical fellowship, either here in California or perhaps there in Kyoto.

Robert Paul Commanday, Director
University of California Glee Club

Dear Doshisha Glee Club

"It is a great pleasure for me as director of the Harvard Glee Club to extend congratulations to our sister organization, Doshisha Glee Club, on its 60th anniversary. Singing is an activity and an art that draws men together the world over in the common enterprise of expressing beauty. Members of the Harvard Glee Club had the privilege of being guests of the Doshisha Glee Club in the summer of 1961 and participating in such a joint activity whereby a feeling of brotherhood and common love between nations was furthered. We salute you on this anniversary and wish you the best of luck in the years of singing that lie ahead."

With warm regards,

Sincerely,

Professor Elliot Forbes
Harvard Glee Club

Greetings to the Doshisha Glee Club !

It is indeed a privilege for me to be able to greet you, the Doshisha Glee Club, on your sixtieth anniversary. By this time the membership of your glee club has probably changed completely since it was my pleasure to act as your guest conductor on several occasions. I recall my relationship with your group with many fine memories. Long and meaningful friendships resulted from this association, and I shall always cherish the musical experiences we shared. I am sure you now continue the same strong devotion and quality which has been true in the past. Congratulations on your continued success, and with very best wishes to you for the future.

Yours sincerely,

LEBANON VALLEY COLLEGE CHOIR

Pierce A. Getz, Director

Fellow Singers of the Doshisha Glee Club !

May I extend on behalf of the members of the Yale Glee our heartiest congratulations and best wishes on the occasion of your 60th anniversary celebration. we who have also enjoyed a long and strong tradition of male chorus singing can appreciate what your anniversary means. we know that singing accomplishes much more than is observed in the performance of the music learned ; it engenders friendships which last far beyond college days and brings people together through a natural bond. we wish you continued success and look forward eagerly to the day when we can lift our voices with you in song.

Sincerely,

Fenno Heath
Director
YALE GLEE CLUB

訪日海外グリークラブ

との交歓演奏会

彼等が同志者グリークラブに与えたもの

森 田 秀 夫

戦後同志社グリークラブが海外より訪づれたグリークラブと持った交歓会は次のアメリカよりの一流学生合唱団とのものであった。

一九五六年十一月十四日

Westminster College Choir

同志社栄光館

一九五七年 六月十六日

University of California Glee Club

"

一九五八年 八月十一日

University of Hawaii Concert Choir

"

一九六一年 六月二十四日

Harvard Glee Club

京都会場第一ホール

上記四つの大学合唱団の外にも非公式に訪日したものもあつたが、今ここでは、そのことには触れずに先ず、Westminster Choir について述べたい。今は亡き創立者及び指揮者であるジョン・F・ウィリアムスン博士に導かれた四十五名の合唱団員はアイズ・パレス特設舞台における京都公演の翌日観光の途中、同志社を訪問した。栄光館においてグリークラブ Doshisha Student Choir 及び女子大「即席」合唱団の歓演奏の後、彼等は二・三曲得意の宗教曲を歌ってくれ、その外に超満員の学生達を

驚ろかせ、よろこばせてくれたのは、歌手の一人で前夜パ
ンステ R. Thompson の "The Testament of Freedom
のピアノ演奏していたメンバーがバツハのオルガン曲を披
露してくれたことでした。そもそもこの合唱団が他のそれ
らに異なる最大の特色の一つはメンバー凡てが単に合唱者
だけでなく優れた楽器演奏者でもあり、公演中、曲によつ
て四・五人の歌い手が楽器を演奏することしばしばあり、楽
しい音楽会だった。栄光館における交歓会のフイナールは
あの歌い手のオルガン伴奏で、アメリカ人は英語、我々は
日本語でウイリアムソン博士の指揮で歌い合唱音楽の楽しさ
を再認識したものだ。

次に同志社に訪れたのは、Robert Paul Comman-
day 氏に率いられた男声合唱団 University of Cal-
ifornia Clee Club であつた。本格的な交歓演奏
会を持つたのはこれが、戦後最初であり、その上毎日新聞
社と共催というのでマネージの方もなかなか大へんだつた。
彼等が来るまでにいろいろ勝手な想像をして不安な気持ちで、
練習に、はげんだものだった。ある者は、日本の方は技術
的に相当低いから十二分に練習だけでも横んでおかなけれ
ば……。又河原林指揮者は我々が「米」と「つけ物」を主
念にしているのに対して、彼等は「ビフテキ」の大男だか
らボリュームを出す練習をしておかなければ、我々の演奏
は聞けたものではない……等今かそうその日がやつて来た。約五十名
以上のメンバーのうち栄光館に現われたのは約四十名あつ
た。十名は連日の強行スケジュールと梅雨の悪天候のため倒
れているとのこと。「前奏」は日米合唱団による各々の国
歌演奏。アメリカ人の美しいホワイトコートに対して同

志社ボーイは暑苦しい黒の学生服で、幕が下りると指揮者
の Comman-day 氏は我々の河原林指揮者に同志者のバスは
すばらしいと讃めておられた。第一部、第三部はカリフォ
ニアが欲しい、第二部は同志社が、宗教曲三曲に多田武彦先
生が同志社グリークランのために作曲して下さつた「雪
と花火」全曲を初演し汗だらけの熱演でカリフォニア以上
の拍手をうけた。演奏後ある同志社大学で教鞭をとつてい
るアメリカ人教授曰く「同志社の方が又句なしに上手だ。
アメリカ人へつれていき紹介したいものだ……しかし、彼等
が京都に来た時のコンディションは最悪であつた様だつた
ので、その時の演奏だけをもつて批評するのも考えものだ
が。話變つて今日日本の大学グリーククラブが愛用している
インサートはカリフォニアが帰国後、当時日本「一流」グリー
ククラブのメンバーが、彼等のそれを参考にして作つたも
のが「改良」に「改良」を加えて、今日まで、残つてい
るのである。当時そのコンサートをハンガーにかけ旅館から
音楽会場へだけでなく、バスや電車の中まで、その「スマ
ート」な恰好で往復するのが、流行し、それを我々はカリ
フォニアスタイルと呼んだ。というのは、彼等が在日中そ
の恰好で日本を歩いたからだ。

彼等が、日本のグリーククラブボーイズに残していつたも
のは何もスマートな演奏会用のコートや襟ネクタイだけで
なく重要なものの一つは、日本の生活様式、環境それに
西洋音楽が日本に入つてから歴史が浅いせいもあり舞台で
歌うということには我々にとつては特別な事であつたものを
(今もそうであるが) 日常生活の延長であるというこ
とを示してくれたことである。日本の学生達が、演奏をす
るのに対してアメリカの学生歌手は楽しみのためにリラッ

クスな気持で演奏していた。Precision (正確、精密) を強張する固く relaxation (ゆるみ、やわらぎ、気晴らし) を持つて来てくれた様だった。

一九五八年八月にはハワイより約六十人より成る混声合唱の University of Hawaii Concert Choir が、栄光館で単独の演奏会を朝日新聞社の主催で行なった。同志社グリークラブは主催者と協力して彼等の接待役に廻り歌ったのは京都市主催のレセプションのみでそれも College Song 程度だった。彼等は宗教曲からハワイのフラまで紹介し聴衆の目をも楽しませてくれた。もうその頃になると日本の音楽愛好家は泊来演奏家、に対して狂信的な興味を示さず、かなり批判的になつていた。グリークラブメンもだんだん海外からの訪問者に対する接待に慣れて来たせいもあつて、教人のメンバーは彼等のある者を「つまらぬ」で家庭に招いたり、記念品を渡したりして楽しんだものだ。ハワイという場所柄、メンバーの中には沢山の二世や三世がおり初めて訪づれた祖父父母、又は父母の母国、日本でその国民の前で歌つたことはさぞ感激深かつたことだつたと思う。ある二世のメンバーが、小生の家に遊びに来た時、こういつていた祖父父母達がハワイに渡りその後、彼の家庭から日本に来たのは彼が初めてで、彼の父母は、彼等の両親が生れた国、日本訪問を熱望していると……

三年間隔をおいて一九六一年六月にはアメリカの保守的な古い都市で京都の姉妹都市でもあるボストンの Harvard Glee Club が、ハーバード大学音楽部教授 Elliot Porter 氏に率いられて約六十名のエリートのエリートが訪づれて来た。ハーバードといえば、アメリカ、いや世界の一流中の一流大学だけあつてグリークラブメンバーも著名人

の令息が沢山おり、元ハーバード大学総長 Dr. James B. Conant の親類にあたるそのクラブの幹事長をいつる Loriot Conant, Jr. に現総長の令息 James R. Pusey に David Rockefeller Jr. 等上げられる。宿泊は彼等の希望により、京都ボストン姉妹都市委員会の手配により全員同志社グリークラブメンバー同大、京大教授校友等の家庭に泊まり日本の家庭生活をも楽しみ勉強していった。小生の家も例の Loriot Conant, Jr. Precision といふ一人 Bruce Gibbs という 1st tenor に晩開放した。

演奏会は京都市、朝日共催により、京都会場第一ホールにて高山市長夫妻初め、内外の著名人列席のうちに幕が上がり第一部ハーバード、第二部同志社による日本民謡三曲とハーバードとの合同でニグロ曲、第三部再びハーバード。ハーバードが終始宗教曲、一般曲をやわらかく、清礎しかも時には力強く歌つたのに対して同志社はレパトリのせいもあるが、浅井君指揮により「おてもやん」「こしき島船歌」「島原の子守歌」を特に「おてもやん」をバイタリテイに富んだ快演をし二五〇〇の聴衆をわかせ、その日の日米両合唱団による演奏中の正巻でもあつた。その時の市長夫妻の喜しそうな顔は忘れ難いものであると同時に舞台の角で聴いていた。ハーバードメンをも驚ろかせていた。

翌日梅雨空の中を二台のバスに分乗して市内観光をし、その夕方高山市長主催のスキヤキパーティーが円山の料亭「やあみ」にてあり、その席上元同志社総長令息であり元同大講師でもあつた市長はハーバードメンに同志社とアイモスト大学との関係、自分のボストン訪問中新島先生の恩人、ハーディ氏の旧宅を訪づれた。等の話の後、次の様に

前日の演奏評をさせた。

『聴衆は演奏後三・五五燐って行つた。その中のある人が「ハーバートも良かつたが同志社も何かなかやるじやないか。」と替めていた……』指導者のフォーブス教授も市長に次の様に感想をいつておられたとのことだつた「同志社グリークラブは単に技術的に優秀であるばかりではなく、その若々しい潑刺とした態度に非常に感銘を受けました。……」

いづれの交歓演奏会においてもアメリカの合唱団の演奏よりも同志社のそれの方が人気があり上手に聞えた様であつた。しかし、これは多分に同志社のレパートリーが日本人聴衆に親しく響くせいだつたからではなからうか。日本に西洋音楽が入つて来たのはそう古くはなく、いづゆるそれは我々にとつて「輸入品」である。一方アメリカ人にとつても国の歴史が歴史故西洋音楽といふかヨーロッパの伝統的な音楽を吸収してから日は未だそうたつていない筈だ。彼等にとつても西洋音楽は「輸入品」なのである。しかし日本の「輸入品」と異なる点は、日本人が、音楽のみをヨーロッパから輸入して吸収したのに対して彼等アメリカ人は、その古い音楽を身に付けた人間をそのまま移民という形でヨーロッパから輸入したということである。それ故彼等は日本人とは問題にならない程の古い西洋音楽を身につけているため、我々は技術的、及びその背景にあるものを彼等より、学ぶべきものが未だ沢山あるのではないだろうか。

一九六五年六月七月には、アメリカのもう一つの名門 Yale Glee Club が約十年前に隠退した Marshall Bartholomew 氏の後をついだ指揮者の Prof. Fermo He-

ath に導かれて約六〇名が訪日する予定である。Heath 氏は私への手紙で同志社グリークラブと共演することが出来ることをメンバー一同楽しみにして待つてゐる、と伝えておられ、Yale Glee Club との交歓演奏会で同志社グリークラブが Yale 大学と同じ College Song の曲、ドイツの歌「ラインの守り」に基づいて作曲された「Doshisha College Song」を Yale men の前で歌うのも楽しみである、又彼等も同志社ボーイの前で彼等の College Song, 「Bright College Years」を歌う日を待ち望んでいるとのことである。

昭和三十四年三月卒業

森田 秀夫



五十一周年から六十周年の歩み

昭和三十年

- △一 月二日 フェアウエルコンサート 於栄光館
- △四 月二三日 ジョイントコンサート出演 於栄光館
- △五 月七日 関西合唱祭参加 於中之島公会堂
- △五 月二八日 立教交歓演奏会 於栄光館
- △六 月十日 大津演奏会 於賀会館
- △六 月十九日 紫明混声合唱団発表会 助出演 於成安教会
- △七 月一日 慶応、同志社文連交歓演奏会 於大阪産経会館
- △七 月四日、八月十八日 東北、北海道演奏旅行 於松岡キャンパスハウス
- △八 月二七日、八月三十一日 合宿
- △九 月十六日 富山演奏会
- △九 月十八日 東西四大学合唱演奏会 於東京日本青年会館
- △九 月十九日 " " 於大阪産経会館
- △十 月十六日 国際ロータリークラブ出演 於岡崎勸業会館
- △十一 月三日 関西合唱コンクール出場 優勝 大阪朝日会館
- △十一 月六日 キリスト教音楽会出演 於栄光館

△十一月二三日 全日本合唱コンクール出場 優勝 於小倉体育館

昭和三十一年

- △一 月十九日 フェアウエルコンサート 於栄光館
 - △三 月十六日、四月六日 中国、九州方面演奏旅行
 - △四 月二八日 市主催土曜コンサート出演
 - △五 月二七日 関西合唱祭
 - △六 月九日 立教交歓演奏会 於東京タツカーホール
 - △六 月二三日 創立五十二年定期演奏会
 - △七 月二十日、八月二日 南海、東海、関東方面演奏旅行
 - △九 月十五日、十六日 関西大学演奏会
 - △十 月二八日 関西合唱コンクール 於大学の部第二位
 - △十二 月四日、八日 メサイヤ出演
- この間数回にわたり新日本放送「レナウン歌のつどい」に出演

昭和三十二年

- △一 月十九日 フェアウエルコンサート 於栄光館
- △二 月二三日 奈良高等学校サーグイス
- △三 月十日、三十日 春季演奏旅行 於山陰、九州地方
- △五 月十一日 新入生歓迎クラシックコンサート 於栄光館
- △五 月十二日 関西合唱祭 於栄光館

- △五 月二五日 第二回クロバクラブ演奏会賛助出演
△六 月十六日 カリフォルニア大学グリーククラブ演奏会 於栄光館
△六 月二三日 賛助出演 於栄光館
△六 月二三日 第六回東西四大合唱音楽会
△六 月二九日 第九回立教交歓演奏会 於東京日本青年館ホール
△七 月十九日 第九回立教交歓演奏会 於栄光館
△七 月十九日 第二回グリーククラブ合宿 於淡路島
△七 月二七日 第五回クラシック音楽会 於高松・松山
△八 月七日 二十日 夏季演奏旅行 於東海、東北地方
△十 月七日 彦根東高校サウイス
△十 月二四日 梅花フェア出演 於大阪産経会館
△十 月二七日 慶応：同志社、又連交換音楽会出演
△十一 月九日 関西合唱コンクール 於尼ヶ崎文化会館
△十一 月二三日 大学支部第一位 於栄光館
△十一 月二三日 全日本合唱コンクール 大学支部優勝
△十一 月二四日 同志社EVE音楽会 於大阪府立体育館
△十一 月三十日 同志社EVE音楽会 於栄光館
△十二 月二日 全日本コーラス第一位招待演奏会出演 於ヤサカ会館
昭和三十二年
△一 月十八日 フェアウェルコンサート 於栄光館
△一 月二三日 NHK海外放送録音
△三 月十一日 四月二日 春期演奏旅行

- △四 月十九日 新入生歓迎音楽会 於中国、九州地方
△五 月二四日 同大マンドリンクラブ演奏会賛助出演 於栄光館
△五 月二五日 関西大合唱祭 於大阪府立体育館
△五 月三十一日 創立五十四周年定期演奏会 於産経会館
△六 月七日 第十回立教グリーク交歓演奏会 於栄光館
△六 月二十日 第二回東西四大合唱音楽会 於東京タツカホール
△七 月二四日 八月十三日 第七回東西四大合唱音楽会 於栄光館、大阪毎日ホール
△八 月十九日 ハワイ大学合唱団京都公演共催 於東北、北海道地方
△九 月十日 十四日 グリーククラブ合宿 於栄光館
△九 月十九日 京大男声合唱団と交歓演奏会 於ピワ湖畔北比良
△九 月二十日 土曜コンサート 円山音楽堂 於ヤサカ会館
△九 月二八日 第三回クロバクラブ演奏会賛助出演 於栄光館
△十一 月三日 関西合唱コンクール 於大阪朝日会館
△十一 月二八・三十日 EVE音楽会 於栄光館
△十一 月二九日 EVE音楽会 於大阪産経会館
△十二 月十三日 京都育英友の会音楽会 於府立医大講堂
昭和三十四年
△一 月十七日 フェアウェルコンサート 於栄光館

- △二 月二十四日 読売テレビ出演 於難波府立体育館
 △三 月十日～十二日 春季演奏旅行
 △五 月三十一日 第十一回立教大学グリークラブ交歓演奏会
 △六 月十三日 創立五五周年記念大阪特別演奏会 於栄光館
 △六 月二十一日 東西四大学交歓演奏会 於大阪毎日ホール
 △七 月二十五日 創立五五周年記念神戸特別演奏会 於東京共立講堂
 △七 月六日～八月十六日 夏期演奏旅行 於神戸国際会館
 △九 月九日～十四日 於東海、東北、北海道地方 合宿 於小豆島
 △十一 月三日 関西合唱コンクール 於朝日会館
 △十一 月二十七日～二十九日 同志社EVE音楽会 於同志社栄光館 大阪産経会館
 △十二 月十二日 同志社比春寮創立二十周年記念クリスマス音楽会 於栄光館

昭和三十五年

- △一 月十六日 フェアウエルコンサート 於栄光館
 △三 月五五日～二十日 春期演奏旅行 於中国、四国 於中国、九州地方
 △四 月三十日 近江兄弟社演奏会
 △五 月五日 医療施設「東大寺整肢園」慰問
 △五 月六六日 市民コーラスの夕べ 於京都都会館第二
 △五 月十四日 Joint Concert 於栄光館
 △五 月二十二日 関西合唱祭 於京都都会館第一ホール
 △六 月一日 定期演奏会 於 “ ”

- △六 月十一日 立教交歓演奏会 於文京公会堂
 △六 月二十五日～二十六日 東西四大学 合唱音楽会 於京都都会館第一ホール。フェスティバルホール
 △六 月三十日 神戸特別演奏会 於神戸国際会館
 △七 月二十六日～八月十六日 夏期演奏旅行 於東海、東北、北海道地方
 △九 月七日～十一日 琵琶湖畔北小松にて合宿
 △十 月十六日 市民コーラスの夕べ 於京都都会館第二ホール
 △十一 月十二日 大阪EVE音楽会 於フェスティバルホール
 △十一 月二十六日～二十七日 京都EVE音楽会 於京都都会館第一ホール
 △十二 月三日 大阪特別演奏会 於大阪毎日ホール
 △十二 月八日 京都音楽家クラブに出演 於京都都会館第二ホール
 △十二 月十七日～十八日 ノートルダムコーラスコンサートに出演

昭和三十六年

- △一 月十六日 Farewell Concert 於京都都会館第一ホール
 △二 月二六日 甲賀特別演奏会 於甲賀高校
 △三 月四日 奈良特別演奏会 於あやめ池田形劇場
 △三 月五日～二一日 春季演奏旅行 於中国、九州地方
 △四 月二八日 同志社、関学、神戸女学院特別演奏会 於大阪産経ホール
 △五 月十三日 Joint Concert 於京都都会館第一ホール
 △五 月二七日 県人会主催演奏会 於栄光館

△六	月 四日	立教十三同交歓演奏会	於京都都会館第一ホール	△十二	月 九日	奈良特別演奏会	於あやめ円形劇場
△六	月十七日、十八日	十回東西四大学	於京都都会館第一ホール	△十二	月十四日	関西六大学合唱団によるチャリティコンサート	於大阪中之島公園開堂
△六	月二四日	ハーバード大学グリークラブ演奏会に賛助出演	於京都都会館第一ホール	△十二	月十九日	第一回関西グリークラブ交歓演奏会	於京都都会館第一ホール
△七	月 一日	五七周年定期演奏会	於京都都会館第一ホール	昭和三十七年			
△七	月二九日	大津特別演奏会	於滋賀会館ホール	△一	月 七日	クローバークラブ、グリークラブ合同新年会	於京都国際ホテル
△八	月三日	夏期演奏旅行	東北、北海道地方	△一	月十六日	フェアウエルコンサート	於京都都会館第一ホール
△九	月 七日、十三日	夏期合宿	於長野県野尻湖畔野尻湖ハウス	△二	月十八日	ラジオ関西録音	於ラジオ関西
△九	月二四日	奈良青々中学校新築記念音楽会出演		△二	月二四日	ラジオ関西のラプソディ録音	於十字家楽器店
△九	月二八日	東大寺整肢園慰問		△二	月二七日	大阪東高校卒業音楽会	於大阪東高校講堂
△十	月十六日	同志社女子校アッセンブリーアワーに出演	於栄光館	△三	月 三日	大阪特別演奏会	於大阪産経会館
△十	月二二日	京都市自治記念音楽会出演	於京都都会館第二ホール	△三	月 四日	二四日於東舞鶴、西舞鶴、綾部、鳥取、福山、岡山、琴平、今治、新居浜、広島、門司、博多、佐世保、長崎、大分	
△十一	月 三日	十五回関西合唱コンクール	於大阪朝日会館	△三	月二一日	同志社大学卒業式出席	於同志社栄光館
△十一	月十一日	同志社創立八六周年記念音楽会	於フエスティバルホール	△四	月 六日	新校舎「尋真館」南大堂式出席	於尋真館
△十二	月十六日	〃	〃	△四	月 九日	同志社大学入学式出席	於同志社栄光館
△十二	月 三日	同志社グリークラブ特別演奏会	於栄光館	△四	月十四日	本年度練習開始	
				△四	月二十日	集団就職者激励会出演	
				△四	月二八日	同志社大学体育会リーダー養成会出席	於京都都会館第二ホール

△五	月三日、五日	春季合宿	於大谷婦人会館	於光明寺
△五	月十九日	県連主催新入生歓迎音楽会		
△五	月二三日	第四六回京都市交響楽団定期演奏会賛助 出演 於京都都会館第一ホール	於同志社栄光館	
△五	月二九日	同志社 JOINT CONCERT		
△六	月三日	関西合唱祭	於京都都会館第一ホール	
△六	月九日	第十四回立教同志社グリー交歓演奏会	於大阪朝日会館	
△六	月二三日	第十一回東西四大学(早、慶、関、同) 合唱演奏会	於東京文京公会堂	
△六	月二四日	同上	於京都都会館第一ホール	
△七	月四日	下京PTAコーラス会賛助出演	於大阪フェスティバルホール	
△七	月十一日、十五日	夏季合宿	於長岡光明寺	
△七	月二八日、八月六日	夏季演奏旅行		
△十	月四日	同志社女子高校アッセンブリー出演		
△十	月十六日	京都市自治記念音楽会	於同志社栄光館	
△十	月十八日	青年会議所主催慈善演奏会	於京都都会館第二ホール	
△十	月二一日	ラジオ関西録音	於京都都会館第二ホール	
△十	月二四日	国連DAY記念音楽会	於枚方開成小学校	
△十	月二七日	大阪看護学校生を励ます会出演	於京都新聞ホール	

△十	月二八日	フルブライト留学生歓迎会出演	於大阪朝日会館	
△十一	月五日	ABC放送録音	於上羽ビルホール	
△十一	月六日	文連交歓慶応ワグネル同志社グリー交歓 演奏会	於京都都会館第一ホール	
△十一	月八日	神戸特別演奏会		
△十一	月十六日	同志社大阪EVE音楽会	於神戸国際会館大ホール	
△十一	月二五日	同志社グリークラブ東京演奏会	於大阪フェスティバルホール	
△十二	月二日	奈良特別演奏会	於東京日比谷公会堂	
△十二	月八日	大阪特別演奏会	於あやめ池円形劇場	
△十二	月十四日	NHK海外向け放送録音		
△十二	月二十日	同志社グリークラブ定期演奏会	於京都都会館第一ホール	
昭和三十八年				
△一	月六日	O・Bとの合同新年会		
△三	月一日	フェアウェルコンサート	於京都国際ホテル	
△三	月六日	大阪演奏会(柔道部主催)	於京都都会館第一ホール	
△三	月九日、二五日	春期演奏旅行	於大阪産経ホール	
△四	月八日	入学式出席	於同志社栄光館	
△四	月三十日	新入生歓迎演奏会	山陽九州方面	

方芳者金銀第二ホール

△五月二八日

関西TV出演
同志社 JOINT CONCERT

於京都都会館第二ホール

△五月二九日、三十一日

強化合宿 於大谷ホール

△六月五日

第十五回立教大学・同志社両グリークラ
ブ交歓演奏会 於京都都会館第一ホール

△六月九日

第二回同志社、関学交歓演奏会
於大阪フェスティバルホール

△六月二二日、二三日

第十二回東西四大学交歓演奏会
於東京上野文化ホール

△七月一日

クロークラブ定期演奏会賛助出演
於大阪毎日ホール

△七月二六日、八月十一日

夏期演奏旅行
於東海道、東北、北海道方面

△九月十日、十四日

夏季合宿 野尻湖畔
於栄光館

△九月二八日

チャリテイコンサート

△十月三日

京東高校記念祭出演

△十月十日

於京都都会館第一ホール

△十一月十五日

創立五九周年定期演奏会

△十一月二日

於大阪毎日ホール

△十一月四日

PTA音楽会賛助出演

△十一月十日

於京都都会館第一ホール

△十一月十六日

大和郡山演奏会 於郡山市役所
嶋本教授の古稀祝 於京都ホテル

△十一月十七日

福知山演奏会 於福知山市民会館

△十一月二四日

同志社大学音楽祭出演 於栄光館
EVE大音楽祭出演

△十一月二七日

於大阪フェスティバルホール
クリスマスチャリテイコンサート

△十二月七日

昭和三十九年
クロークラブ・グリークラブ合同新年会 於京都国際ホテル

△一月十二日

送別演奏会 於京都都会館第一ホール

△一月十六日

△三月七日、二三日

春季演奏旅行
於中国・九州地方

△四月八日

入学式参加 於栄光館
同志社ジョイン・コンサート出演

△五月三十日

立教、同志社交歓演奏会 於大谷ホール
第十三回東西四大学合唱会

△六月七日

於神戸国際会館

△六月十三日

△六月十四日

於大阪フェスティバル
朝日合唱祭参加 於西本願寺会館

△六月二八日

△七月二十日、八月十日

夏季演奏旅行
於東海、東北地方

△七月二七日

合宿 於野尻湖
京阪神教会高校生大会出演 於栄光館

「楽しい思い出」

寒河江 正

(昭和三十一年卒)

グリークラブ時代の思い出は「同志社で学んだ思い出」よりはるかに新鮮で強烈であつたというのが僕の卒直な意見である。

よき仲間めぐり合い、ハーモニイにしびれ女性を知り、価値ある先輩から、悪徳の知恵を授かつたのもこのクラブであつたことを思えば感謝こそすれいささかも後悔はない。その具体的イメージは或る日の幼稚園のちいちゃなイスに座つての練習風景であつたりやゝきどつた定期演奏会場での緊張感であつたり、時にはコンクールで宿敵関学に僅少差で破れたあのにがにがしい思い出であつたり又或る時は恒例の演奏旅行の際、全員がみせたあの何んとも云えないリラックスした得意のポーズだつたりする。

僕はその想いを時折、グリークラブ時代に写した大バンの二冊のアルバムの中から発見し自慢げに語ることを趣味としてゐる。

今そのアルバムをめくつて僕は一九五二年度の卒業生であつたことに気づいた。それ程、アルバムに貼かれた写真は、時間の遠近を感じさせない。

ところで何んといつても思い出のハイライトのトップは春、夏、恒例の演奏旅行である。毎年新入生の中には、「歌をうたいたい」という純粋な目的よりもこのハデな演

奏旅行がメアテというのが何人かはいた。しかも彼等は共通して途中から入部する。つまりグリー一年令からは初心者だが学年からは先輩という「二重性格」をもち彼等のステイジへのセレクションにもその待遇扱いにも頭をいためた。たゞ彼等はこれの「栄光の全国演奏旅行」があく迄も目的ということができびしい練習にもよく耐えた。しかも共通して音楽以外の特技は天下一品。例えば野球がうまいとか。コンパ会場の「ツウ」であつたりしかもグリークラブの先輩諸氏が開けば思わずマニをひそめる住俗のカエウタ」にも威力を発揮していた。

又こうしたメンバーの殆んどが元体育部に所属していたと思われるたくましい風流うと強じんな体格の持主ということも例外なく共通しておりしかも比較的彼等の下級生からの人望は圧倒的であつた。

僕は当時幹事長という立場から彼等を部のチーム作りに専念してもらいたい。グリー史上最高といわれた百四十名の部員も比較的スムーズにまとまつた。

思い出のセカンドシーンはステイジでの笑い上戸が比較的多かつたこと。

これには先ず指揮者が困つていた。

僕もその不真面目なメンバーの一人でステイジではよく笑つたものである。送別演奏会プログラムの卒業生プロフメンバーの中に、僕をトリオラクターズ(三人の笑い上戸)メンパーの一人ときめつけているが現象は比較的気の安らぐ地方でのステイジには多かつた。解放感にともなう気のゆるみから起るものといわれたが全く笑いをこらえられないことはつらく中にはたゞステイジに上つただけで、まだ演奏が始まらないうちにもう一生果敢、顔を下にむけて笑

つて「重症笑い上戸」もいた。

演奏レパートリーの歌詞がおもしろかつたり演奏中にリキミすぎてふとかわいらしい生理現象がおこつたり、会場にユーモラスな顔を笑見したり、その笑いの動機は人さままであつたがここの笑いをこられる特効薬は卒業する瀬戸際迄みづからなかつた。但しこの笑い上戸の伝統は、クロバークラブの中に存在していることをつけくわえておこる。

さて想い出のシーンの第三は女性フアンにもていたこと。メンバーの中に積極的かつ行動派の多かつたことが想い出される。

彼等の丁度一年先の先輩からは共学の経験者が比較的になかつたために、いささか「テレ屋」が多かつたように記憶しているが、僕等の時代にはその実行力の上からもこれ迄のいかなる時よりも都を抜いていた。しかし伝統的に「女性フアン」にもてたのは今も昔も変らない筈。こうして眺めているアルバムのどの一枚一枚にもその色彩豊かな女性フアンが目につく。

入部の真の動機に女性への接近をひそかに夢見たものもいたときくが、それがやがて指揮者個人への憧れ、ソリストへの美声のためいき、グリークラブ全体の人気であることに気づくのはその日を要さなかつた筈である。グリークラブをとりまこうとした限象は、あくまでもグリークラブそのもののもつ音楽的雰囲気「モテタ」のであり、「ボク個人」「俺一人」がもてると思うのはいささか検討違いの錯覚であつた。しかし僕は今でもこの現象はグリークラブだけがもうサイドの「安らぎ」「慰め」であり、これがひいて我々をコーラスの虫たらしゆる大きな要因になつたと

確信している。

こゝで我々五十二年度卒業生のための送別演奏会のプログラムを手元のアルバムからひきうつしにして要約してみよう。

①卒業時の在席メンバー（勿論我々も含めて）約百四十名。
②指揮者 河原林昭良（現在関西テレビディレクター）
③副指揮者 市島章三（旭化成延岡勤務）
④五十二年度指揮者 梅井文治（関西テレビディレクター）

⑤五十二年度卒業生

①トップテナー三名 ②セカンドテナー四名

③バリトン五名 ④バス 八名

⑤送別演奏会のプログラム

賛助出演 クローバークラブ指揮（日下部吉彦氏）

プログラム

第一部 ①宗教曲

②（河原林 昭良指揮）
黒人霊歌

③（市島章三指揮）
三曲 誰も知らない私の悩み他

④（日下部吉彦指揮）
ロシア民謡

⑤中南米音楽（小生を含めてトリオ編成）
「ツクマンの月」「君を愛す」「クージャ
の哀歌」他

第二部

① クワルテット (編曲は同期の三上貞夫君)
「バーストップ」「誇り高き男」他

② 日本歌曲

ベチカ 彼岸花 柳河

(河原林昭良指揮)

③ 五十二年卒業生の曲

青蛙 (山田耕作) ミゼレレ (ベートーベ

ン) パーバリーショップのアルバムから

「私のボニーは海の彼方」「オーメリンデ

イ」梅井丈治 (指揮)

④ 花束 春の調べ (送別の歌) で幕。

なお五十二年卒業生二十名で、雑誌「不協和音」を発売
現在第六号迄成長。全国的に分散した仲間と交流を続けて
いる。ママさん登壇、坊やの飛入りなどアットホームを狙
いとし、グリークラブで学んだメンタールハーモニイは白
髪迄続く予定。最後に五十二年卒業生を代表してグリーク
ラブ六十周年心から万才。

「サルマスの全国優勝」

大河内 俊彦

大地に芽生えた樹木の年経り、活き／＼と育ちゆく様は
まことに美しい。殊に大自然の中で数多の困難に耐え、し
かも尚、花の季節に絢爛たる花びらを、そして、みのりの
頃には枝もたわむに豊かな実を結ぶ、その樹木の誇らしさ。

Hail Our Glee Club の由来

グリークラブ創立五十周年を迎えた時、記念演奏会のプ
ログラムに部歌のないことが問題になった。五十年もの歴
史を有するグリーに部歌がない筈がないというわけでは
いさぎがしたところ、三〇周年の頃のものと思われる「グ
リークラブ部歌」の楽譜がみつかった。が残念なことによ
れは、歌詩、メロデー共に今一つのところがあり、これ
を部歌として復活させることに難色を示すものが多かった。
そこでグリーの部歌にふさわしい曲をさがしているうちに、
アーモスト大学歌集の中の一曲を採用することになった。
もちろん歌詩で Amherst & College となつていて
ところを適当に Glee Club と置きかえて五十周年のス
テージにのせた。それ以来、何の因果か、この曲が今日ま
でグリーの部歌として歌われているのである。

部歌の原曲名は Alma Mater。アーモスト大学を
一九〇二年に卒業した J. N. Pierce の作詩作曲で
ある。

出典は W. P. Bigelow, ed, Amherst College Songs,
Amherst, Massachusetts, 1932, pp. 42~45

渋谷昭彦
(昭和三十一年卒)

物云わぬ樹木は、私たちの求めぬ限り只の植物でしかあり得ない、しかし道を求める者には、常に大きな心の支柱である。創立六十周年を迎える我が同志社グリーのために心からなる拍手を送ろう。

扱て、六十周年と一言にすれば簡単ながら並大抵のことではない。しかもそのメンバーの一人として輝かしいグリーの歴史に自分は、一体どれ程の役割を果し得たか。故ケネディ大統領の言葉ではないが、

グリークラブが我々が与えてくれたかという事ではなくメンバーの一人としてグリーに何をなし得たか——と

ふり返つてみる時は、只、只、皆無。余りの無力さに、消え入りそうな気持で一杯である。このことは、創立以来グリーと共に生きてこられた片桐哲先生が誰よりもよく、御存知の筈である。

只、ここで、私の在籍中、唯一無二の快挙と、自他共に許してやまない事柄を同年度のメンバー諸君と共に是非思



い返してみたい。

一九五七年十一月廿三日。この日は我にとつて、まさに晴天の霹靂・生涯忘れたい日となつた。全日本合唱コンクール大学の部優勝である。近年は、合唱コンクールの存在そのものの良否が云々される傾向にあるようだが、当時は兎も角このコンクールが、最大の目的の一つであつた。勿論同志社グリーの全国優勝はそれが初めてではなかつたが好敵手、関学グリーの実力と真つ向うから対決し、しんぎを削つた結果、獲得した正真世銘の第一位である。

「何の関学グリーごときが、目の色を変えることもあるまいに」とおとしやる向きもあろうが、クワンセイ・ガクインは、名実共に立派な合唱団であつた事、そして当時の我々としては毎年、一位を奮われ、あるいは招待演会に逃げられ技術的にも、かなりの開きがあつた事も告白しなければならぬ。而も、これを上回る力で勝利を得たわけである。

関学を倒せば、全国制覇はこちらのもの、すでに全国大会の前、十月末の尼ヶ崎文化会館に於る近畿地区予選で優勝は確定的であつた。

課題曲と共に出場メンバー60人が、最高の実力を出し得たデュオー・バ作曲、壮厳ミサのグロリア。日頃の猛練習から機械の緻密さで生み出したハーモニイ、同志社グリー伝統の大らかさ、さらに加えて心のハーモニイを名コンダクター河原林昭良氏のタクトに委ね、晴れ／＼と歌い上げたあの瞬間。出来栄はまさにサルマスであつた。更に翌十一月の廿三日大阪ナンバ府立体育館で、関東東北代表の多摩川学園をなんなく押さえて、職場の部のクロバークラブと共に、兄弟相並んで優勝をかちえたわけであ

る。

毎年、霜月の静かにめぐり来る度に、この日の感激が、まさしくと甦つて来る

そして、又、グリー・クラブが与えてくれた限りない心の支えに、尚何の報いもなし得ていない自分の無力を知るのである。

追記 サルマスの語源に関しては長沼成光君に直接おたずね下さい。とにかく、とてもない程のという

意味。

尚、この原稿に関しては脇地駿君のサルマスの記憶力を借用しました。

五十五期委員会を回顧して

大谷 九二男
(昭和三十四年卒)

第五十五期委員会の任期は、グリー規約では昭和三十三年九月の第一回練習日より一年間となつておりましたが、四回生の就職運動の都合上、三十三年六月の定期総会に於て委員の改選が行われ、九月の正式発足を待たずに、代理の資格で、麥則的に委員会は発足致しました。

委員会のメンバーは左の通りです。

会 渉 外 内 委	会 政 制	マ マ	ネ ネ	松 村	早 原	野 嶋	充 英	兵 治	経 商	経 3	経 3	経 3	経 3
計	ネ	ネ	ネ	牧	野	充	兵	経	3	3	3	3	3

庶 山 田 英 二 經 2

副 指 揮 者 外 務 森 田 潔 經 2

指 揮 者 塩 谷 邦 男 經 3

フ ァ ース ト バ ー ト リ ー ダ ー 西 恒 喜 光 法 3

セ カ ン ド バ ー ト リ ー ダ ー 楠 貴 至 法 3

バ リ ン ト バ ー ト リ ー ダ ー 桶 喜 光 法 3

ベ ー ス バ ー ト リ ー ダ ー 楠 喜 光 法 3

その頃のグリーの様子はと申しますと、前年に河原林兄の指揮にてクローバークラブと共に、全日本合唱コンクールのに於て輝ける完全優勝を遂げておりまして、グリーメンの意気は軒昂たるものがあり、部員数も百四十名を超え、各パート共よく充実し、グリー部内には隆々たる生気が漲つておりました。

が、演奏の出来にむらがあり、全般的には徐々にグリー

の力は低下しつつあつた事です。

練習は火曜日(十四、三〇、十七、〇〇)、水曜日(十、三〇、十三、〇〇)、木曜日(十六、〇〇、十八、〇〇)、土曜日(十三、〇〇、十七、〇〇)の週四日で、練習場はまちで一定しておりませんでした。この事は我々の最も頭を痛めた事なのですが、我々の卒業迄には改善出来ませんでした。

演奏旅行は、春、夏の休暇時に行い、日本各地の県人会や校友会等より喜んで迎えられ、有力地方都市に於ては恰も定期演奏会の如き観を呈し、その合唱技術やマナーは同志社学生の模範として賞讃的となつておりました。

我々の任期が、丁度このような時期に当つていた為、現状の維持のみならず、更に飛躍向上させ、その年のコンクールにも昨年に引続いて是非優勝せねばならないと云う至上命令が課せられ、その重荷によるめきながら懸命に走

りはじめたのが、我々ではなかつたかと考えております。

それでも各委員は夫々大いなる抱負と、猛烈な闘志をもって委員会の運営に当りましたが、我々委員会の初仕事として印象に残っているのは、ステージで着用するユニホームをきめた事です。これは委員就任の御挨拶に片桐先生宅へお伺いして種々御教示を受けた時、先生より、これからのコーラスは、視覚にも訴えるように云々とヒントを与えられ、早速委員会に諮つてクリム色のスマートなスーツを作り、これに紺色の蝶タイ、黒ズボン、黒の靴といった現在に見られる服装を定め、これを特別第二種正装、ちよめて特ニと称しました。当時この事に對し、賛否相半ばし、上級生諸兄よりは随分非難の声を聞きましたが、仲々ステージ効果は良く、演奏の出来もこの特ニを着た方がいづも好かつたようです。そして、我がグリーを元祖として全国の大学合唱界に服装革命が広まつていつた事は、一寸愉快な事でした。

その夏の演奏旅行は、北陸、東北、北海道方面へ二十一日間、十八ステージの予定で出発しましたが、この旅行に幹事長の大河内兄が参加されなかつた為、私が幹事長代理を勤め、随分辛い思いをさせられました。この旅行で特記すべき事は、四回生の参加が少なかつた事で、理由は全て就職運動の爲と云う事でしたが、これはグリーの戦力低下という意味に於て、又グリー氣質も今や転換期に來ているという意味で注目すべき事だづたと思います。グリーの魅力も厳しい現実の前には薄れてしまうようです。ともあれ、この演奏旅行に於ても珍談、失敗談は数知れず生れましたが、福井で遭遇した北陸の大洪水や、名古屋の旅館でゴツソリと泥棒にやられた盗難事件、又、浜松の館山寺で、

解禁日に羽目をはつして片桐先生に厳しく叱責された事など、今でも懐しく思い出されます。これら色々な出来事を通して、グリーメンタルハーモニーは高められ、伝統の力に支えられて、我々学生ばかりの団体にも拘らず、常に立派なステージを持てた事を、私は誇りに思っております。秋のシーズン初めには、前外政マネの坪井兄の努力によつて、同志社グリー、京大男声合唱、同志社混声の三団体による初の交歓演奏会が、彌栄会館に於て、京都會館建設基金募集のタイトルにて開催され、大成功を収めました。指しくもこれが最初にして最後の演奏会になつたように、願わくば今一度復活して、在洛合唱団の親睦と、最近沈滞気味の大学合唱界に活を入れて貰いたいものだと思っております。

秋の合唱コンクールに備えて、我々の猛練習は早々と始められたのですが、このコンクールこそ我々委員会に課せられた最大の任務であると考えたので、優勝を目指して最善の努力を払つたつもりです。指揮は四回生の市島章三兄においし、自由曲にゴダイの難曲を選びましたが、仲々思うように練習は進まず、セレクトにセレクトを重ね、出席状態の悪い者は勿論の事、バランスの關係上、内声部の優秀な人達をもメンバーより外し、随分無理を重ねましたが、思つたような音が出ないままに内心の焦燥と絶望感を隠して、万一の僥倖を頼みに出場し、そして敗れました。唱つてゐる時も前年の様に心からシビレて來ないので駄目だと思つたととは、終つて後の僚友の言であつたが、追われるものゝ辛さを感じ、と味つたコンクールであつた。コンクールに敗れて泣こうとは夢にも思わなかつたのだが、二位の楯を手にした時は不覚にも涙が溢れて止らなかつたものであ

る。
コンクールが済んで後は、まるで憑きものが落ちたようにスーッと気が軽くなつて、今迄のように何が何でもグリーのために、という一途な気持が消え失せてしまつたのは不思議であつた。

その年のフェアウエル演奏会は、学期末試験の始まる寸前、即ち一月中旬に開催した。フェアウエルを試験前に開くのは我々にとつて非常な苦痛であつたが、敢て変更する事なく前例を踏襲した。そして例年、卒業生より載く記念品を、今年は物ではなく現金で頂戴したいと申入れ、これをグリー会館建設基金にする事を決めたのである。

このプランは片桐先生より載いたものですが、我々が入部以来常に困つて来た問題が練習場確保の件であつて、外政マネの主な仕事は練習場を確保する事であり、明日の練習場を求めて学内、外を走り廻り、音響効果やピアノの有無など問う所ではなかつたし、学外の幼稚園、教会、小学校の講堂等、全ゆるツテを願つて練習場を確保したものである。だから一度練習を休むと次の練習場が判らなかつたり、遠隔地の為、人数が揃わなかつたりした事は度々の事であつた。故に、我々の練習場が欲しいという希望は強かつたのだが何しろ巨額の資金を必要とする為、飽迄も夢物語であると考えられて来た。併し、その年に至つて練習場、難は頂点に達し、もはや夢物語で済ます事が出来なくなり、九牛の一缶にいたりとは云え、グリー会館建設のきつかけを作るものとして、敢て卒業生諸兄にお願ひして、貳万数千円の基金を頂戴する事になつたのである。そしてこれは定期貯金として絶対に他の事に流用しない事という申し送りをつけて、後輩に話して行く事になつたのである。勿論

我々も卒業の際には貳万数千円の基金を後輩に話していつたのであるが、最近、現役諸君に聞いた所、そんなお金は知りません、との事で、折角のプランも何処かで雲散霧消してしまつたようである。

我々としても、そんなはした金でグリー会館が建つとは考へていないが、これはあく迄も呼び水であつて、この計画を続けていく事によつて、全グリークラブ卒業生の間に会館建設の機運を高め、全卒業生による拠金がなされグリーメンの練習場でもあり、卒業生の連絡場所であり、宿泊所であり、演奏会場であるグリー会館が建設される日を夢みているのである。

この次の記念誌は、グリー会館建設記念特集と願いたいものである。

一つの時代

横田 義

今日をさかのぼる事、約七年前の陽春四月、同志社マンとして入学した全の学生が、如何にこの四ヶ年の学生々活をエンジョイするか、頭を使つた事と思う。

試験地獄の難関を無事突破し、サーこれから充二分に翼を延ばしてやろうと云う様に考へた学生が大部分であつたと思うのが、偽うぬ所と思う。

しかし、又一方では、大学は学問を学ぶ所であるとして、決意を新にした学生もいた事であろう。

そんな中で、私はクラブに入部し、学生々活を充実させ様と考へたのであつた。そして幾多のクラブの中から選んだのが同志社グリークラブであつたのだ。

この様な単純な気持ちで入部した私を面くらわしたのが、いかめしい上級生の発声テストであつた。

暗れて入部はしたものの、約半年間はコールユブングンの練習の明暮れで、楽譜は一ツも手に出来ず、何とくびしい事だと云うのが実感であつた。

しかし、新入生の私達にすばらしいプレゼントが待つていた。

それは、その年の秋、全日本コンクールでの優勝である。応援にいつた私達でさえ、感激に酔つた一瞬であつた。相国寺での祝賀会で優勝カップに冷酒を入れ、上級生から順番に一口づつ口を付け、私達下級生の所に廻つて来た時のカップの中は、ツバキで泡が立ち、飲めたものではなかつた。

又その年には、カルフォニア大学のグリークラブの来訪をみた。

初めて接した外人ボーカルの大きなゼスチャー入りの身のこなしに、これでも学生なのかと、おどろきもし、又その陽気さをうらやましく思つた。

グリーの練習ではきびしかつた上級生諸氏も、一度練習を離れると友達のように親しみやすく、その上、当時の上級生は、仲々線が太かつた。

当時は、ノス全盛の時代で現在の様に不自由を感じなかつたときだったので、数々の武勇伝をよく拝聴したものだ。

つた。

そして、部内で麻雀大会を開催出来る程、麻雀人口が多かつたし、ダンス熱も非常に盛んでクリスマスにパーティーがしばしば開かれた程だつた。

この点では、新入生の私も人後に落ちず良く健闘したものだつた。

しかし、上級生が卒業されるに従がい徐々に線の細いグリーに変貌しつつあるのが感じられた。

だから私達が委員会を構成したとき、新入生当時のグリークラブの雰囲気に戻す様努力した。

その意味で、出来るだけ下級生と接し、馬鹿話の一ツもして、友人として付合つたものだ。

委員会のメンバーを次に御紹介すると、次在、名誉顧問でいらつしやる片桐先生を、顧問として、コンダクターに森本潔君、バート、リーダーの野村忠三、天野守信、山下泰治、阿部の四君、渉外マネに寸田達君、内政マネ中川正君、庶務、磯野稔、外政祖父江重剛、副渉外民秋言、副コンダクター浅井敬一君、それに乾事長に不肖私、横田義の以上、十二名であつた。

この新委員会が発足して最初の行事は彦根を振出しとする夏季演奏旅行であつた。

演奏地の移友会、県人会の暖かいお世話で無事、北海道は札幌で解散する事が出来たが、何分、かけ出し委員会では色々と戸惑いする事も多かつた様だ。

途中浜松では、天体に興味があるのか物干台に昇り、尚不満を訴へるグリーメンは屋根の上にはいつくばつて、自然界の不可思議にして雄大なる行為に目を奮わしたのであるが、内政マネ中川君にコッピドクしかられ、翌日より発

熱してステージをおりるグリーンメンがいた。

二週間程の期間を男性ばかりで団体生活をするのだから仲々楽しい事もあるが反面むづかしい事も生れてくる。

この様な点を解決する意味で旅行期間を通じて二、三日の休養日がとつてある。

この日は朝から完全な自由時間、あるものは麻雀を、あるものは先夜ツモつたルモとデートとしやれこみ明日からの演奏の栄気を養うのである。

楽しく、自己の見聞を詰めつつ始終した演奏旅行と相前後して行なわれるのが、合宿である。

当時は先輩に出来るだけ多く参加してもらう為と、経費を安くする意味で、近距離の適当な場所が選ばれたので現在の様に関西からあまり離れる事はなかった。

その様な状況のもとでの小豆島合宿は、大いにフンパツした方であつた。

海辺の旅館を全館借切つて、練習に、バート対抗のボートレースに、そして夜のコンクレヤキャンブファイヤーを囲んでの恒例の儀式に団結を強め、青春の一夜を楽しみ過ぎたものだ。

この合宿のマネージの為、合宿委員をしていた内政マネ中川正君と私とで大阪まで出かけた時、相手が留守で、このまま帰洛するのにもつたないといふ千日前の堀立小屋にもぐり込み、最前列に陣取つてのカブリツキ奮闘記は五年程経つた今日でも語草となつてゐる。

いよいよその年も押しせまると、卒業生を送り出すフェアーウエル、コンサートの準備に追われる様になつた。

毎年の事乍ら、練習への出席日数の少い卒業生のフェアウエル参加問題で何回となく委員会が招集され、卒業生

の前委員連を昆へて話合つても仲々結論が出なかつたのである。

四回生ともなれば就職問題で頭が一杯で、練習にもオチオチと参加しておれない気持も理解出来ない事もないが、後輩指導の立場にある事を考へれば欠席する事に疑問があると云う様な意見が出された様に記憶している。

結局、四回生と云う特殊事情も考慮して、出来るだけ多くの卒業生を送ると云う事に決定しいよいよ当日を迎へたのである。

片桐顧問よりベナントをいただき、後輩や客席のグリーン関係者、フアンの讚美歌に送られて退場するフェアウエルのステージの感激は、自分が翌年送られた時にしみじみと感じたのであるが、今でもあの夜の想い出は忘れる事は出来ない。

この夜こそグリーンクラブに入部してよかつたと云う幸福感と充実感にひたしてゐる。

卒業生を無事送り出すと、すぐに春季演奏旅行が待つてゐる。

広島では原爆病院とか孤児院を慰問するのを慣例としていたが、戦后十五年経いた当時でさへ戦争の爪跡が、生々しく私達の胸をえぐつたものだ。

長崎は夏季演奏旅行の札幌と同じく旅行の最終演奏地で、解散後にゆつくりと見物した為か、印象に残つてゐる都市である。

長崎では解散后早島兄宅に拾数名ものグリーンメンが宿めていただき、たたみの上は言うに及ばず押入れのフスマ迄はずして二、三人が寝ていたのを想い出す。

その狭い間に四角の台を割つて入れて麻雀をおそく迄や

つてゐる連中もいれば、一杯飲みに行き、遅く帰つて来た為、家人に迷惑をかけない心使いかベルを押さず我同志社のカレッジソングを歌つて、合図がわりにしていた心臓強いグリーメンも居た。

又演奏旅行中のエピソードの一つとして別府の露天風呂で、犬と一諸に風呂につかつていた不潔なグリーメンがいた事を付け加へておこう。

新入生を新しく迎へる春になると、在部生は無事一学年づつ進学し上級生面するのである。

氣候が良いので春は屋外の御所で練習が多かつた。

屋外の故、声を作るのに良いとか耳にしたが、女性群が通つたりすると邪念が入るものか耳にして困つたものだ。

委員会が新委員連と交替する少し前に、立教との交歓演奏会と東西四大学交歓演奏会が催される。

四大学の方は、御存じ慶応、早稲田、関学、同志社の男性グリークラブの競演ステージであり、立教との演奏会はルモ氣も入つての事として、共にハツスルするステージである。

四大学の時にはよくそのグリーの性格を見る事が出来る。大体我同志社グリーはどちらかと言へば、開幕直前迄のんびりとしていて、リラククスした性格である。

この様な単発ステージは演奏旅行の様に長期に互らないので、全力を出しきれぬ演奏会ともいえる。

翌日には、東西四大学野球大会を行つて親交を深めたり、立教の女性群をひきつれて古都案内にナイト振りを発揮したりの日をすごしたものだ。

この様にして一年間の委員を新委員に譲ると後はフエアウエルを待つ事となるのだが、合宿や夏季演奏旅行にも出

来るだけ参加して、私達が上級生に感じた同じ不満を、下級生に感じさせない様、努力したつもりだ。
今、社会に出て、学生生活とは縁遠い存在となつたが、現在でもグリークラブに入部して良かったと常に感じるのである。
団体生活でのヒューマンリレーションの難しさ、そして楽しさを教へてくれたグリーに対し、感謝の念と、誇りを持つものである。

第五七期委員会

中 島 英 嗣

前期委員会のおとをひき継いだ今期の役員は次の通りである。

指揮者

浅井 敬一

幹事

磯野 稔

外務

祖父江 剛

渉計

民秋 吉言

庶務

和氣 孝夫

副渉

林田 慎也

パートリーダー

河村 時孝

一、演奏旅行の大成功

青木 一雄・佐藤 道雄

今期の演奏旅行は、夏季約二十日間、四日市、名古屋を皮切りに北海道の小樽、札幌までの長距離にわたった。

(三十五年夏)。

また春期演奏旅行も奈良、明石をはじめとして佐賀、長崎までこれまた約二十日間近くの大旅行となつた。(三十六年春)。

県人会、校友会、その他先輩諸氏の協力もさることながら、今期の演奏旅行は渉外マネージャー民秋言君の献身的な努力に依るところが大きい。

また演奏の技術的な面に於ても、全身これ音楽のかたまりのようなフアイトに支えられた浅井敬一君の指揮に、全員が統制のとれた満足のいく演奏をすることができた。全国各地で圧倒的な名声を博することができたのはうれしい。今期に於て特筆すべきことは誠に多かつた。

二、コンクール不参加

コンクールに出場して過去に幾多の輝かしい成績をおさめて来ていることは周知の事実である。然しながらこのコンクールに出場することに依る利点とマイナス面の考慮が過去に於てあまりなされなかつたのではないか、新委員会発足と共に夏期演奏旅行中、九月の合宿の期間中間継なく本当に我々が求めているものは何か、本当に我々が為さねばならないことは何であるかということについて検討が重ねられた。

何度も全員討議を行つた結果結局次の結論に達したわけである。つまり、グリークラブを成長させその技術水準を高め一つの事に向つて全員が一同となつて感激を味わうたには確かにコンクールの出場するという手段が非常に有効であることに疑いはない。

然し我々にとつてもつと重要なことがあるのである。それは審査とかある一つの枠にとられない自由な音楽探求活動である。

限られた期間である学生時代の然も、秋という絶好の活動時に勝敗のために喜びを見出すよりも、もつと自由に合唱活動をやることが重要なのである。

このような意味に於て今期はコンクール出場をとりやめた。

コンクール不参加に依つて今期の秋には盛りたくさんの演奏会に参加することができた。

また部員の演奏会に対するはりきり方も凄じいものがあった。

すなわち、大阪フェスティバルホールに於ける同志社創立八十五周年記念「イブ大音楽会」、添上高校文化祭出演、京都公会館でのイブ音楽会、毎日ホールに於ける単独の大阪特別演奏会、京都公会館で行われた「邦人作品の夕べ」に出演、それから最近ではあまり行われなかつた女声合唱団との合同演奏がノートルダム女学院との間に行われ、フォーレの「レクイエム」を十二月十六日演奏することができた。

三、福永陽一郎氏を技術顧問に

すでに高度な水準に達した学生合唱団にあつては学生指揮者のみの指導では限度に來ていることは明らかである。幸い同志社グリークラブの置かれていた立場やその創立以来の精神的基盤について深い理解を示されている専門家である福永陽一郎氏の御好意とグリーに対する愛情に依つて、グリークラブの技術顧問として御指導を受けることとなつた。

そして昭和三十六年一月十六日、創立五十六年度卒業生

のためのフェアウェルコンサートに於て、技術顧問として
はじめて福永氏の指揮で「赤とんぼ」を歌った感激は今も
忘れられないものがある。

四、ハーバード大学グリークラブを迎えて
昭和三十六年春の演奏旅行が終わると重要な演奏会の連続
であった。

すなわち演奏旅行から帰ると息つく間もなく、四月には
同志社、関学、神戸女学院の特別演奏会が行われ、特にこ
の演奏会に於ては良きライバルである関学グリーとのなご
やかな交歓が行われこの年の十二月に開かれた歴史的な関
学グリーとの第一回交歓演奏会の礎石がつくられたのは誠
に喜ばしいことであつた。

六月に入るとますます演奏会が多くなつて部員、マネー
ジャー連中も少々グロッキー。六月には立教グリークラブ
との交歓演奏会が京都会馆で、それが終わると東京で第十
回の四大学交歓演奏会、急いで帰京してハーバードグリー
クラブを迎えて、京都駅まで出迎え、すきやきバーベキュー、
交歓演奏会、京都名所案内等々目のまわる日々が続いた。
同世代の然も同じ合唱音楽を楽しむ若者達と接する内に
やはり国境を越えた温かい人間の感情のふれ会いを感じと
ることができた。

指揮者のエリオットフオーブス教授とも親しく話す機会
を持つたが、ハーバードグリーの優秀さを強調した私に対
し「若々しく何ものにも屈しない生気あふれる同志社グリー
はその見事な統制と共にすばらしい印象をあたえてくれ
た」と述べられた。

ハーバードグリーの去つたすぐあとの七月一日には定期演
奏会が予定されており無事それを盛会の内に終えること

ができ今期の主な催は終了したわけである。
最後に創立五十七期の主な催の報告を終わるにあたり、輝
かしい創立六十周年を迎えた同志社グリークラブの一層の
発展と先輩諸氏、現役諸君並びに音楽を愛するすべての人
々の上に神の恵みの豊かならんことをお祈り致します。

「あの頃」

昭和三十六年七月—三十七年十二月

和 氣 豊 夫

「伝統」は長い間に培われた、集団のありさまである。
それが遺物でない所以には、時には時代に即応しつつ、時
には時代に先行しつつその時々、最善たる物を養いつつ
現在に及んでいるからである。「伝統」は「古いもの」で
はない、新旧を問わず最も善きものの積み重ねである。そ
こに「伝統」は創られていく。

グリーも斯くありし、又斯くあるであらう。

私の幹事長としての任期は三十六年七月から 三十七年
十二月迄の一年半であります。丁度この時期には、運営面、
技術面、そしてグリーの在り方について 従来の慣例とは
異つた方面に進んで行きました。（というより進めて行つ
たのです……）

例えば、コンクール出場を今后ずつと取り止めて、六月又
は七月に行われていた、定期演奏会を秋のシーズンに行い、
それに伴つて 委員会の変更する事、や専門家によ

る技術指導、ヴォイストレーニングを受けること、やグリークラブは「稚拙ながらも、学生の力で及ぶ限りの合唱団」であるべきか、「専門家の指導を仰いで、より高度な合唱団」たるべきか等々の問題については、従来から論ぜられていた事も含めて、グリーの新しい方面が具体化された様に見える。

そこで幾年か後に現在のグリーとは少しく形を変えて行く事もありましょう。その時には以前は何故こうしていたのだろうという。その間の事情を知る必要も生じて参りましょう。その時の参考の爲にも、私の時代の有様に付いて主な出来事を辿つてみたいと思います。

昭和三十六年 夏季

新委員の最初の仕事は、夏期演奏旅行でした。当時二回生の林君が指揮者に任命され、最初に手掛けたのが映画主題歌集、後年貫祿たつぶりの 林指揮者もデビュー當時は全く心もとないありさま。幹事長としても心もとない私共々、全く「ええかいな」といつた不安な一時期でした。曲目は浅井指揮者の日本民謡、ロシア民謡、ドイツミサ、黒人霊歌、林指揮者による映画主題歌集、及びシルバードイトカルケットのステージでした。演奏旅行の目的は、メソタルハーモニーの涵養と地方文化の向上にありました。しかし現在では、かえつて地方に行つて 各合唱団の評価をされる有様で、地方文化の向上などはとも 口にすべくでないかと思ひます。従来の演奏旅行は長期間に渉る強行スケジュールの消化により 自分達の実力をつけていくという、多方にコンディションを無視した演奏効果に随分差があるといつた、鍛鍊的な自分達本位の旅行であつたかの様に思えます。

今後の在り方としては 休養日を充分にとり コンディションを整えて 最高の演奏を聴いていただく方針をもつべきかと存じます。

要するに地元における演奏会と同じ、レベルのものを演奏旅行にて発表するという心掛けを持つて欲しいものです。

三十六年 秋期

合宿からコンクールまで、九月～十一月

九月早々、福永、畑中両先生に来て頂いて野尻湖畔で合唱しました。

コンクールに備えて 課題曲「波」自由曲「グロリア」を練習したり、畑中先生に発声の訓練を受けたりしました。厳しい練習の一方、手軽な曲をハモつて、楽しんだりしました。日曜日には 対岸に避暑に來られてた 大山牧師を御招待して、日曜礼拝を持ったのも印象的です。規程の正しかつたのに、ハウスの主人も驚いていた程で、就寝時が來ると一齋にシーンと静まりかえり、トイレへ行くのも気がひけた位です。今から思うと、もう少しのんびりしてても 良かったかなあーと思います。

合宿から帰ると 連日連夜コンクールの為の練習が続きました。浅井氏の命令で 楽譜の第一ページに「私はグロリアを荒々しく歌ない事を誓います。」と赤鉛筆で書かされた程の張り切り様でした。練習が思う様にはかどらず、頼りとする四回生の出席も悪く、色々やきもき、それに毎日／同じ曲ばかりでうんざりするで、ちよつと陰惨なムードになるのもこの頃です。結局関西予選では、二位になりました。「俺とこが一番上手やと思つたけどなあ」と思うのは例年の事でしよう。思えば、我グリーがコンクールに参加するのは、これで最後でした。

又十二月十九日には待望の関学との第一回交歓演奏会が京都會館にて行われました。元来、関学グリーが同志社グリーかと張りあつたかの感がありました。この年は、指揮者、マネージャー連の気が合つていて、交流も多かつたことから、ひとつやろうかと次第になつたのです。合同演奏の指揮をして下さった福永先生のメッセージを抜粋してみますと「人生には思いもかけなかつた幸運が舞い込んで来ます。関学グリーと同志社グリーが二つで仲良く演奏会を開くという様な、楽しい事が起るといふ事自体、想像出来なかつた事でしたのに、これ又その二つを一語にしたという想像を絶する素晴らしさを持つてゐるコーラスを指揮する様になつたとは、その事が実現する事が確定する迄、誰よりも、私自身信じる事が出来ない出来事だつたと云えます。……」例によつて先生のオーバーな表現に、例の声を想像しながら読むと思わず先生の事を想ひ出して、微笑えんてしまふグリーメンも多い事でしょう。合同演奏はクリスマスキャロルメドレーでグリー生活を去つていく四回生諸氏にとつては、良き卒業土産となつた事でしょう。

三十七年 冬期

毎年の事ながら、卒業生が涙ながらに 別れの曲を歌うのを見るのは辛いです。試験が終つて 春の旅行となると前の辛さを忘れ 急に元気が出て来る。舞鶴を皮切りに山陽、四国、九州を演奏して 回りました。

次に 四月上旬の臨時総会について この総会では、委員会の任期を延長し 十一月の合唱コンクールの参加を中止し、従来七月に行われていた 定期演奏会を秋のシーズ

ンに行う という事が可決された。この事に於いて、定期演奏会というものはグリーの一年間の活動の総仕上げという事は、委員会の任期である 七月から翌年の七月迄という解釈に立つならば、例年の六月末又は、七月初めの定期は納得がいく。しかし、それならばステージに來れないフレッシュムには全く無縁の定期演奏会であり、又四月から七月迄の短期日では、レパトリーや練習量も万全を期しているとは思えない。まして活躍が期待されるべき、四回生が七月の定演をしておに、その後クラブ活動に参加しない傾向にある。実際にクラブとしての活動は四月から十二月迄を一年と見るべきで、秋のシーズンに定演をもつ事は、一年間に預つたレパトリーを取扱選出出来、練習量も充分だし就職問題が一段落した四回生をはじめ、一回生をも含めて一年間の活動の総仕上げが出来たのではないかと、という意見に基いて定期演奏会は 秋のシーズンという事になりました。同時に委員会の任期が問題となりました。グリーの実質的な活動は 四月から十二月迄なら、委員会もそれに伴つて 十二月から翌年の十二月に変更すべきである、という事です。七月に任期交代する心という事は、今迄の四回生中心のクラスから 三回生中心のクラスになります。そうなると 四回生は就職卒論、あるいは何となく面倒なので……という理由で、殆ど練習に参加しない、一年はまだ 充分に歌えないし、結局、二、三年生で秋のシーズン過ぎねばならないのが、実情でした。これはグリーにとつて 随分マイナスでした。そこで先の如くなつた訳で、四回生の戦力的なマイナスを 無くするには、四回生の委員会が秋の定期迄、リーダーシップを取るのが最善の方法と思われ

ました。

又コンクール参加取り止めは、今後のグリーの方針として、可決されたもので、定期演奏会が秋に変更されたから、コンクールには参加しないというのではありません。又コンクール参加に意義なし、と云うよりコンクールに参加する以外にもつと意義あるべき事をしようという事です。コンクールは各合唱団の日頃の成果を発表し、共に技術向上を計るのが、その意図かと存じます。しかし日頃の成果の発表の場であるべき、コンクールが実情はコンクールの為に練習した成果の発表の場ではないとも考えられる。二曲を長期的に涉つて練習する事は、密度の高い立派な演奏が、平素の練習に発表会に発揮される事は実際にはまず無いと云えましょう。結局順位のみを争う為のコンクールだと考えられる。順位を争う事に意義を求める合唱団、発表の場の少ない合唱団、実力の程を問いたい合唱団には、このコンクールも大きな意義がありましよう。が我がグリーは、独自の立場でもつて、より意義のある音楽活動をやるべき段階に至っている様に思えます。即ち九月から十一月迄はコンクールの為の練習であり、その姿の多彩なクラブ活動は、結局レパートリーもなく、練習量も充分でないままの不本意な活動であつたものを、コンクールには参加せず、その方を色々なレパートリーを手掛けみっちり練習を積んで、より密度の高い演奏を望むことの方に、より意義があるとして今後のコンクールには参加しないという方針を取りました。

五月初旬に春期会宿と銘打ち、大谷婦人会館で、フレッシュメンの実力養成対策を行つた。こゝで春の演奏旅行から手掛けていたリストのミサ曲の練習を福永先生に受け、

発声の訓練を大久保先生に受けた。

リストの「男声合唱の為のミサ曲」短調は本邦初演、全曲四十分の大曲とあつて、いつ迄たつても仕上がらずとに角苦労した曲です。これを鶴岡先生のオルガンで、立教、四連と歌い、済んだ時にははつとしたものです。

又六月末の臨時総会に於て、準委員会を選出した、これは、委員会の任期が十二月迄延長になつたので、来期の委員会を選出しておいて、準委員会をし、その間委員会の様子を見習つてもらつて、役務の引き継ぎをスムーズにやろう、という事で行いました。そして、こゝで新たに委員会のメンバーの中にステージマネージャーを加えました。

会宿と演奏旅行

秋には韓国演奏旅行が予定されていまして、それに備えて会宿を行つた。しかし、韓国の政治情勢が不安定になつたため、実現しなかつた。

中村先生より発声訓練を受け、「日光とピエロ」と「黒人霊歌」を主にやりました。フレッシュにこれをこなせるようになつたのは大きなプラスだつた。演奏旅行は北海道まで予定が組まれていたが東海道沿線のみ短縮し韓国旅行に備えていた。この旅行のリーダーシップは準委員会にとつてもらつた。

の趨勢に依ることが大でしようし、又、伝統が新しく礎かれていくことでしよう。

○秋のシーズンあれこれ

東京演奏会、定期総会のこと。

秋のシーズンは連日百名を越す練習参加者で多すぎてかえってやりづらいという、うれしい悲鳴の毎日であつた。コンクールに参加しない為じつくりと取り組めた曲にウインナー・ワルツがあります。本格的なウインナー・ワルツを目指したもののなか／＼リズムがつかめず、福永先生それに伴奏の細川先生に随分お世話になりました。例により演奏会の多いシーズンでしたが、その中でも東京演奏会が色々な話題をよびました。

マネージメントに関しては、グリーが単独で東京演奏会をもつたのは一昔前のことであり全く手掛りのない中をマネー・ジャ・諸君が東奔西走して会場の確保、チケットの販売等、各方面の協力を得て活躍してくれました。

グリーの真価を東京で……と意気込んで、百二十名ものメンバーが参加し、民宿、そして旅費片道負担、という経済的事情を解決しました。「リストのミサ曲」「黒人霊歌」「ウインナーワルツ」「月光のビエロ」と、それに東京クローパーによる「大中恩作品集」のステージでしたが福永先生、林君の指揮分担の問題が「グリーのあり方」についての問題にまで発展し、臨時総会を聞いて討論するという一幕もありました。

定期演奏会は、東京演奏会のレパートリーと同じく、そしてカルクテットが一ステージありました。「月光とビエロ」「リストのミサ曲」は春から歌い続けて来たり、「ウインナーワルツ」も「黒人霊歌」も秋に入つてじつくり練習出来たので一年間の総仕上げというその目的は実を成したと思います。

○グリーのあり方についての議論 三十七年秋

当時、技術問題として福永先生に指導を受けていたが先生の熱意に鑑み、単に技術顧問という立場に留めず常任指揮者として権限を持つてもらえばグリーの技術向上において大いにプラスになるのではないかと、という意見がありました。これについては「学生合唱団であるグリーが専門家に委ねるということとは、専門家のカラーをおつた学生合唱団になつてしまふ従来グリーのカラーが失われてしまふ。昨年、各合唱団が専門家に依つてゐる状態であつて、下手なりともその良さを發揮するのがグリーのあり方ではないか。」という反対意見と「学生の技術では歌い手、聴き手共に満足出来ない程合唱の水華が高くなつてゐる。グリーが合唱界の先導者たらんとするには専門家によつて技術を高めることが第一である。事実、先生に指揮してもらはうほうがうまく歌えるし、又満足出来る。グリーがより高度な技術を有した合唱団になる為には是非先生に常任指揮者になつてもらいたい。」という賛成意見とがありました。

賛否の意見は五分と五分、かといつて、挙手によつて決定されるべき問題ではありません、皆が納得して歌に打ち込めるようにすることが第一です、事を運ぶにあたつてはかような意見の抵抗をみることは、その機ではないと判断し、先生には技術顧問の立場のままに留めていただきました。

今後賛否両論がどのような比率に変わっていくかは合唱界と共にグリークラブのあり方がどうなっていくかは合唱界

「試石と踏み台」

土 生 邦 彦

我々は日頃、美しい物に対する憧憬、というものを抱いているが、このグリークラブに、於てもそれを満たそう。その為には唯単に声を張り上げ、唄い楽しむぞ、という低い、次限を越え、より高い次限へと向うべく、ステツ・バイ・ステツで、精神的にも、技術的にも努力している積りである。この内技術面に於て、四年前から福永先生を指揮者に又、ヴォイストレーナーとして、大久保、中村両先生を迎え指導を受けている。

我々の時代の前期で触れて置かねばならぬ最大の問題は、福永先生の処遇である。我々の代迄は、技術顧問という肩書きで来て頂いたのである。けれど、先生からの提案でそれを常任指揮者にして欲しい（慶応、早稲田、関学の如く）との要請が九月中旬の合宿で我々にあり、委員会各メンバー夜を日に繼いで考えた。そして一ヶ月程互いに議論を戦わせた結果、次の様な理由で委員会は常任指揮者待遇に決定した。つまり、

一、同志社グリークラブは、来期創立六十周年を迎え、演奏会等多大なる行事が見込まれ、学生指揮者だけでは、その負担大なる事を認め、（この頃京都・大阪・神戸・東京・名古屋等の地での演奏会が計画され、演奏旅行とは異なるニュアンスを持つと断定した為）

二、我々はこゝ四年限、福永陽一郎カラーという物がかなり小なり、浸透しており、それを完成する為にも、先生に實際指揮棒を持つて指揮してもらうのが、練習の能力も効果もある事、絶大だと信じ。

三、また今迄の技術顧問という解釈について、これは指揮者でなく、学生指揮者の振つているのを見てアドヴァイスするものという解釈が多方に成り立ち、又委員会が交替する度にその解釈が異なるので、先生としては、グリーに對して絶えず不安定で、落着いて参与し難い。（現に二、三年前東京演奏会の件でもめた前例があるので）

四、先生の職業は指揮者であり、教職に付いているのでないし、先生は教師的立場を嫌つておられる。それに今の段階として、練習場で口で一々アドヴァイスする過程は過ぎ、それを引き出す方法は指揮棒を振つて実際に振るより他はないという見解、それに加味し年々新しい指揮者が替りそれらに細々と一々言う仕事は教師的で自分の性にあわぬし、又ある段階迄教えたら卒業交替という事で六十周年を控えた現段階に於ては、能率悪いと判断（最も学生指揮者の重要性は認めるが）

五、音楽というものは、實際ステージで指揮している時に造られるものである。それに我々一同先生に振つて頂き、我々の音楽性を引き出してもらい、共によい物を造りたいと願うから。

かくの如き見解によつて話しは一応まとまり、この話しをクロージャークラブの先輩達や片桐先生に意見を伺う一方、最終決定権のある学生部と交渉をもちましたが、学校側の意見は、①同志社のサークル団体にプロの人が介入し、最高責任者として指導する事は許し難いし、前例もない。②

対外的にみても望ましい状態ではない。又たとえプロ人でも同志社出身なら学校の運営方針（教育方針）とマツチするが先生の場合全く関係が無い。（演奏会の課税、免税等問題によつて、我々とは全くの平行線で一致する点が見付からず、五、六回の交渉で打ち切り考え方を替え、グリー内部では常任指揮者待遇で対外的には技術顧問で行こうという事になった。（学校側も技術顧問、つまりアドバイザーであればokであつたので）そしてこの間色々な方面で意見を聞き総会でも全員一致の賛成を得、この問題も終末を迎えたと思つた十二月初旬、先生から手紙があり、グリーと手を切りたいとあり、内心驚きを秘め、急ぎ上京し、意見をもつた。それには、藤原歌劇団マネージャーの意見、先生はあく迄藤原歌劇団所属の指揮者であり、その方面の仕事が優先するのが当然である。それを今迄好意のみの関係を続けて来たが、藤原の方としては、これ以上先生が他団体に關与するのは、時間的に非常に困るので、これを契機に他団体と縁を切り、他団体の要請が有り、藤原のスケジュールの許す限り先生がタッチ出来ると云う機構に替つたという返事を頂き、こちらも今迄の如き、人情的結びつきのみ状態をやめ、正式の事務手続きをとつて行動する（つまり先生をお呼びする）という事で事は万事解決した。この間、六月に決定した六十周年委員の活動は一步一歩進め、十月二十六日のクローバー役員との懇談会で現役卒業生両方から役員を出しあい、協同してこの行事に望もうという事で体制は整つた。そして先輩方のお宅をお借りして委員会を重ね、案を練つた。又我々の代に於て初めて役員の中に文連常任委員というのを設けた。これは近年文連（文化団体連盟の略）が発言

力を増し、各クラブに色々規制を加えるに当り、当クラブとしても今迄の様に文連を無視し単独行動をとりにくくなつた。だから文連に一名正式に送り込み我々の意見なり、考えなりを出し、それに影響を及ぼそうという事になつた。このきつかけを作つたのが文連と果連共同で作成したブロック制という問題である。このブロック制とは弱小音楽団体保護育成という名目の基に作られた。というのは、今迄なら果人会としては、休みを利用して金の儲かるかりそうになり団体は波多な事では呼ばなかつた。これでは演奏旅行に行けぬ団体が沢山出来、進歩発展性が少ないとの事で、日本全国を八つ位に分け春はA団体は北海道、Bは九州、Cは山陰、とかいう風に決められてしまひ、今迄は随時好きな所に行けたのに現在では行けなくなつてしまつた。そう云う訳で今では一般マネージャーと同じく総会で一名決めて文連に送り込んでいる。（グリーと文連との連絡員も兼ねて）

来年六十周年を迎えるという事で我々としては以前からの懸案であつた、同志社グリーの為の歌という物を作曲してもらおうじやないかという事で、福永先生に相談した所、それでは友人の大神恩先生にやつてもらおうという事になつた。大神先生は、グリーの初期の先輩である大神寅二先生の息子さんである事も幸ひしてか、快く承諾して頂き、その作詩の方を幼な友達であるとかいう阪田寛夫氏にしてみらい、何とか御無理申し上げ、六月の四連迄に間に合う様お願いしたい。そして我々の為に書かれた本邦初演のステージを四連で持つ事が出来、本当に幸福に思つてゐると共に諸先生に感謝します。

役員引き継ぎ（昭和三十九年六月二十日）前にしなければ

ばならない大きな課題があつた。それは十年間続いて来ている「シルバートリートカルテット」の問題で、今迄は慣例として継続され、委員会、総会の決定権はなく、唯承認するという形でしかなかつた。つまり同好の士が集り何となく選別され、前の代のリーダーからバトンを受ける形式だつた。そこで次からはシルバートリートを一応白紙に戻し、同志社グリーの定期演奏会及びその他にカルテットという物が必要かどうかの根本的意義論を話し合い、その結果、カルテットその物の存在意義は認めるが、グリーの演奏会で一ステージを占めるのは賛成出来ないという意見が圧倒的であつた。つまりシルバート創立期は内容的にフルステージを大合唱のみで占めるのはレバの關係上無理であり、それよりも一ステージを軽い音楽等でも唄い、雰囲気でも柔らげた方がよいという意向のもとに始つた。(先輩の弁)そしてそれが何となく続いて来たが、今の段階ではグリーはフルステージやれる自信はありシルバートの必要性は全く認められない。という事になり反対者からシルバートを聴きに來る客もいるのだから絶対続けるべきだし、又大合唱と異なる味をカルテットは持つものだ。だから継続不能というのがあり、相当話しあい決を取つた結果、圧倒的にシルバートの存在価値は今の所無しという事で、代々続いたこの名前は消えてしまつた。けど委員会の要請があり、歌える可能性があれば演奏旅行に出ても良いという事になつた。そのカルテットを選択出来る権利は委員会にある。という事で結末を遂げた。(これは新旧両委員会で行つた。)

こう言う事で多方に言い尽せない説明であつたけど、我が代には色々厄介な問題が多かつた様に感じるし、それがまた長い伝統に一つの刻みを入れる様でもあつた。しか

しこの様な大問題を通じて、片桐先生、福永先生、又クロバーの方々と真剣に何度も忌憚なく話し合う機会を持てたし、大変勉強になつた。

行事に於ては成るべく、所謂「お座敷」と呼ばれるステージはやめ、意義あるステージだけやろうという事でやつたが、それでも可成り多く昨年十一月等は大小合せて七つの演奏会があり、年間四十位(演奏旅行も含めて)の演奏会があり年平均十日に一度は演奏会をやつてゐる次第。ステージ数を減らしてこの有様だから何と忙がしいクラブか明らかというものである。だから我々としては練習に対して、ともすると、情性、あるいは義務感等かられやすいが何とかこういう氣風を打ち破るべき練習内容に自己の意義を見出し又、何かを求めて、練習その他に参加したいものだと思ふ。

では全員一致の氣持がまとまり、かつ結実する事を祈りつゝ我々六十年代の報告を終わります。



座談会

グリーを語る

日下部 グリーが今年六十周年を迎えていろいろな行事が行なわれているが、また会誌の発行など、かなり力を入れているようです。グリーは最近、指揮者に福永陽一郎さんを迎えたり、ヴォイストレーナーとして中村博之さんや大久保昭男さんをお迎えしていろいろと技術的な研究に力をつけているわけで、記念誌の中でこういつたグリーの最近の技術的な問題を重要な要素として大きく取り上げたい、というような編集者の意向があります、特に今日はその三人に集つていただいて、主として技術的な面からグリーの歩んできた道、また、今後の方向といったことを、そう難しいお話ではなくて、お三人の独特の技術でもつて伺いたいと思います。

司会を相勤めます私は最近のグリーの内部についてはそうよく知らないのですが十数年前のグリーはいささかよく知っておりますし、その後OBの団体なんかをいろいろやつて関係上、外側から、ある程度は知つていゝつもりで、さういつた意味でいろいろ口をはさませていただきます。

福永先生を迎えた

グリークラブ

日下部 それでは早速、まずねお三人の方にだいたいいつ頃からどういう状態でもつて接触し始めたかということですね、概略的に簡単にお話願います。じや福永先生から。

福永 僕は四大学の第二回目ですから同志社のグリークラブとしては四十九周年の二十九年だと思ひますが、その時に四大学の合同演奏を指揮しましてね、その時まで同志社のグリークラブとは関係が合然なかつた。知り合ひもいせんでした。当時は今とは違つて合同というのは御愛敬というか団蘭のための合同演奏でした。曲目もあり合せを一諸に歌うというだけで、簡単に考えていたのでしようね。あの時、たまたま前の晩に慶応の連中と一諸に遊んで、あした関西から関西学院、同志社がくるんだけれども合同指揮者がまだ決つてないつてなことをいう。どうするのかわつたら……、さういうような話をしてもいいのかな。石丸寛さんに頼んでもだめだつたら福永さんに頼むといつたから、僕はそんなに頼まれかたじやイヤだといつたんです。それなら、その場で決つちやつたんです。その時に、同志社の連中と始めて顔を合せて、それでその当時の幹事長が野村秀治君という人だつたわけですね。その人といろいろと話が合つて意気投合して、それで演奏旅行で関西に行つたり、関

西より西へ行つた帰り途などに、よく同志社に寄るようになったんです。部屋に遊びに行つたり、一諸に出町にコーヒーを飲みに行つていた。この頃のグリーでは僕が飲み歩くつていうとバーだと思ひますけれども……（笑声）それからずつと友達付き合いをするようになって東京コラリアーズの一番最初の京都の演奏会を同志社に主催してもらつたりした。そういうような付き合いが続いて、それでレパートリーの相談を受けるようになった。そういうことで一番親しくなつたのは河原林君が指揮している時、その時には例えばコンクールの自由曲とか練習方法の事でも相談を受けたり、東京の演奏会で指揮をさしもらつたりして、その時が一番親しい時であつた。それから後は何となく頼りにされて、何かといえ、その、なんかいい曲ありませんかとかいうことをいわれたわけですね。それ以上の事はなかつた。それから、今から三年、四年前に浅井君が指揮者になつた時に（あれは改選で指揮者になつたのが、あの当時だと合宿の後かな）幹事長の中島君と浅井君とそれから渉外マネージャー

の民秋君の三人で、一度東京へいつていろんな人に会つて話を聞いて帰らうじやないかというところで出てきた時、そのいろんな人のうちにも入つて、家に遊びにきたりして、それでしやべつて、どうしても現状が、一つの行つまりつていうか、やれるところまでやつていけるけれどもこのまゝだと、ちよつと沈滞しうだし、脱皮をはかりたいといつた話をしていつた。ま、僕の意見としても技術的にかんがりのレベルに達しているから後はやつぱり音楽的な意味でね、上に引つぱりあげられる人と呼んでくるのが一番いい方法じやないか。といつてもそれじや関西で誰を推薦しますかといわれたら困るけれども、と、そういう話をしたんです。そうしたらそれから後だんだんその当時の部員の間に相談をして、話をしよううちに、いろいろあつたんどうしやないかと、僕をひつぱり出そうじやないかと、幹事会できまり総会できまりまして、それでその浅井君達の一年上の学年、森本君が卒業するフェアウエルコンサートその時によばれて正式に技術顧問といふことになつて、それが正式の関係

の始まりで、それからずつと今日まで全体的に同志社グリーの音楽的なことについて目を光らせてる役目をやつてるわけです。日下部 技術顧問はなん年前ですか。するといつおなりになつたんですか。福永 ですから三年前の一月、足かけ四年前になりますね。

出席者紹介

司会
日下部吉彦

昭和二十七年英文卒。グリー三十三年三代指揮者。現朝日放送東京支社音楽系主任。クロイパークラブ指揮者

福永陽一郎

グリークラブ技術顧問

東京音楽技本科ピアノ科中退。ピアノを井口基成、豊増昇両氏に指揮法作曲法を近衛秀磨氏に師事。現藤原歌劇団常任指揮者。

日下部 じゃ六十一年の一月ですね。

同志社グリーに必要な

ヴォイストレーニング

日下部 じゃ、今度は中村さんに……。
中村 大久保さんの方が先なんだ。
日下部 あっそうですか。じゃ順番に。
福永 その順序からいいますとね、僕がその、技術顧問ということになつて、それで始めて練習を聞いた時に一番びつくりしたことは発声練習なんです。たのどを充血させるとい



日下部 吉彦氏

うだけの発声練習をやつてたんで、あんまりびつくりしたんでこれとはちがく、音楽よりも発声練習のことだと思つて一番初めは僕なりの発声練習の仕方というのをレポート用紙に書いて浅井君に送つたんです。で

も、もちろん僕の専門外のことです。からそれだけでは駄目だというのでその次の夏の合宿に畑中良輔先生に来てもらつたんです。三十六年の合宿です。その頃は畑中良輔先生は沈滞していた慶応ワグネルを見事によみ返らせて、その名声とみに上つた頃で、きてもらつて発声の基礎をやつてもらつた。畑中先生を続けておよびすることは難しいことなので、それでおんなじ系統の先生というので、畑中さんと一諸に慶応でヴォイストレーナーをやつてる大久保君を頼んで、それがいつでしたつけ、三十七年の新入生が入つた時の始めての合宿ね。

大久保 始めての合宿ね、大谷会館でね。

日下部 じゃその辺から大久保さんにお話を……。

大久保 四月頃に陽ちゃん先生と会つて、それまで音楽会やあらゆることにお目にかゝつていたんですけれどもね。その四月頃に同志社専門のヴォイストレーナーの話が出て、畑中先生に来ていただいたけど、これから定期的に来てほしいと云う事で、そこで私も今いわれたように合宿に

大久保昭男 昭和二十八年東京芸術大学音楽科卒業。矢田部勤吉氏に師事。現長門美保歌劇団所属。
中村 博之 昭和三十三年東京芸術大学音楽科卒業。渡辺ラブ、ヴォイスストレーナー 高之助、佐々木成子両氏に師事。現二期会会員。

来てもらえないかといわれましてね。五月にゆきましてそれで大谷会館で始めてみなさんに会つて、そして玄関の所でいろいろ歌つて歓迎していただいたわけです。それから陽ちゃん先生と二人でパート分けしましてね。新入生のそれからいろいろ私なりの発声法を練習して、声だけの問題じゃなくて、普通歌い手の人等はいがいドイツ語イタリア語というのとは大概の曲でやつていますから、曲目についての言葉の発音とか、そういうふうな方面もある

程度タツチしないと発声に原因する
と思ひましてね。だからそういうふ
うなこと相気が付いたことをや
つてきたんですけれど。そういうき
つかけで……。

福永 一回目はそういうことで後は演
奏会の前とか、それから……。

大久保 夏の合宿とか。

福永 去年の合宿は勢ぞろいしたわけ
だね。(三十八年)

大久保 三十七年の夏の合宿は私、都
合が悪くて、行けなかつたんです
が……。

福永 それでヒロタンが行つたわけで
す。

日下部 あゝそうですか。それで中村
さんが入つたきつかけというのはそ
ういうことにあるんですか。

中村 パリトンの大久保さんよりも一
ヶ月も後だつたんですね、僕が初め
て教えに行きましたのは、ま、私が

九州の演奏旅行に行く前がちやうど
四連の前だつたんですよ、六月の。

で、その時に二日位でしたね。陽
ちやんと一諸に、その時が始めてで

す、グリーへ行つたのは、

福永 大久保君は慶応と兼任ですから、
四連の直前という時など大久保君は

慶応を離れられないんで、それで頂
上ひろたんがそつちの方へ行くとい
うからひろたんに……；それにテノ
ールとベース側と二人いた方が理想
的だし、それからやつぱり、京都と
東京では相当離れてますからスケジ
ュールの調整ということにいろいろ
苦心しなきゃならない。で二人いた
方が、都合がいいのじやないという
で二人になつたわけですよ。

中村 その後の夏の合宿によちやん
先生もダグ先生もいらつしやれない
つてんで、僕が一人いつたんですよ
ね。ちやうどその時に月光とビエロ
を演奏旅行にひつて行くんでそれを
ね、一年生も交えて懇切丁寧に指導
したんですよ。光明寺でね。このと
きが今までで、一番心のふれあいが、
ありすがすがしい気持ちで、東京に帰
つたようにおぼえています。

福永 その年は朝鮮に行くとか行かな
いとか。

中村 ということでくりあげてあつた
時ね。案外時間があつたんですよ。
だからほんとになつたのかしら、
普通にやつている三倍分ぐらい丁寧
に教えて、その時に発声つていうのは
はこういふふうなのかしらということ



福永 陽一郎氏

とがちよつと位いわかつたらしいで
すよね。その時の印象がすごく強く
つて、それから僕合宿は全部行つて
ますね。だからまるまる二年目にな
つたわけですよ。

日下部 そうすると、ヴォイストレー
ナーとしては例えば月に一度行くとい
うふうな定期的なものではない
のですね。

中村 ま、大久保先生忙がしいから回
数にしたら僕の方が多いですね。今
行つてるのは。

大久保 あの、ひろたん先生はいろろ
ね。演奏の方でも向うの方へもいきな
さるうれつ子ですから(笑声)。

やつぱりね学校側も気軽に来て載け
るといふので。

ひろたん先生、この頃、力を入れて張



大久保 昭男氏

切つてやつていたよいてる。

中村 やつぱりお金の面で大変ですもんね。わざわざよぶつてのはね。だから演奏旅行の途中で行く交通費だけでもむこうにこう、くつついてつてやれますし。

日下部 やつぱり演奏会の前とかそれから合宿、そういうたポイントポイントでもつて指導されてるわけですね。

中村 それ以外の時もあります。平均すれば、月に一回位は、そのためだけのヴォイストレーニングじゃなくて別にそれと無関係にお願いしたい時があるでしょう。(ありますねという声)

日下部 で、ヴォイストレーナーが二人いらつしやるという関係もありまし

てね。まづ発声的な面からちよつとお二人の話を伺つてみたいと思うんですけれども。今大雑把な話を伺つたわけですから、その、大久保さんに、そつちの方が先にいらつしやつたわけけれども、始めて学生さんのうコーラス、男性合唱というのを、お聞きになつたのは、あ、そうか、慶応がまずあつたから慶応と比べてお聞きになるようなことがあつたんですね。どうしてもね。その第一印象つていいですかね。ずぱり肝胆のなところを、どういうふうにお感じになられましたか。

大久保 最初は呼吸法の問題で少し浅いような感じを受けましたね。それはどこの大学にも共通する呼吸法の浅さというか、結局声が浅い平面的な声になりますけれども、それはやはり口腔内の具体的な広げ方、広さと云う点で、ポイントをきめてこちらで注意すれば直ると思ひますがね。音楽というものの対してはもうみなさんよくなれてる。たゞヴォイストレーナーとして不満に思つたのはそういうふうな技術的なことで、ほんの簡単なコツといひますか、発声法で一番大事な呼吸法と口腔内の広さを

よくトレーニグすればこれからが楽しみだなと云う気持ちがありました。もちろんそれまでで相当いい音楽をなさつたのはわかりましたけれども、うるさくいへばもつとつとなんか自分の小さなお手伝いでより以上のものになつてくれるなら、というよな気がしましてなんか楽しみでした。

日下部 中村さんどうでした。

中村 ま、大久保さんと同じですけれどもひらべつたい声が一番印象的でした。それから口のあけ方が、口つてその口腔がですか、その辺がわかつてない。わかつてないからそれを料理していつたんですけどね。

日下部 それで今非常に懇切丁寧におやりになつた夏の合宿ですけれどもね、具体的にどういうふうな……。

中村 あの、発声というのをたゞドレミファソラシドとさういう段階を動かすんじゃないとさうもやりましたけれどもね。一つの月光とビエロの中に曲のフレーズを出しましてね。そのテノールはこの時はこういうような開け方をして、だから音程がこういつたらのはさういふふうにあけると、さういふことをやつたんですよね。だからたゞ声を出すと

いうよりも音楽的な面と発声とを一
者にくつつけたようにしてやつて、
それが僕は効果があつたと思います。

日下部 それは個人指導ですか。

中村 いえ、個人的にぬかせてやりま
したこともありましたけど、たいて
いはパートが主です。

日下部 パート別にね。パートの中で
いくつかに分けてやつたりして。

中村 その時のね。演奏旅行でね。井
阪君というのがいたでしょう。テノ
ールのトップのパートリーダーだつ
たんですけどね。八人位でテノール
がね。いつもだつたらバテそうなの
がバテなかつたということを聞いた
からまあ少しは効果があつたんじや
ないですか。

日下部 大久保さんにその指導法つて
いうのは具体的に今おつしやつたよ
うなことは……。

大久保 それは普段のあれですか。合
宿じやなく。

日下部 ええ、普段も合宿も含めてで
すけどね。

大久保 普段の時ですと、時間的に制
限されますから合宿の時に母音唱法
の基礎的なことを各自がのみ込んで
いたとくように、ほとんど個人的と

いうと変ですけど四、五人ずつ来て
いたといて一人一人直すわけですね。
だからいい声をもつてもその口腔
内の広さ、共鳴の位置つてもそので
いぶん個人差が出たもの、もとと声
のあまりない方でもそのトレニン
グによつて簡単にいい声が、簡単と
いうとあんまり簡単すぎますけど、
コツをつかんでしまつたら、ある程
度の技術である程度の声というもの
は出せると私は思つてますから、自
分が苦勞をしているからやはり人の
苦勞といひますか、今の段階で声
を出していらつしやるということ
なんかはつきりわかるような気がす
るんですから、それを自分の経験
を生かして、後は私の先生であつた
矢田部勤吉先生とか畑中良輔先生に
教えていたといふことを混ぜ合せて、
それを一人一人に、ま、私はあんま
り細かいことを、技術的にいつたつて
ほとんど逆効果のある例が多かつた
もんですから、具体的に私の独特の
関西弁で。表現をしましつています
と案外思つたような声を出してくれ
るもんですから。そういうふうなも
のを合宿で時間のゆるす時に個人的
に、母音の唱法というもののコツを

覚えていたといて、前半の時には時
間がほとんどないですからやはりパ
ート別にそういうふうな声を出して
その声はたゞ口の形だけを外見的に
するのはなくそのパートもですけ
ど、聞いてもらつて今出した声がい
いんだ、今の声が悪いんだと相当極
端に私は指摘してきたんです。そし
たら、もう皆そういうふうなものに
相当敏感ですから、ずい分それは今
のは良かつた。悪かつたというふう
にして、白か黒か、それとも間のグ



中村 博之氏

レーカといふことを具体的に私がそ
ういふふうな示し方をしたわけだと
思ふんです。たゞ大学合唱でそうい
うことの、なんか不安があるのは、
今まで四年生でも相当経験をつんで

四年間を積み重ねた方達が急にいられて、その後三年生ついでいますと相当しつかりしているんですけれど、中にはまだ不安な方もいらつしやるわけです。だから四年になつて始めて四年位になつてから発声というか音楽というか、いよいよ本物ということがわかつて来る方も多いもんですから、その四年生が抜かれるとちよつと三年生は不安感をもつた方もいらつしやるし、相当自信をもつていいフォームでいい声を出される方もありますけど、とにかくその四年生が抜けた後の、すべてにおいてのなんか淋しい感じというものを技術的にもなんかうめなきやならないつてのが私にとつても難しいことだと思ふんですよ。

日下部 ま、学生の団体というのはとにかくどんどん入れ代りますからね。そういうことは一つの宿命ですね。普通の一般と比べてね。いろんな事を教えてつても結局でき上つた頃に出て行くということはね、そういうむなしさというのはあるでしょうね。

大久保 発声ですとでき上つた以上に、同じことを重ねて、より以上のもの

を勉強してもいいと思ひますから、それはもちろん二年以上の方は何回も同じようなことを聞かれるかと思ひますけれども、それはとつてもいいことだと思ふんですよ。一言、理論的に聞いたからといつて決してそんなに楽に声が出るものじやないですよ。だから大学というものは何回も同じことを聞きながら、進歩してゆくんで、発声というものも同じことを何回も繰返してそれが安定してくる。その安定度によると思ふんですよ。だから一応こちらも、やはりその後は卒業生、四年生が出た後、三年生のような方の気持ちに毎年なるわけですよ。ですけど必らずまた盛り返すような感じになり、ほつとする連続だと思ふんです。

中村 そうね。六月の四連ですか、その頃になるとまああの声が出ますね。

合唱とソロの発声は

根本的に同じ

日下部 一般にね。例えば合唱のための発声とね、それからいわゆるソリストとしての発声というものが違う

という考え方があると思ふんですけれどもね、それはどうでしょう。

中村 僕はそう違うとは思わない。

大久保 私は根本的に同じと思ふ。私

いいですか（どうぞという声）。根本的には違わないんですけれど、実際に演奏としての声の出し方といひますか合唱の場合はずいぶんフルセットを使う場合が多いわけですね。その場合クラシック、いわゆるソリストの方が使うようなピアノシモはちよつと違うと思ふんです。そういうふうなピアノシモを出してまゐった場合、柔らかない本当のピアノシモを、合唱独特の特に男性合唱のピアノシモの音色とはちよつと違うような気がしまして、それでやつぱりフルセットで、ソリストが出すようなピアノシモとはそういうところが違うと思ふんです。根本的には同じなんですけど、それを意識なさつてたらソリストだから合唱ができないといふことはある程度の発声を勉強なさつての方だつたら同じだと思ふんです。実際に出すフルセット、それからピアノ一つついても相当音域によりまして高音部でフ

アルセツトを使いますね。それとミックスした声を使う。福永それは表面上の技術的な問題で、発声の根本的なことは全然かわらないはずだね。

日下部 私、大阪で例のABC合唱団をあずかつていた頃があるのですが、そのメンバーは女性ばかりですが、その先生方が——あんた方はコーラスをやっているうちはいくら教えてもよくならない——とそういうふうにいわれるらしいのです。これは全部が全部そうじゃなくソリストになるという立場からの言葉だけれども、そういう点はどうなのでしょうね。

中村 テノールのこ
とでいいますとね、
コーラスやつてる
とあの、響きがね、
少しこる、散るよ
うな気になります
ね。まとめようと
するよりもですね、



少しあけてこういうふうに開いたようにして高い声を出した方がコーラスの場合はきれいなような気がします。

日下部 例えば、東京放送合唱団がありますね、その東唱にたいする批判にソリストの集りだ。という事がありますね、だけど究極的にはソリスト、いいソリストの集りだつたらいいコーラスができるはずということになるのだけれどそれが必ずしもそうではなくて合唱としてだめだというような言葉だとすればね、やつぱり違うのじゃないかというふうな……。

福永 それは発声の技術の問題じゃないと思うんです。つまり個人音楽家としての個性の問題でコーラスばかりやつていると自分の個性を殺すというところが習慣になつてしまつて何か自分が一人で表現をしなきゃならないという時にそれが出なくなるということだと思ふんです。だからコーラスをやつたらソロができなくなるよというものは、自分の個性を押し出すというのをしなくなる。習慣的に消極的になるわけですね。そういうことに対して逆にソリストの

集まりはコーラスにならないというのはその個性を殺したからじゃない。私はこういうふうな歌うんだと、例えばふしまわし一つにしても、本当はそのパートがそろつてほしいにもかかわらず、中の一人は私はこのふしはこう歌うべきだと思ふというふうな個性を主張すればコーラスとしてのバランスが崩れるということがおこります。それは音楽の表現のことだと思ふんです。

中村 発声の技術のことではないと思ふんですけどね。

関東の合唱・関西の合唱 型やぶりの同志社

グリーの合唱

日下部 確かにそれはそうかもしれませぬね。それからあの、東京のコーラスとね。これはひと昔、よくいわれたことですけども、それから関西のコーラスとでかなり違うんですね。これは音楽的な問題もあるでしょうし、発声的な問題もあると思ふんですけれども、それはまず発声的な面からどういうふうにお考えになつたか。ど

うでしよう。そういうことは別に感じなかつたですか。

大久保 私は発声的な面には別に東西のことは考えませんでしたね。

中村 僕は関西は同志社だけしか知りませんし（竜谷やつてるといふ声）

竜谷もやつている。あれは定期的に來てませんし、関学もあんまりは知らないんです。

日下部 ま、福永さんなんかよく御存知だと思ふけれども昔ね、よく関学の発声がトンネルの中の発声という言葉があつて、それでなんでも、ともかくハモレばと云う事で、どの曲でもトンネルの中で、ようするに声を出しているようなワーンと響くようなね、そういうのがもう最上のコーラスだというふうな考え方があつたわけですね。今の個性を殺すとか殺さないとかいうことにく分関係があるわけだけれども、そういう発声しかやらせなかつた時代があつたわけですね。ま、それはもう、最近いろんな音楽がずい分向上してきてそういう考え方もついている人はもう今やほとんどないと思ひますけれどもね。そういうつまり伝統が今だに残つてい

中村 それを具体的にいうとどういうことですか。その響きが少しなっていないんですか、散らすということじゃないけど。

福永 ま、散らすということになるんだ。

中村 関学つてのはそのトツプテノールパートなんか。いつも、フアイッとひびきをちらして歌つていると聞きますけどね。そういう感じのことですか。

日下部 そうです。で、たいがいローパートの方に響きの重点を置いてそれで……。

中村 だからなんていうのかな。

本日のピーンという響きじゃないわけですね。

日下部 そうそう。で、例えば発声的にも息をたくさん使つてね。まざることも多いわけですよ。だから少人数になると全然だめなんです。よ、多人数でのみなしうることだといふうな……。

中村 それ一本で今まで押してきたわけですね。

日下部 え、そうですね。最近の関学は必ずしもそうじゃないと思ひますけれどもね。とにかく五、六年前ま

ではそうでした。明らかにね。それは伝統的に受けつがれててね。本当にそういう意味では立派だつたです。

福永 そうなんです。逆の意味でね。

日下部 徹底していたときには。ゆる関学ボイスというのがあつたわけですね。

中村 その、同志社のグリーはどうだと思ひますか。その当時は、その、もつと荒つぽかつたですか。

日下部 それがね、つまりその辺になると先生にちよつと……。（笑）

福永 ま、僕は、その点同志社のコーラスというのは十年前まで知らなかつたわけだけれども、知らない頃は関西のコーラスは、関学のコーラスだと思つていたし、その中では同志社の合唱というのは型破りだつたんだらうと思ひますね。例えば関学のレパートリーの中にはソロのある曲がほとんどなかつた。同志社はどんなソロのある曲をやつてそれにリストが入り代り交替で出てくる。一人や二人じゃなかつたですからね。同志社のは昔から、関西では型破り

といわれるようなコースをしてたんだと思いますね。

日下部 それはちよつと私の宣伝みたいになりますけど。その頃私がやつてたんですけれども、ま、私自身もそういうねらいというのはつきりあつたんです。で、つまり関学グオイスというのに対する反発というのはあつたし、第一あゝいうとまるで、なんといひますかね、水彩画で一色にぬりつぶされたようなね。そういう音楽だけが音楽じゃないという気持ちがあつたし、もつとなんかこう、音楽の本質的なものを表現するということを中心にしてね。やつていきたいことがあつたんですけれども、それをグリーの方、グリーの時に十分やれなくて結局それがO Bのクローククラブつていう団体ができて、これが非常にいろいろその、仕事をしながらやるわけなんです。支障があつたんですけれどもそういう面ではかなりそういう主張を押し通せたんじやないかなといううな気がしたんですが……。

福永 僕はその日下部さんというのは始めはうわさでしか聞いたことがなかつた。日下部さんという指揮者は

有名でしたけど。一番最初に日下部さんのことで印象に残っているのは、非常に子煩悩な方で、はじめのお子さんがお生まれになつた年に子守歌ばかりを編曲してそれをワンス・ステージも歌わせるといううな……。(笑)それが一番印象に残っているんですけれども。でまあ、日下部さんというのはともかく、僕が実際にグリーにタッチするようになった頃は、もう何年も上の先輩だつたわけですね。ところがずっと後にも尾を引いてるんです。日下部さんの人気が浸透してる間ずっとクローククラブというのは隆勢だつたんですね。それがそういう直接日下部さんの影響を受けた年代が段々忙がしくなつて、出てこなくなつたり、あるいは日下部さん自身もクローククラブばかりにかまつていられたらといううな状況になつてきたりして一つのピークが過ぎていつたんだと思ふんですけど。はつきりした音楽的な主張つてのが日下部さんの頃に一つあつたのじやないかな。その前にね、森本先生という方がいらつしたんです。その森本先生

も非常に個性の強い方だつたと思う。自分の主張をはつきり表わす演奏をしようとなつた方だと思ふんですよ。ですから同志社の個性の強さは伝統的だつたんじゃないんですか。僕は、親父が関学ですから、男性合唱つてのは関学みたいなもんだとばかり思い込んでいたし、なにしろ子供の時代から関学のそばで育ちましたから。それが、始めて同志社とあつた時に同志社の連中と話がどんと合つちやつたというのは、やつぱり僕が関学のコースではコース音楽として不十分じやないかと思ひ関西にいたが、やつぱりおんなじつたつていうが、より以上の面をめざしたいといつてる学生がいたもんだから、それでビツタリ気持ちが合つちやつて意気投合したんだと思ひます。

日下部 まあね、それでも例え、僕等の頃には東西四大学合唱祭といううなものはないなかつたんです。そのかわり慶応と同志社の両文連の交歓があり、その一還としてのワグネルとグリーの演奏会で毎年、慶応を聞いた、それからいろんな機会

でもつて早稲田なんか聞いたりして
ました。かなりやつぱり違いました
ね。てのはね、具体的な例としてね、
なんか性格的にね、個人的に習つて
る人が多いんじゃないかなつて気が
……。 (東京の方がねという声) 東
京の方がね、でそんなふうなことも
感じたし、それがかなり強い、強力
なね、要素になつていような気が
したから、それで、僕がやつてる
頃は、いぶんメンバーにね。つまり
習うことをすね、奨励したことが
ありましたが、でもね、それが今そ
の、結局個人的に習うんじゃないか
というふうな純粹のボイストレー
ナーの方にきていただくことになつ
てきたんじゃないかという……。

中村 あ、だからそういうのがパー
トに二、三人でもいれるとずい分違
いますね。個人的に習っている人と
でその声にこうひとつばられて、合
えますね。

関西にほしい

合唱指導者

日下部 ところがその先生がよけりや
いいけどね。悪い先生についたらこ

福永 れはだめなことになるんですね。
福永 それはね、同志社グリークラブ
の大問題なんですよ。関西に先生が

いれば問題はないわけだ。その先生
がみんな東京から通つたにという
状態です。それは学生にとつては
非常にもうやりきれないほどの負担
だと思ひし、本当に気の毒だと思ひ
ます。それから、慶応のワグネル
の定期演奏会なんかでワグネルがい
い演奏をしたりすると、何かものす
ごくくやしいのです。僕がやつぱり
京都にいてそばについていてやれば
同志社だつて決して負けないのにな
と思ひます。思ひます。思ひます。思
ひます。思ひます。思ひます。思ひ
ます。思ひます。思ひます。思ひま
す。思ひます。思ひます。思ひます。
もやつぱりそうではないからそのた
めにこの慶応のまねはできない。慶
応の音楽会の時に、そう思ひなきや
ない、ものすごくくやしいんで
す。同志社だつて同じだけのみんな
の實力というか、フアイトをもつて
るはずなのに、例えば東京の大学だ
つたら一時間、時間ができればです
ね。その一時間、駆けつけてやつて、
またすつと抜けることができるわけ
ですよ。京都に行くことがはまる
一日、まる二日あけることになりま
すからね。なかなかそういうスケジ

学生合唱団がプロに 指導されると云うこと

ユールのとり方というのは難しいわけ
です。そうすると東京だと定期演
奏会の前に毎日でもとまかく、一月
間位つき合つてられる。顔を見せる
だけでも違ふんでは。顔をみせる
できないというのとはとても悪条件
ていへば悪条件、それをよく克服して
いるんだと思ひます。これに本
当にも、関西によい指導者がいて解決
できればそのほうがずつといいし、
東京から出てきて関西を押えつけよ
うというような意識は、ぼくたちには
全然ないんだけれども……。

日下部 ま、そこで、話がそういう方
向に飛んできたんでね、あれですけ
ど、つまりヴォイストレーナーを含
めてです。例えば学生の団体プロ
の音楽家が指導するとかいうこと
にするの。福永さん、御意見と
云うのを一言。福永さん。
福永 やつぱり僕、日下部さんなんか
よく御存知だろうと思ひつて、うかが
いたいのだけれど、その学生だけで
やりたいという、その純粹性は認め

るとしてですよ。それなら、純粋を守るために下手でもいいか、自分達がついてい音楽ができるにもかかわらず、下手でもいいというふうに思うのでしようか。その専門家と接触しなくてもよいという気持ちの中には。

日下部 えゝ下手でもいいという気持ちがあるわけですね。まあ、極端だけれども。結局抵抗つてのは学生のメンバー自体には今ではないでしょう。

福永 例えば関学みたいにあんなに伝統のきつい所でも、現役はやつぱり歌つてみればわかりますからね。どうしても専門の音楽家と接触するということを希望しますよ。

日下部 だから下手でもいいというのとはつまりメンバー自身が考えているのではなくて、グリーのOBの連中だとか、あるいは学校当局とか、いふんな、そういうふうな外部の人がですね、つまり学生の団体がプロ同様の活動をする必要はないとか、又、その演奏の水準も、何もそれほどのことを見望むもんじゃなくて、単にその、交友親睦という、つまり学業の一助になりやいいというふうなね、

そういうふうな考え方からやつぱり出発しているんじゃないかと思えます。

福永 それがね、去年たまたま僕のとて遭遇したことでは現役諸君が僕を常任指揮者にしたいつて希望したにもかかわらず実施しなかつたつてことがあつたわけですよ。

日本に於ける学生合唱団の文化的役割

福永 そういう時に一つの矛盾として感じたのは、学生が担っている日本の文化的な役割というものに対して、非常にそれが大きいものであると主張される時もあるわけです。ですから例えば演奏旅行にしても、それから京都で開く演奏会にしても、それが京都市民のため、あるいは日本の各都市の音楽文化のための働きであるようにいうふうな激励されるわけですね。で激励されていながら何か、もつと上手になるための要望が起つたら、今度はそれは学生としては、逸脱しているんだというふうにおつしやるわけです。それがやつぱりなんか、とても矛盾している。

と思うんです。まあ、理想論としては日本の音楽文化の水準が全体に非常に高くて、学生は本心に趣味同好の会ですましていられればいいと思うんですけど、現状は違いますからね。

日下部 ですけれど音楽全体の分野で合唱つていうのはボジションとしてはかなり特殊ですし、アマチュアの音楽はその中でかなり大きなウエイトを占めていますよね。例えば諸外国の例をみても合唱は発生的な条件からしてそのアマチュアのものだつた



のじやないかというふうに思います。だからそういう意味ではアマチュアの団体といえども音楽界において非常に大きな使命をもっているわけですからやつぱり非常に立派な音楽を作つていかなきゃいけないというところでですね。それに、例えばイエールとかハーバートの大学とか、非常に高い水準の演奏をやっているけれどもその指導者は大学の中の人がつているのです。

福永 それは大学自体が優秀な音楽部に教授がいますからね。それはそれで当然だと思ふ。さつきもいいたように、やつぱり接触する回数が多ければ多いほどいいはずなんで、やつぱり東京から通つてゐるなんてのはもともとおかしい話なんです。ですから同志社なら同志社に優秀な音楽部があつて、そこに優秀な教授がいて指導してもらふことができるければそれにこしたことはないわけですよ。

日下部 まあ、理想的な形としてはそうですけれどね。

大久保 ただあの、関西、東京というんじやなくて、どこの大学でもその中でより以上高度な合唱の演奏とい

ううものが結果として出た場合には大学生が学生指揮者で、全部学生でかためてやるのが一番幸せな、理想に、まあ、理想ですね。ですけどそれが日本においてはちよつと不可能なことですし、そうなつてくると合唱やつてゐる目的が二手に分かれるわけですね。一つは純合唱芸術つていいますか、一つの演奏、高度の演奏を目的に向つてレベルの高いものに向つてのあれか、それとも一つは本當の同好会的な、あの、後、楽しんでいきたいのと、その目的がはつきりしているのによつて、別に何も全部がそうじやなくつていいと思ふんですよ。各大学によつては遊ぶ合唱つていいですか、まあ、合唱音楽には入らないかもしれないけれども本當にワイツと声そろえて楽しむ会もあつていいと思ふんですけど。そのどちらかにはつきり性格をきめた上で進むんでしたら日本においてはやはり今のようにならざる専門家が、つていうものにある程度たのむのが一番のま、近道つていうか、一番手取り早くいい演奏ができるんじやないだろうか。

日下部 まあ、同志社のグリーなんて

のは、やつぱりそういう意味では前者の目的をもつといえます。つまりある程度合唱における使命つていうか責任つていうか、そういうたもの背負わされてゐる。(そういうわけですよという声)

福永 長い間背負つてきてゐる、現在なお背負わされてゐるというふうに……。

大久保 でしたらより以上のものを求めてできる限りのトレーニングをこなれからもしていくべきだと思いますね。

福永 それがクラブ活動というものと矛盾しないと思ふんですよ。その音楽ばかり、音楽音楽といつて、お前達プロかというふうにいわれるといいんですけども、やつぱりそれが音楽だろつと何だろつと一つの集団が一つのものを目指して、一諸に共同作業をしようにということはクラブ活動としても、つまり人間を練るという意味においても、おんなじ目的にそえるはずだと思ふんですよ。音楽の技術面を高めるために、みんなで共同作業をしたら人間的には墮落したつてようなことはあり得ないわけだから。

大久保 返つてそれは純粋なだけに遊

ぶ会、同好会的なもの、より以上なものがあるのはたしかですね。

日下部　ですからやつぱり指導するプロのね、指導者の心のもち方としてのこれは非常にきびしく要求されなきゃいけないですね。例えばその、もちろん能力がない人はだめだし、能力があつてもなんか、やる気でもつてもらわないとね、いわゆる東京から大阪、いや京都まで出稼ぎに行くような、ま、出稼ぎにはならないでしようけれども、まあそういう気持ちじやとつてもだめだということですね。

中村　それが出稼ぎははつきり、その出稼ぎ言葉でいえばゼロですね。それ以外のものと貴重なものを私達やつぱり普通の大学生が音楽に対して正面切つて真剣に取つくんでいくつていうその美しさにすごい魅力を感じまして、こちらから、赤字が出てもうそういう喜びを味わいに行くつていうと、いかにもエゴに聞えますけど、正直なところで、それがあるかそこそあの、大学で一生懸命に、なしにやりたいって気もありますね。福永　というのは一番純粋に音楽を作れる場所だということじゃないかし

らね。僕は昨日たまたま自分の演奏会を終つて、非常にぜいたくなような悩みつていうと本当はぜいたくな云い分ですけど、ぼくは日本にいて間ですね。音楽に関する限りどんなことをやろうとしてもたいいてい出来る立場にいるわけですよ。それでなんかこれで死んでもいいような、やりたいことはやつてしまつたし、一体これから先何をやりやいいんだらうというぜいたくな、他のチャンスにめぐまれない人はいわれば失礼せんばんな言ひ方かもしれないけれども、非常に恵まれた立場にいて、その中でやつぱり一番純粋に音楽を直結しているつていいますか。終つた時に良ければ良かつた。悪かつたら悪かつたという自分の感情の動きの激しいのはやつぱり学生団体を相手にしている時が一番強いと思うんですよ。だから、やめられないんだと思うだけですね。

日下部　逆にですね。最近の学生団体つてのは非常にまあ例えば演奏活動自体が派手でね、で、聞くところによると一年間に、三日に一回はステージをもつていてというふうなことを聞きますけどね。

まあ、いわば、そのプロの団体よりもたくさん演奏会をもつていふことになり、そういうことをするんてのはプロ意識じゃなくて、なんていうのかな、いわゆるアマチュアらしからぬですね。プロずれた考え方というものを持つていふんじやないかなと心配で……。その点どうでしょう。

大久保　その点は普通大学合唱で一番危険なことですね。だからそういうふうなものが現われてきた場合には相当合唱活動をやつてゐる価値というものにも致命的なものを与えるんじやないですかね。だからなるだけそういう、なるだけどころか……。福永　我々は結局その時に一番きびくしてなきやいけないんじやないかな、それで手綱をゆるめるともうそれは本当にそういうふうな墮落の方向に向ふと思うんです。そういういふゆるゆるれつ子合唱団というのが非常にきびしくして、プロの音楽家でもできないような立派なステージをするのが当り前なんだつてような顔をしてきびしくしてないと、もう危険率は大きいですよ。

大久保

一ちようあがりのなステージというものは間違つても持つべきではないですね。ただ専門家ですとも今まで、この頃はそういう方はいらつしやらないでしようけど、今まではそういう専門でありながらそういう方も中にいらつしたと思うんです。結果的にですけど。普通の大学だつたら、合唱演奏の活動としてそういうものは絶対あるべきでないと思つうんですね。

日下部

あの、非常に末梢的なことかもしれないんですけど、ある人がこんなことをいつたんですね。ある学生の団体の所に行つて、練習が始まる時に、実はプロの指揮者がきて、まずおはようございますというあいさつをする。それを聞いて驚いたというのです。まあ、おはようございませうつてのはだいたい、そのね、我々の世界ではよく言うことだけれども、なんか学生達にね、なんか一勢にそういうことを言われるとですね、やつぱりなんか、あれつていう感じがすると思うんですよ。非常に末梢的なことだけれども、それはプロの指揮者の、プロのグオイストレーナーなり行つて、そういうものだ

福永

あ、そういうことじゃないと思ひますけれども、そういうものだけを置いて帰つたらこれは非常にもう、大げさに言えばゆゆしいことだと、思うのですが……。

あ、そうですか。あの、それ逆ね、僕は意識して使つて、逆ね、というのは僕は各演指揮を頼まれる場合もあるわけですから、そういう場合、僕が行きますと非常に相手がかたくなつてゐるわけですよ。平常よりも偉い先生が来て指揮をするということと緊張し切つちやつて、非常に空気がかたいわけですね。そこで夕方であつても「おはようございます」というあいさつをして、これは我々「商売人」の用語なんだというところでまず笑わせることから始める。そのために、「おはようございます」という言葉を教えるわけなんです。それでそれから先の練習でもまず、「おはようございます」つてつと向うが非常にびつくりしている間は効果があるわけですね。その方がいらつした時に夕方にもかかわらず、「おはようございます」なんて云つているとなにかいづら非常にすれていふことになるのかも

しれませんがね。僕は意識してそれを使うんです。まず、笑わせて練習を始める手段なんです。

グリーに一言

日下部

じゃ、いろいろとお話を伺つてきまつて、結論的に同志社グリークラブつてのは音楽的にも社会的にも非常に大きな使命、をもつてゐるという話に落着いてきたと思つてのすけれども。そういう同志社グリーをよりいっそういいものにするためには今後どういふことを心がければいいかつてことを一言ずつ。では福永さん、どうぞ。

福永

そうですね。自分ではおかしいんですけどもね、三年やつてみて四年目になつてゐるわけですけども、なんとなく音楽というものはこういうんだという感じがわかつてきてくるような気がするんです。今のメンバーは。で、その、音楽つてものは少しでもまなければ正直にそれが表に出してしまうし、だめになるもんだというところがみんなに浸透してゐると思うんで、それを是非ただ単に運動部なんかやるよりなスパルタ的な、その、きびしい

訓練という意味でなくて、みんなが今感じてる、音楽とはこういう感じがしたいものなんだという、そういう感じをそのまゝ感じとして伝えてほしいと思う。たゞなんでもかんでもやかましくやらなきゃいけないんだという、苦しさの形じゃなくて、すなおな感じとして、教えさすという意味じゃなくて、今自分達が感じるものをそのまんま、よく伝えていつてほしいと思うんです。そうすれば必らず今の学年が代つても少しずつでも、向上していけるんじゃないかと僕は思うんです。

日下部 大久保さん。

大久保 私は、まあ、二年位の感じの方向ですね。それをこれから大いに伝統としてだんだん残していって、まあ、美しい音楽の本当のきびしさというものは、たゞいろんな方面での各部のスパルタ的な、表面的なあれじゃなくて、なんか美しい音楽のきびしさというものを各自が味わつて、それを卒業してからでも大学生活の時のグリーンの想い出というものは相当プラスになると思うんです。だから、ある時には失敗した演奏もあるでしょうし、そういうこともある

と思うんですけれども。できるだけのことをしてその演奏に臨んでほしいですね。たとえどういう小さいステージであろうが、どういう派手なステージであろうが本当に心の底から思う存分歌い表現するつていうことが一番大事なことで私は思うんです。だからそういうふうな方向に向つて行つてほしいと思います。

日下部 最後に中村さん。

中村 六十周年だからといつて特別なことを今から教えるわけじゃないですけれどももうお二人がいろんなことをおつしやつましたし私からお願いは一回一回の練習、それから音楽をやる本番のことですね。それを一つ一つを大切にしていつてもらつたらよりうまくなつて行くんじゃないかと思います。

日下部 それではどうも長い間ありがとうございました。

昭和三十九年五月

藤原歌劇団練習場にて



同志社グリー60周年に思う 一つの「伝統」への期待

福田 哲雄

六十年という歳月は一つの人生に匹敵する。併し、グリーメンにとつては、この人生はもつと短かく感じられていて、苦であると思う。何故なら、この六十年は、あくまでも暦の上での事で、コーラス三昧の世界を持つグリーメンならば、四年制の短かさをかこちこそすれ、長きを數くものはまず居ないだろうからである。そういう心理的な短縮が加わつた四年間の積み重ねとしての60年である。それにしてもこれは、ちよつとしたものである。グリークラブの歴史にも、人間の集団につきまとい勝ちな煩わしい雑音につつまれた事はあろうし、いろんな意味での危機に見舞われた事もあつたに違いない。そういうすべてのうやむやを乗り越えての六十週年なのであるから、これは歴代のグリーメンや関係者達のハモる楽しさへの愛情と執着との結晶である。僕は見たい。グリーが、この愛情と執着で支えられている限り、今後とも末長い歴史が約束されていると僕は考えたい。

所で、こうして還暦を迎えた同志社グリーの「伝統」という問題を僕はここでとりあげて見たい。「伝統」という言葉を平たく考えたと、或る一つの事柄や精神が幾世代かにわたつて伝えられて出来上つて行く一種のノレンである。堅実さと批判精神というノレンを誇るイギリスの或る紳士学者は、「伝統」というものは、世代から世代へと受け継がれてゆく一つの信念」だと語っている。彼の言葉を利用す

ると、ノレンとは「信念」の継承なのである。我が同志社グリーはネームバリューもあり、相当広汎なファンも居るという様な嬉しくはあるが、どちらかと云えば末梢的な現象から見れば、或るノレンの様なものがあるらしい。併し、今、ノレンとは「信念」であるというさき程の言葉をあてはめて見ると、一体どんな信念が歴代のグリーメンに受け継がれて来たか、そしてどんな形に発展しているのか、不幸にして僕は知らない。米国留学から帰つて、母校同志社とも正式に職業上の関係を持つようになつた僕は、ふとした機会からグリーメン達とつきあひが出来て来たが、少くともこの三・四年見聞きしている範囲では、今僕がとりあげている「伝統」という点で、グリーメンの間に真剣な検討が加えられる必要があるように感じるのである。少数の例外もあるが、グリークラブ全体としての行動の中に、「伝統」や「信念」が、ただ年輪だけにもたれかかつた安易な甘えを僕は読み取れる様に思う事がある。

同志社グリーという学園の特徴が当然身につけている筈であるが、グリークラブという活動は、学生の自主的運営によるという一種独特な純粋さが中核を成しており、その意味では飽くまで学生活動としてのノレンを持つものである。そしてこのノレンは、さきに述べた「信念」によつて裏付けられてこそ、初めて本當のノレンとして真の「伝統」としての価値があると僕は思うのである。

私事で恐縮だが、僕が男声合唱の魅力に惹かれるようになったのはホザナ（旧制同志社中学）の一員であつた頃からである。やがて京大の学生となり、医者の卵ばかりを集めて男声コーラスを創つたが、僕は指揮者でもあつた。そ

れは戦後の精神的混乱と虚脱の時代であつた。僅か二十人前後のメンバーが、大事な講義やポリクリ（臨時実習）もそつちのけにして練習を楽しみ、ハモる事に情熱を傾けたものである。それは、当時のやり場のない僕達の心情をうめていた唯一つの暖燈であつた。メンバーの半数以上を占めていた上級生が卒業してからも、このコーラスは辛うじて生き永らえたが、僕のクラスと共に自然消滅となつた。後続がなかつたのである。僕達には後続を育てるという考えは毛頭なかつた。これは、当時の僕達を支配していた思潮が一匹狼的で、利己的傾向の強いものであつたという事実にも或程度関係があつた様に思う。何れにしろ、僕達のコーラスは結局三年あまりの短い寿命であつた。同志社グリーの六十年とは到底比較にもならない長さである。ただ僕は、自分の小さな経験をこうして回顧していると、年輪という枠だけを取りはずした現在の同志社グリーを靜かに見守つている内に僕達の頃の問題になつた事柄が、現在でも同じ様に重要な問題である様な気がしてくる。然も、その問題はグリーの「伝統」あるいは「信念」と深く結びついてゐる様に僕には思える。一例をあげると、学生活動であるべきグリーとプロとの関係。技術的な向上の為にプロと組むか、あくまでアマチュアとして最善の努力を続けるか。極端な例では、グリー全体がプロのために存在し、その道具になつてゐる様な感じになつてゐる所もあると聞いている。然も技術的にはプロ級にまで向上してゐるのだから魅力的たらしめるを得ないのであらうか。

これが一長一短があつてなかなかの難問であるが、僕はあえて、グリーは学生の、学生による、学生のためのクラブである点を再認識したい。プロによつて技術的に向上し

たとしても、そのプロの為に同志社の独特の雰囲気まで解消されてしまふようになるのであればそれは、もはや、同志社グリーの名に値しない。学生だけでグリーが運営されてゐる音楽の教師の多少の援助を受ける程度でグリーが運営されてゐたグリーの長い歴史の間でも、決して技術的にも恥づかしくない、それでいて同志社らしくムードに包まれた時期は必らずあつた筈である。グリーメン全部の自覚と精進への情熱とがあれば、これは必らずしも至難のことではない。東西の有名校が競つてプロに依存している今日、そしてマスコミに乗つて主体性や個性を抹消してまで、つまり虚飾に均しい売名と功名に青春を賭ける若者達が世に溢れようとしてゐる時、我がグリーメンは真理の探求と人間形成の場である学園にあつて、同志社グリー本来の姿が何であり、失ないつつあるものはないか、検討されるべき問題を安易に扱つてはいないか、この機会に現役のグリーメンは充分に考へて見てはどうであらう。そして僕達が持てなかつた年輪という貴重な支柱を更に強固にしてゆく為に必要な内面的なもの、つまり「伝統」を、そして「信念」をどの様なものとして自分が消化し、担い、パトナツツチしてゆけばよいかを、この機会にはつきりさせて見てはどうであらう。さきほどのプロの問題もその一つであらうし、レバトリイの問題もあらうと思う。

六十年という歳月は一つの人生に匹敵する。ただ生き永らえるだけ、年輪を刻むだけならばただそれだけの事であり「伝統」と呼ぶに値しないと僕は考へる。「伝統」は「信念」でありその継承なのである。同志社グリーは選歴を迎えてこの問題を果してどの様にとりあげて行くであらう。勿論コーラス三昧の醍醐味を味わうという事がグリー

クラブの本質的な活動内容であり、それ自体は簡単な事なのである。然し、その本質的な活動がそれらしく行われ受け継がれる為には、多くの個性の集団であるグリーククラブに少くとも一本の支柱がなければならぬであろう。その支柱になるものが、ここで僕がとりあげた「伝統」という無形の精神的実在なのである。マスコミや流行という時代の波は、出来上りかけていたかも知れない同志社グリークの「伝統」を押し流しかけていくようである。こういう危機意識を、現在のグリーメンは或る程度は持つているように僕は感じてゐる。無形の、そして精神的な「伝統」は、そういう危機意識にめざめたグリーメンが各自で発掘し消化してゆかねばならないものなのである。これは今の様にめまぐるしい時代には必ずしも容易なことではない。然し、これが行われぬ限り、グリーは浮動的存在たるを免れないのである（丁度僕達のコーラスの様に利那的存在たるざるを得なくなる）。一つの「伝統」を我等のグリーは今後どの様にして築きあげてゆくであろうか。この問題に関心をもつて大きな期待をかけているのが僕一人ではない事もグリーメンは知つていてもらいたいものである。

（昭和三十九年十月二十五日）

筆者・同志社大学嘱託講師・カウンセラー・嘱託
精神医・医学博士。

クラブとゼミナール

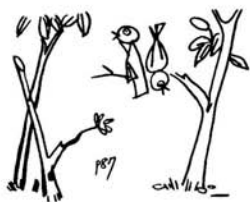
同志社法学部教授 高橋 悠

グリーククラブと私との接触は、ゼミナールにおける学生諸君とのつきあひを通じて生れた。音楽愛好家という立場からではない。私の専門分野は法学であるから、それを不審に思う人があるかもしれないが、しかし、もし法律学が法文の文理的、論理的解釈に終始する無味乾燥な学問であると考え、人があるとするれば、それは大きな誤解である。法は人類の普遍的な社会生活に根ざし、人間性に対する深い理解なしには把握し得ないものである。とりわけ私の専攻する国際法学はローマの万民法を源流として世界を結ぶ連帯感によつて育成されたものである。音楽が国境を超えて人の心に感動をよび起すように、国際法もまた全人類の正義によつて与えられている。

多分、そのような連想からではあると思うが、私のゼミナールには毎年グリーククラブのメンバーの顔が見える。この人たちから得た印象は、一般的に言えば、よく均衡がとれていることである。不均衡は、日本の欠点としてしばしば指摘されることであるが、そういう問題をグリーククラブの人たちはそれぞれの立場から一応解決しているように見える。彼等は日常生活において直面する困難を消化してゆける安定性を多かれ少なかれ身につけているように私は思える。聞くところによれば、グリーククラブの練習のきびしさは、メンバーたち遊ぶ余裕を与えないほどのものであるらしい。うたうこと自体による解放感とこの練習と

から彼等の安定が生れるのかもしれないと私は想像してゐる。きびしさに耐えるといふことはいつの時代にも必要である。にもかかわらず、いまのわれわれの教育活動にはそれが欠けていないか、といふことが、それをいつも感じながら、しかも私自身十分に実行し得ないでいる問題である。グリークラブの諸君はそれを身につけてゐる。私のゼミナールに現れ、着実に国際法の勉強にとけ込んでゐる。

大学における四年間の生活の目的は、実務家の養成よりもむしろ基本的なものの考え方を身につけることであると私は考える。専門の学科を勉強したとしても、それは、ある一定の角度から社会に対する一般的心構えを確立するためのものであるべきではなからうか。たまたま国際法とグリークラブとの組合せは、これまでの経験に関する限り、よい結果を生み出して来ていると思うが、グリークラブに限らず、他の多くの課外活動が、広い視野に立つた人格の育成に向つて、専門の諸学科とけ合い日本に欠けた人間像をわが同志社において生み出して行くことを私は願つてゐる。



現 状 報 告

幹 事 長 小 室 泰 司

同志社の一角に、グリークラブの種子が蒔かれて、今年で六十年。その間、幾多の困難も、周囲の方や諸先輩の御努で、今日の発展を見るにいたつた。グリーは今後も同志社大学と共に、生長し発展して行くことだらう。七十年、八十年、百年とその生長を遂げる為に六十年度の現状報告をグリー規約を述べながらなして行きたい。

同志社グリー規約

第一章 総 則

第一条（名称） 本合唱団は、同志社グリークラブと称する。

第二条（所屬） 本グリークラブは、同志社大学校友会に属する。

第三条（趣旨） 第四条（資格） 第五条（顧問） 第六条（事業） 条文省略。

第二条にあるように本グリーは校友会文化団体連盟傘下に属する。そこで我々も文連の方針に従ひ、現在では演奏旅行において、プロック制に従わねばならない。このプロック制とは、文連に属する他の音楽団体にも、一様に活躍の場を与え、これを育成していこうという趣旨の下に、全国をいくつかのプロックにわけ、これを音楽団体に割りふりしていくものである。この為、我々の演奏旅行も、以前と比較して思うにまかせず、亦先方がグリーを聴きたいと希望している場所へも行

けない場合が或る程度生じてきた。我々としては、グリーを聴きたいと云つてくれる土地へ行つて演奏したい。グリーは一応文連内で力のあるクラブの一つとして、文連本部に協力し、文連傘下の団体の育成に努力すること十分意義のあることだろう。

第五条の顧問であるが、創立以来、御世話下つていた片桐哲先生は、御高令の爲、名誉顧問となられ遠藤彰先生に御指導を願つてゐる。しかし、片桐先生は依前として、グリーに情熱をもたれ、その意気に私達若い者が、氣押される程である。遠藤先生は昭和三十八年七月スイスへ渡られ、今年九月にお帰りなられた。第六条の事業は、別に掲載しておりますし、後で一寸とふれますので、ここでは省略します。

第二章 機関

第一節 総会

第七条（最高決議機関）総会は、本グリークラブの最高決議機関である。

第八条（総会成立要件）第九条（総会の決議）第十条

（定期総会）第十一条（臨時総会）条文省略。

グリーの最高決議機関である総会は、六月末と十二月の年二回、臨時総会は全員の四分の一以上あるいは幹事長の要請がある場合招集される。

第二節 委員及び委員会

第一二条～二二条迄あるが条文を省略して委員構成を図式的に説明してみる

＜＜ 委 員 会 ＞＞

幹 事 長

内政マネージャー

外政マネージャー

渉外マネージャー

副渉外マネージャー

会計マネージャー

庶務マネージャー

ステージマネージャー

文連常任委員

技術委員会

指揮者

T₁ バトリダー

T₂ バトリダー

B₁ バトリダー

B₂ バトリダー

副指揮者

六十周年記念行事実行委員長（本年度のみ）

委員の選出任期は六月の総会において互選され、このうち一ケ年とする但し指揮者だけが、定期演奏会終了迄とする。

委員のうち、指揮者、副指揮者は、前期委員会が指名し、バトリリダーの任命に関しては、指揮者の指名に基いて、前委員会が之を決定する。亦渉外は前年度の副渉外が之にあたる。副渉外は、渉外の指名に基いて総会が承認する。次に、委員の活動方面であるが、内政マネージャーは、内規取締りと考えれば妥当と思われる。通常練習の際、出欠の点呼に始まり、練習の進行は彼によつて進められる。演奏旅行、合宿等においては、行動、風紀全て取締るグリーキつての人格者である。

外政マネージャーは、京阪神における演奏会のマネージャーを担当する。京都大阪両定期演奏会は彼のマネーシである。渉外マネージャーは、京阪神以外における演奏会で、亦各大学との交歓演奏会も彼が担当する。遠距離に関する限りはなく、将来、アメリカやヨーロッパへも行くことになれば、彼の担当である。ステージ・マネージャーと文連常任委員は昨年度新しく委員会に加えられた。グリーのステージが回数がふえ、会場もそろつてくると、演出も必要とされ、裏方さんとの接渉、ライトの調節等、その存在が大きくなり、重要な役となつてきたからである。文連常任も以前から存在したが、文連とグリーの関係が重要になるに従つて委員会入りが、文連とグリーの関係が重要になる以上で規約に基づく現状報告を終り、一般的な現状報告に移りたい。

我々が、毎日練習の際、間違ひなく考えることの第一は練習場のことである。週四回の練習に一定した練習場がな

く、水・土曜日は学内の教室、火・木曜日は市内の教会と飛びあるいている。庶務はこの練習場確保が大変な仕事で学内の教室をかりる為に朝早く何時間もならんで許可をとるのである。亦練習場の使用料の値上げも、現在大きな問題である。そこで、解決策としてグリー独力で練習場建設にのりだした。昭和三十八年卒業生が先づ積立て金を残してくれた。これが、注ぎ水として、これから何年かかつて、必らず練習場建設の夢を果すつもりである。大学の方で土地をクラブに譲つてくれたら、この夢はかなり近いうちに実現されることだろう。

定期演奏会とコンクール

我々は、五十八回定期演奏会から、その時期を、十一月か十二月に持つてゆくことにした。同時に、コンクール出場を辞めることにした。この二つの問題はかなり関係があるので両方考え合せながら述べてゆきたい。

先ず、クラブにおいて、最も重要なことは、定期演奏会を立派にするということである。一曲か二曲とか、一ステージを上手に歌う段階よりも、一つの演奏会を立派にするというのが、合唱団にとつてあるべき姿であると考えられている。その為には、定期演奏会を七月よりも秋に到つた方が、その年の最高のものができるであろう。もつていつた方が、その年の最高のものができるであろう。これ、定期の一年生をステージにのせることもできる。これが、定期を秋へ持つていつた理由です。そうすると、二曲を練るだけ練るといふことを要求されるコンクール出場は、必然的に困難でもあるし、亦そうまでしても出場する意義があるだろうか？コンクールはそれは、それとしての意義をある程度認めながらも、我々は躊躇なく定期演奏会の意義に踏み切つた。そして、特にこの六十周年の演

奏会のこととも考え、我々はこの年への階段を昇りだしたのである。

技術顧問 ヴォイストレーナー

最後になつたが我々は五十七年より技術顧問として福永陽一郎先生を、翌年ヴォイストレーナーとして大久保昭男、中村博之両先生をお招きして、御指導いただいている。五十七年に、時の委員会が学生指揮者としての壁を感じ、専門の指揮者を技術顧問に向え、一層の飛躍を計ろうということになり福永先生をお願いすることになつた。そして、また六十周年に、先生としてできる限りのことをやろうということになり、ヴォイストレーナーの先生もお願ひするのになつた。東京の大学では、既に専門家が指導するのが常識みたいなものであるが、我々も何処よりも熱心な両先生の御指導をうけ、六十周年を向えることができた。福永先生には、今年直接指揮をしていただき、我々の音楽性を最高にひきだしてもらおうということになつた。我々としては、三先生に今後いろいろな御指導下さることを、切に望んでいる。

以上、六十周年年度の現状報告をしてきたが、六十周年のおかげで先輩と一層親しく接つすることができ、グリーの苦難をいろいろ知ることができた。そうして、この六十年が、最近の先輩はもちろん、古い先輩も期待し、御援助下さつたことを知つた。今自分は、この六十年に、グリーに在籍できるように、この世に出現した幸運をしみじみと感謝している。

そして、グリーが、何時迄も、先輩と現役との深いつながりを保ち、七十年、八十年、百年と、輝かしい歴史をつみ重ねて行くことを願つてゐる。

ブロック制とそれにと なう規制についての経緯

県人会会長 関 口 省 吾

一昨年の暮當時の平本文連委員長と中尾県連会長の間で地方音楽会に関する種々の意見交換があり、学生としてあまりにもかけ離れた行動に走る団体が目につき、これらの事を何らかの方法をもつて両本部の適当な指導により、より健全な音楽会に発展させるための具体的な方法としてブロック制が一番妥当なものであるとの結論に達し、翌年の春から実行に移されたのである。

その後、主催者に対する規制として地方音楽会に關しては、原則として県連傘下団体であると共にすべて免税で行う。又やむをえない場合においてのみ校友会の主催を認める。

それでは何故種々の規制が設けられたかということをも具体的に述べてみたいと思います。

先ず、地方音楽会が何を意味するものであるか、ということである。普通一般に同志社文化の地方紹介という名で呼ばれているが、ともすればこの大原則が忘れられ、金銭的な方面ばかりに氣をとられがちになるが、地方音楽会は決して金銭的な方面ばかりでは成り立たない。そこにはやはり大原則を考えざるをえないのである。そこには又この原則に關連して、従来地方音楽会に出演していた

団体に加えて、平本委員長が提案した文連傘下の団体に対しても地方音楽会出演の権利を与え、現在グリークラブ、マンドリンクラブ、軽音楽部、ハーモニカン、ソサイアティー、オーケストラ、リーダー、クランツ・コール、混声合唱団がその権利を持つている。今後地方音楽会出演可能な団体が出来た場合には両本部が協議して決定することになる。

このことは同志社文化を地方に紹介するという意味から言っても過去一つの音楽団体しか演奏会を開催したことのない土地に同志社には、その他にもすぐれた団体があつた。すばらしい演奏会を催すたことが出来るということをその土地の人々にアピールするものであり、従来、弱小と言われてきた団体に対しても地方においてその技術発表の場を与え、しいてはその団体がより技術、マナーの点においても成長することを期待するものである。

次に県連においてこの規制についての直接的な動機となつたことは、以前においては音楽団体に対する出演料というものが免税では許可されていなかったので交通費＋アルファとして出演団体が主催県人会に対して請求していた、これが双方にいざこざを起す原因となつたのである。例えば実際にあつたことであるが、比較的京都に近いA県人会に対してB団体が交通費＋アルファとして十数万円という法外な金額を要求し、もし県人会が拒否するとその土地には出演しないということ、県人会としてはすでに準備もしていることであるので、その条件を甘受しなくてはならないという不都合な事件もたびたびあつた。

そして又、県人会にも強力な組織をもつものと弱小なもの、何時も強力な県人会は自由で、何時までたつても弱

小な県人会は音楽会を開催出来ないという不都合を是正し、音楽会開催の機会を均等に与えるというものである。これまで地方音楽会のブロック制とその規制の制定についての原因について話してみたが、現在春、夏休暇には各々三〇ヶ所程度の音楽会開催可能な県人会があり、右音楽団体は最低五、六ヶ所の演奏地をもつように定められている。又この規制が実施されてから未だ日が浅く、こころ、二年はその軽換の過渡期に当るので種々の苦情は出ると思われるが、この規制がスムーズに行われる様になつた場合には地方音楽会が課外活動として立派に運営されると確信している。

以上地方音楽発表会のブロック制とそれに共なる規制について具体的に述べてきたが、音楽団体の先輩、地方の校友諸兄あるいは学生諸君がこの地方音楽会の持つ意味、役割を十分理解して、全同志社的な立場で協力して下さることを期待します。

GLEE CLUB
GLEE CLUB
GLEE CLUB
GLEE CLUB
GLEE CLUB
GLEE CLUB
GLEE CLUB
GLEE CLUB
GLEE CLUB
GLEE CLUB

六十周年事業報告

前委員長 渋谷 廣一

同志社グリークラブの創立六十周年を記念する行事として、特別演奏会、記念誌、レコーディング、先輩名簿編集、式典が最初の計画通り、無事実現出来ることを得ましたのは、大きな喜びであると共に、現役部員は勿論の事、先輩各位の絶大なる御支援の賜ものと、感謝に堪えぬところでございます。ここに厚く御礼申し上げると共に、委員会の歩みを報告させていただきます。

我々現役四回生は、入学時（フレッシュ）の時から「お前等が四回生の年はグリーの六十周年の記念すべき年だからしつかりせなあかん」と、何度も聞かされて来、我々もそれなりに責任を感じて来ましたが、経験や、先輩各位とのつながりもなく、ただなんとなくミテイングを開いたりして、互いに自覚を深めあつてはいたものの、何の具体策もないまま、いたずらに二年間を過してしまいました。我々が、三回生になつた時、こんなじやどうしようもないからと云う事で、四月の十三日に唐崎ハウスで顧問の遠藤彰先生をお招ねぎして、三回生だけの合宿を持ち、その席で、行事企画目標として、

- 一、記念誌編纂
- 一、楽譜編集
- 一、特別会計

山田至孝
竹上一郎
林 泰夫

一、レコーディング

一、園遊会

一、名簿再編集

一、ステージコート新調

伊達 宣
川北純二
内藤秀樹
奥野晋生

と、七項目を提議し、その内、やれるだけやろうと云う事になり、下に記したチーフ（都合上、チーフが変つた所もあります）が、最終決定のチーフ（を記）を選出して、早速行動に移ろうと云う事になつたのですが、前回五十周年の記念行事記録、参考資料が、グリーにも、グリーメンにも、グリーメンの身の廻りにもまるでなく、又、これらチーフも歌が好きで集つたグリーメンの一人であるだけで、各々専門的知識、経験があるわけではなく、まるで闇を手さぐりで歩いているような日々を送り、その間、片桐哲先生にお会いしたり、資料を集めたり、現技術顧問の福永陽一郎先生に相談をもちかけたりしながらも、目立つた進展もないまま、九月に入つてしまいました。そこで、我々委員会は、まず、この行事をスムーズに進めやすくするには、名簿作成と、寄付金集めにしぼつて、基礎を固める必要があると云う結論に達し、それに全力をそいで行く事にして、グリー委員会を開いたりして動き出した所、十月の二十六日に、クロバー委員会との面談の機会を得まして、先輩との相談、連絡等の便宜を計れるように、クロバー、グリーの合同委員会を開いて行く事にして、我々委員会を開いて行く事にして、我々委員会の動きも新しく展開して行つたのであります。そして、この合同委員会は、現状報告、相談と云う型を取つて行なわれて来ました。

一方、現役委員は各々、出版社にかけ合つたり、記事を集めたり、先輩のお宅にうかがつて、行事説明かたがた寄

付を集めたりしながら、今年六月二十八日の最終合同委員会（我々四回生委員との）、六月二十日の委員引次ぎまでこぎつけて来ました。

この間約一年を振り返つてみて、我々は、寄付金集めに奔走し、先輩との意志疎通を計り、名簿を整理すると云う基礎固めしか出来なかつた事を残念に思うと共に、三回生委員諸君の頑張りと言フアイトに敬意を表したい気持ちです。尚、ステージコートは、夏季合宿の折、全部員にはかつた結果、その必要なしと云う声が大でしたので、取り下げて、チーフの奥野君はフリーの形でそのまま委員会に残つて頑張つてもらいました。

最後にクロバーの委員の御名前を、記しておきます。

- | | |
|---------|---------|
| 一、松本寛二 | 一、森田秀夫 |
| 一、森 義文 | 一、佐藤道雄 |
| 一、中井正和 | 一、大谷九二男 |
| 一、渡辺謙之助 | 一、織田幹雄 |
| 一、小田泰弘 | 一、脇地 駿 |

（以上敬称略）

委員長

小 亀

豊

私共、同志社グリークラブ創立六〇周年目の記念すべきかかる重要な時期に最も良く活動し得、且つ指導的位置に、三年のグリーメンの一員として現在在籍しているという事は、我ながら多かれ少かれ不安とその責任の絶大さを抱え、同時に、最幸福者と自ら痛感せざるを得ないので、

所で、この六〇周年を記念して種々なる記念事業を企画し実行致す事になりましたが、この記念事業の企画のいきさつ及び内容は先きの企画委員会報告で既に周知されて居りますが、企画委員会の後を継いで新しく組織されました実行委員会の進行状態及び内容を各事業毎に報告させて頂きます。

我々実行委員会が組織されましたのは、今年の六月定期総会に於ける新旧委員会入れ替え時に、企画委員会を引き継いで記念事業実行委員会として発足し活動し始めました。いざ、引き継いで見たものの、新委員会の構成するスタッフは、各事業に殆んど無知に等しく、その方面には完くの素人で前の企画委員会の集めた資料や漠然とした計画をいづれから手を加え、如何に運営すれば良いのか分らない状態にあり、それに付け加え、相談相手である前委員会の方々も就職戦線で忙しくなり、合同ミーティングを持ち見当する機会も殆んどなく、混々とした状態で夏期演奏旅行出発を余儀なくされたのでした。

しかし、約二ヶ月程のブランクの後、九月に入つてからは、クロバーとの合同委員会（前記）を度々重ね、その先輩方の温い協力により各員の仕事は急激な方向にたどり着いたが、やはり我々がいづれの事業を行うにしろ、その根底となる資金の裏付けがなければ、いかんともし難く、当然予算を組み、資金繰りを試みた上で、万事進める事にしました。何しろ運転資金である寄付金集金が、三十万円（目標額に概に到達しているが）であるので、問題点は、運転資金を如何に回転せしめ、如何程回収出来るかという点にしばらくはありました。そもそもこの記念事業は、かゝる六〇周年を機会に、その回収金を今後、七〇、八〇周年、

否、百周年の時にいざ行われるであろう所の記念事業の際の運転資金に、又以前から片桐先生の強唱されている所のグリーライブラリー、いわゆるグリー記念会館建設の多量なりとも基金にと貯蓄して行かねばならないという観点のもとに進められたのです。

記念誌編集

影田武道

レコーディング

名簿再編集

石田嘉彦

楽譜編集

大原康弘

園遊会

小亀 豊

グリー・クロバー

上田正治

合同演奏会

工藤宣雄
(副渉外)

特別会計

村西耕爾

委員長

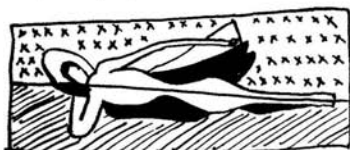
小亀 豊

以上八名

扱て、記念事業の11月現在の状態と今後の概算を発表して見ると、この事業に於ける最も不可欠且つ注目すべき寄付金の10月末迄の集金状況は、寄付者総数二百六名(内、先輩二百三名、他三名)で銀行利子等を含めて、総収入三拾六万二千二百四円で、これは、企画当初の見積額を、約六万円で上回ったが、支出面は、交通費、諸雑費等を総計すると、七万二千五百七拾五円で、現在手許金額は、二十八万九千六百二十九円で、園遊会のある十二月迄は、今後これ以上寄付入金金は余り見込まれないので、以上実質入金金は約二十九万円と云った思わく通りの成果であります。記念誌は、既に三十周年及び五十周年時に於いて発刊され、グリー創世時代より五十周年迄の全容が明らかにされて

いるので、今記念誌は、五十年から六十年に於ける近年グリーを重点的に編集して見ました。この発刊部数は、三百部で、定価二百円にて発売する予定であります。次に先輩名簿再編集では、これは、グリー現役と、先輩諸兄を結ぶ唯一のたずなとも云うべき重要な位置を占め、寄付金募集はもちろんの事、各事業を遂行して行く上に、その根源となるが故に、極力力を注いで来ましたが先輩総数五百三十五名、明確者数五百十名(死亡者四名含む)となりました。今回は、年度別に配列し、現役部員も同時にのせる事になりました。次にレコーディングは、記念事業に於ける最有力収入源と見なされると同時に、最も危険をともしない冒険的、事業である。というのは、この売れ行きいかんによつて、この事業の黒赤が決定するからであります。これは、各所の記念定期演奏会の生の演奏を録音した内より抜翠し、限定版にて五百枚発行します。(LP三〇cmモノラル版、単価千円)曲目内容は、カレツジソング、大学歌、部歌、そして荘厳ミサ曲(アルベル・デュオバ)、シューベルト歌曲、フランス民謡(福永陽一郎編曲)、黒人霊歌(福永陽一郎編曲)、組曲「わが歳月」(大中恩作曲)の中より抜翠したものです。尚、「わが歳月」は、同志社グリー六十周年を記念して、大中恩氏に作曲して頂き、本邦初演です。楽譜編集は、企画時に編集し、限定版或いは、市販に大なる赤字が、確固と見られ、経済的不可能にあり、今回は止むなく、取り下げに到りましたが、収集された楽譜曲数は、二百曲余に達し、過去五十九年間のクラブ使用譜が、当部に収集されたのみにあつても、意義深き事とされましよう。そして今後もお楽譜編集を続け、発刊の余地を見

当し続けて行く意向であります。又グリ！クロバ！合同演奏会（十二月十三日午後二時）並びに、園遊会（同午後五時）は、云う迄もなく、先輩諸兄と現役グリーメンが一堂に会し、相互に、兄貴分、弟分として楽しくハモリ語らい、六十周年グリーを、供に祝すという祭り事でありますが、演奏会は、栄光館で、グリー、クロバ！各二ステージ、合同演奏ステージ。園遊会は、岡崎公会堂で、ビュツフエ式で行う予定になつています。以上、記念事業の進行状態と予定を簡単にまとめて見ましたが、いづれも結果ではなく、現在運行中にあり、必ずや、成功裡に終ると確信して止まない所であります。そしてこの事業の欠算報告は、来春先輩諸兄に郵送する予定であります。この事業を實行するに当り、右腕左腕になり指導して下さいましたクロバ！委員の方々はもちろんの事、絶大なる協力をお寄せ下さいました先輩諸兄、企画委員会、各関係方面の皆様は深く感謝の意を表す次第でございます。



◇ — お し ら せ — ◇

同志社グリークラブ創立60周年

記念レコード発売御案内

内 容：記念演奏会録音抜萃、モノラルLP 30cm豪華版

カレッジ・ソング、大学歌、ミサ・シューベルト、フランス民謡、黒

人霊歌その他

値 段：¥ 1,000

発売期日：昭和40年1月中旬

申込期日：11月1日より申込受付中

詳細は新島記念会館ボックスへ手紙で御連絡下さい。

「ヴィーンにて」

遠藤 彰

この夏、わたくしは機会を得てヴィーンを訪ねることができた。

西のバリ、東のヴィーンとうたわれたその町の美しさはまことにたえようもないものであつた。ルイ王家に対比されるハプスブルク王家の盛時を思わせる各種各様の文化財は全市を覆う感があつた。ベルヴェデーレ宮殿の豪華さやシューンブルン離宮の壮麗さは、わたくしの眼を樂しませてくれた。しかし、それらのものはわたくしの心をゆり動かすような感動を与えるものではなかつた。

ヴィーンにおける最大の感動は、かつてこの町に住み、活動し、そして死んだ音楽家たちの面影に接したときにやつて来た。ホーフブルクの巨大な殿堂のかたわらにある小さな公園に、モーツアルトの石像が立つていた。彼は、片手にペンをもち反対の手を譜面におき、幼い天使たちに囲まれながら夕闇の木立を背に静かに立つていた。平和そのものの姿であつた。しかし、彼の住いを聖シユテファン教会の裏小路に見出したとき、わたくしの胸は詰つてしまつた。薄汚いゴミゴミした露地の二階、終日陽光のさしこむこともない粗末な三部屋が彼の住いであつた。

ヴィーンにはベートーヴェンの家といわれるものが幾十かあると聞かされた。それは、家賃を満足に払えぬ彼が次々に追われて移り住んだ仮寓であつた。わたくしは、その一つ、ブルク劇場の近く、ヴィーン大学を見下すちよつと

した高台の上にある家を訪ねた。陰気で急ならせん状の階段を息をきらせながら五階まで昇つたところに、二間しかない彼の住いがあつた。マホガニーのピアノが置かれてあるほかは、見るべきものとしてない。洗面所も便所もない。ここで彼は、その後期のピアノソナタの幾つかを生み出したのであつた。

シュューベルトの家は、市の中心部から北郊に抜けるヌツスドルフアー街に面して立つていた。彼の家族は二階住いで、彼は十四人兄弟の十三番目であつた。案内の婦人が「彼はここで生れたのです」と言つたそこは台所であつた。ベートーヴェンの葬列にたいまつを捧げ涙を流しつつ柩を護つて歩いたその翌年彼はチブスのため三十一才をもつてあえなくも世を去つた。父親の名によるフランツ・シュューベルトの告別式通知状を陳列ケースに見出したとき、わたくしの眼は涙にかすんでしまつた。

暑い陽ざしの外へ出て一人歩きながら、遠いヴィーンまでやつて来たことをこの上なく嬉しく思つた。



ロンドンにて

今藤 繁

(昭四大経卒)

この六月のはじめ、私は旅行の途中、ロンドンに立ち寄った。ロンドンでは、かねて中島完治君を訪ねたいと思つていた。

中島君の働いているBBCは私の泊つたワルドルフホテルとは目と鼻のすぐ向い側であつた。翌日、約束の時間にホテルに来てくれ、しばらく見ぬ間に立派になつて、奇麗な英語をしゃべるのに感心した。

同君の貰いたての真赤なオースチンで街に出かけることにした。ハロツド百貨店や、ダンヒル、エーガー、バーバリー等の専門店をみて廻つた。BBCの仕事場を見るのも楽しみの一つであつた。極東班とでもいつた部門で日本人が三人、一諸に働いている部長の秘書だという可愛いお嬢さんと何か打合せをしている。日本に向けて、自分で資料を集め、作文して、これを放送し、或は録音するのである。ガラス張りの外から、中で仕事している様子を見ておれという。時には映画やテレビの日本語の吹き替えなどもやつているらしい。これは本業以外のアルバイトだが、自分の定められた時間以外のこういうアルバイトは公認で、事務所の掲示板にもこの様な仕事の申込みを募集している。ちよつと日本流の考え方からは、変つているが面白い。夜二人で、ミュージカルを見に行くことにした。実は前の晩も私は一人で、ストランドという劇場に「フアンニール・シンクス」というミュージカルを見ていた。「フアンニール・シンクス」は私の印象から「世にも不思議な物語」とでも訳そうか、フランキー・ホワードとその一座の美事な歌とコーラスとギャグといおうか、終始楽しく笑い続けた。勿論言葉は解りにくいが所作と動きの大きさに客席の人達と一緒に笑うことが出来てありがたかつた。

それを中島君に話しながらあれこれとさがして決めたのがパレス劇場の「ザ・サウンド・オブ・ミュージック」であつた。主題歌はドレミの歌で宮城まり子や、ベギー・葉山が歌つて日本でももうかなり歌われている歌だがここですでに四年間続演中であつた。

この暮間、ロビーで、ふと立派な初老の紳士に、私は握手を求められた。私の胸につけているロータリーの記章がとりもつたのである。「今日の昼、自分はバンタラス・クラブの例会に出席した」というと「それは惜しいことをした、自分もあすこのメンバーで今日は都合で欠席した」という。横には清楚に飾っている夫人と、令嬢がいた。中島君が私の息子に間違えられたのは愉快だつた。「ミュージックは好きですか」という問に対して中島君は「大好きだ、こちらにも、こちらの息子も、自分も、同じ大学グリークラブの出だ」と答えた。奥さんも、お嬢さんも、終始ひかえ目の微笑をたたえながら、私達と一諸の会話の中にとけあつてゐる様子だつた。中島君にはホテルまで送つて貰つて二人で乾杯した。私は帰国してすぐの、七月大阪で催すクローバーのプログラムを送る約束をした、同君はまだ、織田君の結婚を知らなかつたらしく「ドレミの歌」の楽譜に、祝いをかいて私に託した。

織田君 昭二五 大政卒
今藤 Jr. # 三一 大経 # 中島君 昭三〇 大経卒

私の役割とグリーの将来

福 永 陽一郎

私が、グリーをてつだうようになって一番最初にしたのは、「音楽は生きている」と感じさせることでした。一九六一年のフェアウェルコンサートで「赤とんぼ」を指揮したとき、私は責任の重さに、からだがふるえたのを、今でもおぼえています。それは、「グリー」にとって、全く久方ぶりに、本物の指揮者に指揮される、ほとんどの当時の団員にとっては、全く初めての機会だったのです。私は、わずかに三分ほどの間に、「音楽とは本当は何か」ということを、確実に体得させなければならぬのでした。指揮は本職であるというものの、そうした重大な時には、たして充分なことができる力が、自分にあるのかどうか、自信はありませんでした。そこでは、私は絶対に失敗することが許されていませんでした。私の指揮経験の中で、あれほど緊張したことは少ないと思います。——私は、はっきり目的を達したようでしたけれど。

次に、私は、やたらと大声を出させるやり方が、時代おくれであることを教えなければなりません。舞台での「グリー」の声は、たとえば、当時関西を代表していたKGグリーの、去勢した発声にくらべれば、そんなに悪くありませんでしたが、それでも、ノド声のあからさまな安っぽさが耳について、すでに、東京では一歩先に進んでい

た、共鳴をもった発声を知っている者には、いかにも粗暴にきこえたものです。最初は自分で、そしてすぐに専門家によって、発声のメトリッドを身につけてもらいました。今では、単に発声のときに限ると、日本中で一番声のいい合唱団だと、自慢できるまでになりました。

楽譜の読み方を教えること。このことが、一番大切で、また一番の大仕事でした。楽譜を読むと云っても、それは、音程や音の長さのことはありません。楽譜の音楽的意味を、自分で発見できる力を養うことです。音程にしても、その音が和音の中ではたしている役割を知り、又、音程の移りかたのメロディの中で心理的役割や、エネルギーのコントラストがわかってうたうのでなければ、何にもならないこと。千差万別のリズム型の感じ方。声の大きさにしても、音楽全体の中の相対的な扱い方。記号に対しての感覚的反應。そうしたことを、自発的に歌にできるまでに、ずいぶんかかりました。こういうことは、実際に種々の曲にぶつかりながら体得してゆかなければならないので、理屈ではどうしようもないからです。やっと去年あたりから私が具体的に説明しなくても、一寸暗示するだけで、パターンとしては、すばやく音楽を理解することができるようになったようです。

ここで、やっかいな問題がおこりました。団体として一つの音楽的能力を保持するようになった「グリー」は、どんな曲でも一定のレベルで演奏できるようになり、時によって体調のコンディションの悪さから、技術的に具合の悪い演奏をすることはあっても、音楽的に見当違いな歌をうたうことは、めったになくなったのです。こうなったとき、演奏はおのずからマンネリズムにおちいり、メンバー自身

のあせりにもかかわらず、新鮮な音楽的感動は、逆にめったに得られなくなったのです。そして、それを救うことができるのは、指揮者の個性といった、ブラスアルファだけです。私は、去年あたりから、これ以上は、私が、私以上の指揮者が指揮するしかない、しばしば考えました。学生の中に、河原林君のような天才があらわれれば別ですが、そのようなことが、やたらとおこるわけはありません。ところで、私が「グリー」であたえられている役割は、「指揮者」ではありませんでした。又、実際に京都に住んでいるでもない私に「指揮者」がつとまるわけのものでありません。いろんなジレンマが、私と「グリー」とにおそいかかってきました。ある大学合唱団は、豊富な指導者陣を持ち、指揮者に二人もすぐれた音楽家をまねき、日本の合唱界の先頭をきいています。「グリー」は、関西でこそ、最も進歩した考え方をしており、卒先して、専門家の指導を受け、コンクールに無駄なエネルギーをついやすことを止め、アカデミックな曲目に堂々ととりくみ、合唱界での指導的役割をはたしています。ここでも、「関西は、日本の一地方である」という情けなさを再確認しなければならぬのでしようか。

いっそ、私自身が指揮者でなければよいのにと、思うことさえあります。ヴォイストレーナーの諸先生の方が、よっぽど云いたいことを云っています。私は、音楽監督であり、曲目の選定をしたり、ときには編曲をしたり、「グリー」が音楽的な面で間違った道へ進まないよう目を光らせたり、それが役目であると思う一方で、私が自分で指揮すればもっとうまくゆくと思う心を、どうやって押さえつけたらよいのでしよう。

なにやら、グチめいてきましたが、正直なところ、「グリー」の将来について、確実なこととは何にも云えないような現在の心境です。正しい方向を軌道に乗せている今の「グリー」は、少々のことでは、レベルをおとすようなこととはないと信じられます。又、学生指揮者の能力だって、まだ限界に達したとは思われません。やたらと専門家におんぶするクセがつくのも、好ましいことではありません。指導する専門家が強い性格だと、学生団体としての自主性が喪失されるという現象もあります。

そこで、今、私は離れてみよう、という答えがでてくるわけですが、私と離れて「グリー」がどうなるだろうという予想は全くたふないのです。私なしでやれないような「グリー」には育てなかったという自尊心と、私にできるようなことは誰にもできないという自尊心が、矛盾したまま心の中に同居しています。

しかし、確信を持っていえることは、「グリー」はどんな困難な時期に直面しても、必ず自力で解決するだろうということです。それを信じることで、私は「グリー」の将来に明るい青空を見ています。





クロークラブ十年の歩み

幹事長
松本 寛 二

十八年前の昭和二十一年秋、「同志社イーブ音楽会」に、全国からあつまったグリークラブのOBによる男声合唱が、はじめてプログラムに加えられた。その後、毎年、この男声合唱は、いつとはなく、クロークラブと名付けられ「同志社イーブ」のステージを飾ったものであるところが八年後の昭和二十九年、この無名の男声合唱団は、突如、その名も「クロークラブ」として、関西の合唱界にデビュー、旗上げしたばかりか、翌三十年には、早やくも、日本一の栄冠をかっさらって男をあげ、じらい、日本の合唱界でも、トップレベルに立つ特異な存在となってしまう。一口に言ってクロークラブはこのようにして生まれたのだが、その土台にグリークラブがあつたことを忘れてはならない。同志社グリークラブが創立六十年を迎えた今日、クロークラブも、期せずして創立十年を迎えたわけだが、六十年を祝う記念誌の一隅に、クロークラブの十年の歩みを、もう一度ふり返りながら記録しておくことも大切な。グリークラブの尊い歴史のために……。

昭和二十九年の春、母校同志社グリークラブの創立五十周年記念音楽会を動機に、OB達の集りとして組織化されたのが、クロークラブである。忘れかけた歌を、ただ声をはりあげて歌いたい、それだけを楽しみに集った発足当初は、もちろんメンバーも少なく、週一度の練習も心細い限りだったが、発足した一九五四年の秋、これもただ歌いたさのあまり出場してみた。関西合唱コンクールで、まさかと思つた入賞（三位）が大きかった。たまたまこの年はグリーが一位、初出場のクロークバ

「が三位入賞とあって大変なお祝いさわぎをしたこともなお耳新しいが、この思いもしなかった入賞が、新たな意欲となり、ついに今年で創立十周年、昭和三十一年の第一回演奏会以来、今年で第九回の定期演奏会を開くまでに発展、メンバーも、年々巣立つグリークラブの新卒者を加えて、ついに百名を越す男声合唱団に発展した。

その間、全国合唱コンクールでは連続三回優勝という難れ業をやったのはじめ、毎回ともに上位に入賞、また演奏会でも、今年で九回を数えた地元、大阪での定期公演のほか、東京、名古屋、京都でも単独演奏会を開いて好評を博するなど、一大学のOB合唱団としては考えられないほどの活躍をつづけ、いまや関西はもとより、日本の合唱団でも特異な存在として注目されている。この他、夏の休みや、春の連休を利用した各地への演奏旅行は毎年のように続けられ、今日までに東は遠隔の東北、西は岩国、北は信州の各地、これに近くの東海、中国各地での演奏を加えると、その数は数え切れない。

その部厚いハーモニーと、奔放な歌い方はクローバー特異のスタイルであり、大人の合唱々としての評が高い、また七十才に達した御老体から、二十才そこそこの若輩に至るまで、しかもその中には幾組かの親子組までであるというメンバーの構成も他にはみられないクローバーの誇りとなっている。

創立以来、僅か十年、歴史は亦だ浅いが、その間に築いた数多くの実績に加えて、六十年におよぶ、同志社グリークラブの歴史と伝統をバックにしたクローバークラブは、同志社らしい家族的雰囲気を中心しながら、今後も日本の代表的なアマチュア合唱団として精進をつづけていくこ

とだろう。

なおクローバークラブは、地元京阪神ばかりでなく、昨年から、東京にも大阪に負けじと、東京クローバーが発足、クローバー東京公演のために週一度の練習をつづけるほか、大阪公演にもそろって参加、出演するなど、意欲的な活動をはじめていることを付記しておく。以下クローバークラブ十年の歩みである。

一九五四年 十 年 史

六月、母校同志社グリークラブの創立五十周年記念演奏会に集り、歌つたのが契機となつてクローバー・クラブは新発足した。しかも、その秋、座興のつもりで初出場した関西合唱コンクール（一般の部）で三位に入賞したのだから、みんな驚いた、しかし、これが今日のクローバー・クラブの出発点になつたのである。

一九五五年

出場二度目の関西コンクールでとうとう一位をとり、引続いて初出場した全日本大会（名古屋）でも、ついに優勝してしまつた。この夜おそく、日本一の榮譽を満載した観光バスは、真夜中の東海道を大変な勢いでガイセンした学生（グリー）時代ならともかく、OBになつて、こんな感激を味わうとは夢にも考えないことだつただけに、この初優勝は忘れることの出来ない思い出になつた。この年、はじめて名古屋地方に連休を利用して演奏旅行を行なつた。

一九五六年

コンクールの全国優勝を記念して、クローバー・クラブ第一回演奏会を大阪（産経会館）、京都（同志社栄光館）で開いた。心配した聴衆も、両会場とも超満員、全部員大

いに気を良くして、思う存分歌った。コンクールは昨年につづいて第一位をとり面づくを保つ。岡山地方の演奏旅行はじめ、長井斉先生の楽団生活四十周年記念演奏会、同志社グリー演奏会賛助出演その他で多忙な年だった。

一九五七年

春の連休を利用して、遠く山口県の岩国まで足を伸ばし、岩国音文協主催で演奏会を開いた。お互いに勤め人ばかりなので、せいぜい一泊泊りの旅行しか出来ないのが残念だが、それでも新緑の錦帯橋や宮島を一日たんのうした。

第二回演奏会を五月、大阪と京都で、六月には名古屋の毎日ホールで演奏会を開き好評をうける。

コンクールはいよいよ三年目、さすがに緊張したが、関西、全日本ともに優勝の偉業をたてた。とくに全日本では現役のグリークラブとともに完全優勝を地元、大阪で飾れたことは意義深かつた。犬山・岐阜方面に演奏旅行、またテレビにも初めて出演。

一九五八年

第三回定期演奏会を大阪で開いたあと、コンクール三年連続優勝を記念して、初めて東京に進出した。地元東京の一流合唱団でさえ、会場を満員にすることはむずかしいというのに、クロバーの演奏会は産経の大ホールを超満員にし、関係者を驚かせた。そのため演奏会にも力が入り、大成功だった。九月京都演奏会、十一月のコンクールには関西全日本とも招待演奏の栄にゆき、遠く東北の郡山市まで出かける。とくにその前夜には、クロバークラブを中

心とした前夜祭が開かれた。
一九五九年
コンクールを休んで久しぶりにのんびりした年だった。

それでも六月には大阪で第四回演奏会、七月には東京と名古屋で、それぞれ第二回目の演奏会を開いた。東京も名古屋もなかなかの盛会で大いにハリキった。

一九六〇年

六月二十七日大阪の毎日ホールで第五回記念演奏会を開催、この年の演奏会には、とくに東京コラリアーズの常任指揮者福永陽一郎氏を客演指揮者に招き、われわれだけでは出来ない「南太平洋」を斎藤超とニユーサンズの伴奏で演奏した。

演奏会後の七月末信州に演奏旅行、「美ヶ原」の山ろく九子で演奏会「山に祈る」は絶賛を博した。演奏を終えて、全員そろって観光バスで「美ヶ原」登山、すばらしい山の一日を過ごす。

一九六一年

グリークラブの新卒メンバーを加えて総員百名を越すメンバーになる。五月二十九日毎日新聞社催の大阪芸術祭に関学OBの「新月会」と初の合同演奏を行なった。新月会との合同演奏はかねてからの夢が実現したもので意義深い会であつた。引きつづき七月三日第六回定期演奏会を毎日ホールで開く、難曲といわれるメンデルスゾーンの「芸術の使徒に捧ぐる祝祭歌」はじめスベイン、イタリアの民謡や山の歌など古典や新しい曲をとり入れた他、ABO女声合唱団と共演でロシア民謡を歌う。

一九六二年

創設以来の指揮者日下部君が東京勤務となり心配されたが大放唱の中心メンバーであり同時にクロバーの支柱である岩城恵一君はじめ、河原林昭良君、それに新指揮者勝地駿君の指揮で七月九日第七回目の定期演奏会を毎日ホー

ルで開いた、曲目も日本では初演奏の「イギリスの古い世俗的合唱」(Fest Glee)をはじめロバートショウ合唱曲、黒人靈歌などこれまでとは変ったプログラムとなり、これに羽衣学園OG達の松園合唱団が明るいムードを加えた。なおこの年から京都の国際ホテルではじめてクロイバーと現役グリークラブ合同の新年パーティーは二百名を越す大盛会となる。

一九六三年

三月同志社グリークラブの大阪公演に賛助出演(大阪産経ホール)引きつづき七月一日第八回定期演奏会を毎日ホールで開く、この演奏会には東京から常任指揮者の日下部君も参加、同氏をはじめ野村忠、河原林、脇地君ら、はじめて四人が指揮した。五年前、日本に来たハワイ大学合唱団からとくにクロイバークラブに寄せられた「Ständchen」(Miss A Salve Regina)は本邦初演。九月二十三日四年ぶりに東京に進出、神田の共立講堂で第三回目の東京演奏会を開く、この演奏会は東京在住のクロイバークラブ員の努力によるもので演奏も東京、大阪合同という大阪を廻る大メンバー、久々の東京公演とあつて心配されたが前記小泉氏の批評のとおり好演奏、聴衆もほぼ満員の入りに大いに気を良くして帰阪した。これを契機に今後は毎年東京でも演奏会を開くことに決める。

一九六四年

創設十周年を迎え、七月六日毎日ホールで記念演奏会(第九回定期)を開催。これより先、三月にはキリスト教大学グリー部の京都公演に賛助出演シューベルト三曲を歌う、久々の京都のステージメンバーは少なかつたが、なかなかの力演で好評だつた。

十周年記念を兼ねた第四回目の東京公演は、東京オリシックスの關係で明年一月十六日に延ばし文教ホールで開くことに決つてゐる。

なお今年同志社グリークラブの創立六十周年に当るため、十二月十三日栄光館でグリー・クロイバー合同の記念演奏会を開く予定。

合唱音楽を楽しんで四十五年

橘 威

同志社グリークラブ六十年、クロイバークラブ十年の年を迎えて心からお喜び申し上げます。老生は合唱趣味一つに長い過去を歩いてきただけに、この年月の貴重さを痛感します。

これだけの歴史を積み重ねて成長した同志社グリークラブの多くの先輩諸君が多大な社会的制約の下に困難な苦勞と努力を続けてきたことを思うと全く頭の下る思いがします。そしてこの大団体を背負つた現役部員諸君の責任と、より以上の声価を後続部員に引継ぐ努力とそのフアイトを思うと大きな感激であります。

この日度い記念誌を飾る多くの敬愛する諸君の祝詞や感想、激励の記事の一隅に先生の合唱歴を書くことは恐縮ですが今年七十才の馬齢を加えてまだクロイバークラブに参加して半年分の発声で文字通りお邪魔をしている一人の人間との批判を甘受しながら引退できぬ人間の合唱経歴を書くことは一方関西に於ける民間人の男声合唱の歴史の一部をたどることにもなると思うのでお許しを得たい。

大正八年ブリムローズクラブのバトンをゆづつて兵役につき大正十一年神戸市立図書館に就職、大正十二年三月同好者数名でセレスティーナ男声合唱団を組織、当時宝塚歌劇団指揮者ラスカ氏、高木氏、クレイン氏等の指導を受け、大正十五年と昭和三年の二回宝塚で関西合唱コンクールに優勝、初期のBK放送で三越の屋上に放送室のあつた頃から男声合唱の放送では最多の記録を持っていました。名古屋、高知、岡山等の演奏会はアマチュア団体の少かつた当時としては珍らしい経験でした。昭和十六年末戦時軍歌放送を最後に沈黙、部員も幾変転、歌友三名の死去に痛ましい体験もしました。昭和二十四年あのアンサンブルを忘れされぬ旧友五・六名旧地神戸に会しセレスティーナ合唱団の復活を計り、その頃神戸女学院教授のフォーロー氏の指導を得て、昭和二十六年、神戸商工会議所ホールで三十周年記念演奏会を催した。戦後合唱会は技術的にも目ざましい進歩を示し、既に老境に入つたこの連中もただ好きな趣味に生きる団体として現在六十才以上のもの六名を含む十数名で教会奉仕を使命として楽しく歌っています。合唱界の隅の捨石として我々は一生を連中と共に終りたいと念願しています。

今これを回想して四十数年の存続を少しでも誇り得るものがあるとすればそれは一つに経営に当る委員に人を得たこと、既に当団創立者寺西頌一君のあつたこと、同君は現に六十五才のテナーとして又世話役として終始変らぬ熱意を以てこの合唱団を守っていることは正にクンシンヨーに値すると思います。同時に思うことはクローバークラブの幹事長松本寛二君

の存在であります。百名近いこの合唱団を今日にあらしめた同君の力量は数十倍の強さであることと思います。世話役にその人を得るか得ないかによつていかに多くの合唱団が今までに消滅したかは識者の肝銘するところでありましよう。

献文を連ねて貴重な誌面をけがして申訳けありません。然し老生としてはかくの如き名もなき合唱団が神戸の片隅に四十数年現存し諸君の大発展を心から祈っていることを申上げたかつたのであります。

合せてクローバークラブの諸兄、どうかこの十年を第一段階として更に第二段に向つて大躍進せられんことを念願してやみませぬ。



編集後記

私達編集委員は、未熟な腕を振いながらも、張り切つて編集に取りかかりました。過去の記録を参考にしながらもなお一層新鮮味のある内容のものを……と心がけたわけですが、何しろ、素人ばかりのことです。で、仕事の要領もわからず、予想以上の難問が続きましたが、各方面の皆さまのおかげで、まがりなりにも完成出来ました。このことを感謝して存じます。内容や、校正等で不十分な所が、お目につくことと存知ますが、その点は、御容謝下さるようお願い申し上げます。

振り返りますと、昨年の四月に、この行事が企画され、資料を集めたり、先生方の御意見をうかがつたり、経験者と面談したりしながら、今年を迎え、一月に一応、流れと云うものを決め、(この本には、同志社の味を出したい……と云うことで、新島先生関係の本をあさつたりして、同志社を知る事に、努めました)試験終了後、記事を集め始めましたが、当方の不手際で、主旨が、筆者諸兄に伝わらず最初の計画とは、だんだん違つた方向を取りながらも、その間、片桐先生、遠藤先生を始め、福永先生、中村先生、大久保先生、日下部先生、又、資料をお貸し願つた先輩方又、一年間以上も、一緒に苦勞していただいた、クローバーの先輩方等々と、数多くの方々から御支援いただき、やつと六月にたどりつきました。その後、六月の改選で、三年生の影田君が選出され、その持前のフアイトを、大いに發揮され、今日迄、僕等は彼の下で振り廻される事になったのです。(山田記)

山田兄の後を引き継いだものの小生編集に関しては全く

の素人、何をやつて良いのかサツパリ解らず、これは大変な仕事を引き受けたものだと思つた。これは大変な仕事を引き受けたものだと思つた。これは大変な仕事を引き受けたものだと思つた。

ボンヤリともしては居れず、九月に入つて本格的な仕事を開始いたしました。その時はまだ原稿はさ程度しか集まつていなかったもので、只ガムシヤラに原稿を集めることに専念しました。

先輩に原稿を依頼したのですが、丁度東京オリンピックとぶつかつり世の中は一億総オリンピックの時、そのためか原稿が集らず朝、目をさましたらすぐ郵便入を見るという日課が続きました。印刷屋も、もう決まなくてはいならず、京都市内を捜し歩いたのですが、大変高く困つていた所、森義文先輩からこの会社を紹介していただき大変助かつたしいです。

原稿の集りが遅れたため、十月下旬より本格的な編集に取りかかり、ここで再び山田兄と渋谷兄に編集委員として手助けしていただきました。渋谷兄の下宿で濃いコーヒーを飲みながら数回徹夜もやりました。眼がさまして夜中の三時ごろマージャンをやつたのは唯一の楽しい思い出です。ここで問題になつたのは、七月に編集部が先輩諸兄にハガキで近況をお知らせ下さいとお願ひしたのですが、その返事が数通しかなく、又こちらの不手際で文意が良く通じなかつたのか内容の違つた返事が数通あり、編集部が予定していた記事(先輩諸兄の近況特集)が出来なくなつてしまいました。それで三人で相談した決果止むなく割愛させていただきました。原稿を送つていただいた先輩には誠に気の毒ですがどうか御容謝の程をお願いいたします。

最後に資料を貸して下さつた先輩方、難問題に心良く相談に乗つて下さつたOBの六十周年委員会の方々、原稿を書いて下さつた方々に心からお礼を申し上げます。影田記

同志社グリークラブ

創立六十周年記念誌

昭和三十九年十二月五日印刷
昭和三十九年十二月十日発行

非売品

発行所
グリークラブ幹事長
小室泰司

編集者
記念誌編集委員長
影田武道

印刷所
株式会社
関西桜井広済堂
大阪市西区京町堀一ノ二五六
(中谷ビル)
大阪(四四三) 代六三九一

発行所
同志社グリークラブ
京都市上京区烏丸今出川上ル
同志社大学新島記念館内
(電44六一七一三)

